

川柳塔

平成十三年十二月一日発行（毎月一日発行）
 創刊大正十三年 通卷八九五号



白川協加盟

No. 895

十二月号

寒中見舞募集

○本誌平成十四年二月号掲載

○締切 十二月二十三日

川柳塔社事務所宛

予告

◎テストケースとして厳冬期の本社句会を次の通り変更します

平成十三年十二月 七日(金) 午後一時～五時

平成十四年 一月十五日(火) 午後一時～五時

平成十四年 二月 六日(水) 午後一時～五時

何れも締切りは二時半

アウィーナ大阪 四階 金剛東

◎川柳塔九〇〇号記念川柳大会

平成十四年五月四日(土)

アウィーナ大阪

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8
TEL 06-6658-8741(代) FAX 06-6652-2928

ぐんま・2001

河内天笑

第16回国民文化祭、ぐんま・2001の文芸祭川柳大会が、十一月十一日に吉井町の体育館で開催されました。

吉井町は東京から上越新幹線で約一時間の高崎駅から、さらに上信電鉄で二十分ほどの静かな町です。来年、第17回国民文化祭、とつとり・2002の開かれる鹿野町とは、空気がおいしいところや、近くに温泉が沢山あることなど、立地条件がとても似ていると感じました。

小・中学生の部「雷」の選を控え、前日宿泊場所の町立牛伏ドリムセンターで、進行の打合せ事項を綿密にチェック、本番に備えました。

盛会の前夜祭終了後、加茂如水氏（川柳庭の会）の一行約二十人の宴にお誘いを受け、磯野いさむ番傘主幹と共に飲

談の輪に入れていただきました。

翌朝、同室の江畑哲男氏（東葛川柳社）と本田智彦氏（日川協事務局長）が口を揃えて私に、「これまで知ってる中で一番激しい軒」だったと言われました。

十四、五年前に、「風の会」で金築雨学氏に招かれた時、同宿の樋口仁氏は私の軒にたまらず、廊下へ布団を移して避難されたそうです。また、数年前の岡山県川柳大会で、寺尾俊平先生宅に泊めていただいた折は、深夜まで牌を並べたあと床につき、翌朝先生がサイフォンを片手に起こしにきてくれました。すると薫風先生は「いまから寝させてもらいまっせ。前門の狼、後門の虎で一睡も出来なんだワ」。

そういえば俊平先生も豪快な軒でした。天国でもあの軒かいてはるんでしょとか。余談はさておき、いよいよ大会当日は八六三名を迎え午前十時半に開会。開会の挨拶では、(社)全日本川柳協会仲川たけし会長の「西村在我氏の遺言」が印象的

でした。それは「川柳の発展に役立ててほしい」と、百万円を寄付されたことと、戒名が「川柳在我」であったことです。

十一時から事前投句の選者七人により秀逸及び特選の披露・感想・総評などが行なわれ、午前の部は終了しました。

午後は当日投句分披露に続いて、体育館と廊下でつながった産業文化会館の大ホールで、アトラクションが催されました。我々選者及び来賓は、緋毛氈でお抹茶の接待を受けながらの見物です。六百年の歴史をもつ古武道「馬庭念流」の模範演技が披露され、笛と太鼓のバックで八木節の踊りが何組も登場し拍手喝采。ここで次期開催地の鹿野町から川瀬保男町長、県川柳協会長小林由多香氏ほか五名が登場。とつとり・2002への熱のこもった町長の挨拶には大きな拍手があり、来年十月二十六日への確かな手応えを得られたようでした。

来年は皆さんと大学して秋の鹿野町へ参りましょう。



川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ぐんま・2001	河内天笑	(1)
私の財産	川上大輪	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	(4)
自選集	板尾岳人選	(59)
水煙抄	波多野五楽庵選	(89)
同人特集 歳末風景百句	宮崎シマ子	(92)
愛染帖	驚見正子	(102)
秀句鑑賞 水煙抄		(94)
俳風柳多留二四篇研究		36

私の財産

川上大輪



私の手元には昭和四十五年四月(No.五一五号)であるが印刷のミスで五十五号になっているから現在までの川柳塔誌が一冊も欠ける事なくずらつと揃っている。

初めて私の雑誌が川柳塔誌に載ったのは(各地柳壇は除く)昭和四十六年五月(No.五二八号)で、まだ「近作柳壇」であった。

選者は川村好郎先生で

親しさは応接間からお茶の間へ

という一句を何とか抜いていたのだ。

私が川柳塔に投句をするようになったのは富湖の父、大矢十郎氏の影響であるが、当時十郎氏は『番傘』にも投句をしており、榎本聰夢先生とも親交があり、また『川柳塔』の垂井葵水先生、野村太茂津先生とも親交が深かったのだ。ご本人は『番傘』に行こうか『川柳塔』に行こうかと迷っておられたところ昭和四十五年葵水、太茂津両先生が「川柳わかやま」を発足させたのをきっかけ

茴香の花

「未 完」

一路集「ノルマ」

「ゆっくり」

初歩教室「粒」

■エッセー「川柳の山頭火」鬼遊先生

十一月本社句会

各地柳壇（住句地十選／宮尾みのり）

柳界展望

十二月各地句会案内

■編集後記

宮西弥生選……(96)

山口美穂選……(98)

島ひかる選……(98)

寺井東雲選……(99)

吐田公一……(100)

酒井一壺……(103)

……(104)

……(108)

……(124)

……(126)

楓楽・朱夏……(128)

座右の句

生きてゆく台詞を今日もまたとちり

(鬼遊)

私の句

曼陀羅を見ているような遠花火

中澤伽羅

に全面的に協力することとなり次第に『川柳塔』へ傾いていった。そんな訳で私も十郎氏の後を追うように『川柳塔』への投句が始まった訳である。もし十郎氏が『番傘』に行っておれば当然私も『番傘』に行っていたはずである。

少しずつでも句が抜けるようになると楽しいもので、持ち前の好奇心が頭を掻げ、『ふあうす』や『きやり』など他の柳社にも投句をするようになったが、熱しやすく冷めやすいのが私の欠点で、一年か二年ぐらいで止めてしまった、と言うのも川柳塔でもっと基礎を勉強しなければと思ったからである。

それからは毎月の秀句鑑賞欄で、どんな句が秀句に選ばれているのか、句の組み立てや着眼、言葉の使い方など、どこが良いのかを自分なりに勉強させていただき、十郎氏からも貪欲に出来る限りの事を吸収していった。しかし川柳の奥は深く、未だに自分の句はふらふらと不安定で、これという句風は確立していないが、ある程度の基礎は出来てきたのではないかと思っている。

今こうして川柳を続けていられるのも、十郎氏、富湖のお陰であることには間違いないが、同時に手元にある三百八十冊あまりの『川柳塔』誌のお陰でもある。引越しの度に捨てようかと思った事もあるが、今では貴重な財産となっている。



河内天笑選

吹田市 山本 希久子

搭乗券は激突のビルの下

午がもう追いかけてくる急がねば

ぼろぼろになって下流に着く噂

目はそらさぬ疚しきことは何もし

見たい聞きたい欲と余生を生き延びる

目に見えぬ温度差がある群れの中

河内長野市 加島 由一

山で三年海で三年フリーター

予定などないけど髭を剃っている

踏み込まず離れすぎにいる夫婦

恋の数だけ歌が上手になるそう

バラ色を主に未来図を描いている

検診の結果どつこも悪くない

川崎市 和泉 あかり

豪雨去り先ずは郵便受けを拭く

バーゲンの服に個性を足して着る

通り抜けを金木犀が呼び止める

巣立つ日も近くおふくろなどと呼び

手の届くところとときめき置いておく

風は火を火は風を呼ぶ予感する

鳥取県 新家 完司

生きている人を従え霊柩車

茶の温度さえも喧嘩の種になる

善人がいる砂漠の中の樹の如く

悪人も楽しんでいる笛太鼓

鉄塔のクラスが街を睥睨する

囚人の囚という字を嫌い抜く

弘前市 高瀬 霜石

自由奔放四隅に落とし穴がある

父さんとがっぷり四ツに組んだ酒

死神がひーふーみーでやってくる

言う時はきつちりと言う丸い石

右見ても左を見ても金がない

知りたいが知らない方がいいヒ・ミ・ツ

富山市 島 ひかる

檜の穂先で夕日の唄がしみじみと

雲海の下は絶え間のない戦

ミサイルの向きが平和を脅かす

難民の子等の光っている瞳

和平への願いを込める鐘の音

十二月邪心を一つずつ洗う

箕面市 岩 津 ようじ

日の丸を振りに行くのか印度洋

傘寿同士まだ覚えてる防空壕

ヤダネったらヤダネ戦争まっぴらや

松茸の付録にされた牛ロース

飢餓の子に申し訳なく食べ残す

病院はサービス業とナースたち

富田林市 藤 田 泰 子

二人きり言葉が邪魔な時がある

一線を越えると恋も汚れだす

棘のないバラばかりなりきれいごと

角々に信号がありあみだくじ

白髪のまま七年の喪に服す

しがらみはみな断ち切ろう古稀の坂

富田林市 片 岡 智恵子

解る言葉で話す人柄野依さん

ミサイルが騒ぐ鈍感ではおれず

草木染め泥染め夢はまだ女

順調にきて相棒が邪魔になる

辻褄の合わない嘘が多すぎる

手さぐりでふたりの道も半世紀

富田林市 中 井 ア キ

ありがとう今日は閉店セールです

辞書繰って赤いもしもを探してる

マンネリの胸に揺さぶりがけている

叱られる予感 正座をしています

ほろほろの辞書に秋の日預け切る

慟哭のあげくおんなは蝶になる

藤井寺市 高 田 美代子

急がなくても一度だけなら皆死ねる

死にたいよーと弱虫が泣いている

ブスツとしていよう期待裏切られ

百歳まで生きる自信はないけれど

元気になあれ元気におなり千羽鶴

少し狂って赤いセーターでも着よう

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

真心を込めて祝の字が書けた

柿と栗いだきものを籠に盛る

自転車で行きは良い良い坂下る

暫くはカバンの傷を撫でていた

花の無い季節は恋の歌うたう
十六夜を他所のお方と愛でるなり

藤井寺市 楠 昭子

適当に散らかしていて人が寄り
生きたとはやっぱり動き回らねば
夏まつり済んで小さな秋が見え
泣き笑い丸ごと泣いたわけでなし
幸せならいいではないの青テント
グラスの底に少し残っている未練

東大阪市 谷 口 義

留守ですと言うて帰っていたいた
いくつまで生きると聞かれても困る
弾けない柘榴は中で腐つて
干し葡萄は怒っているのではないか
遊んでる時はフル回転する頭
繃帯を一人で巻いて月を見る

羽曳野市 三 好 専 平

眼鏡拭く 心のなかを拭くように
コスモスがクレヨン箱をぶちまける
風媒花悲しいときもあるだろう
数学と詩は透明な海に似る
反省をすればするほど気が滅入り
病院に行つて悟りを捨ててくる

羽曳野市 徳 山 みつこ

謝罪会見あつてはならぬこといつも
沿線へどうぞと駅も紅葉する

カメラにはすぐいい顔向ける癖
牛井よりも高いコーヒー飲んで
一緒ならどんな坂でも怖くない
地球儀に狼煙が増えたまま暮れる

羽曳野市 安芸田 泰 子

不器用の手から逃した青い鳥
本当の歳を教えている背中
口出しをして責任を引つ被る
聞き流すことにも慣れて丸く老い
旅誘うチラシが溜まる小抽出し
コスモスの中に居るらし子等の声

八尾市 村 上 ミツ子

忘却という薬全然効いてこぬ
へそくりをする楽しみがなくなつた
口はさむチャンスがうまくつかめない
聞こえない分らないから笑つとく
いつまでも下りてくれない肩の荷だ
戦争と平和 茶の間に同居して

八尾市 宮 崎 シマ子

妻の留守こんなチャンスは見逃さぬ
友達を百人持っている強み
信じてる夫へ朝の靴揃え
顔触れが揃うと酒の舟がでる
先客の匂いが少しあるタクシー
村には村の九条があり犯されぬ

八尾市 神原 まさと

台風がさらって行った蟬の声
遠足の子を待っている松ぼくり
みかん柿猛暑に耐えた身に嬉し
秋らしくなったと風邪を引いている
人の靴履いて気付かぬほど惚ける
ぶらぶらと暮し疲れを溜めている

寝屋川市 平松 かすみ

ドラマではないです弾が飛んでいる
深入りはよして 戦争体験者
思い出は勤勞奉仕ばかりなり
深刻な世相へ祈ることばかり
始まりはただただ憎いテロ四機
ストツプをかけて神様仏様

寝屋川市 江口 度

高い堀キリンの首に覗かれる
砂の塔崩れて冬の絵にもどる
つくられた人気にあぐらかいている
はなやかでやがて空しい散り紅葉
突き刺さる言葉に温い風がある
それとなくシルバーシート見てしまう

枚方市 海老池 洋

宇宙から地球を撮れば泣いている
おいぼれて半分残すかき氷

恋人の他はきれいに撮れていた
黴のきた頭 新刊書で洗う

満月にこの世あの世を思うなり
もう余生ピントを甘くして生きる

枚方市 宮川 珠笑

裏切っただけは裏切られていない
コーヒーが私の朝に点火する
ピントずらせばみんな好人
投げられた石に野良猫じやれてみせ
年寄りを抱える愚痴が寄る年忌
嘘ついた針が心に満ちている

枚方市 寺川 弘一

最初からわかっているもする選挙
モデルハウスの家具が豪華でありすぎる
金券ショップで切符を買って旅に出る
女とはダイエツトする食いしん坊
小言すむまでやかん沸騰させたまま
名人は初心忘れることがない

高槻市 傍島 克治

若き日の手練手管で老いの恋
お互いに見て見ぬふりのすれ違い
名月やお達者ですかかぐや姫
そこまでも言わんでええや許したり
君にしか出来ぬと言われの煽て
いつもより腰が低いぞ気をつけろ

吹田市 太田 昭

墓参り亡父もいっしょに酔っている

訥弁の父ふるえてた式の謝辞

独り居を楽しむだけのゆとり出来

噴水を攫って行った秋の風

ハンカチを入れて下足の集会場

古傷は俺にもあるさ言わぬだけ

吹田市 早川 棲世

ブッシュ万歳されど米株下げつづけ

記事読めばイスラム教徒みな自爆

損得で論し善悪にはふれず

夫婦とも農の家系の脚の型

わが自我は痴呆の始まりかもしれぬ

線香は百円均一です姑さん

大阪府 澤田 和重

出世した人に血の出る秘話がある

子を叱る矛先よその子に向けて

点滴の痣が病歴物語る

正直に話して波瀾覚悟する

紳士協定紅一点を守る会

ライバルを褒めて余裕を見せつける

大阪府 米澤 淑子

元の名が浮かんで来ないあの銀行

愚痴るほど醜い自分見えてくる

辛口をひとつ叩いて自問する

身勝手な理論とくどく評論家

あの医者の人気腕より口らしい

ユニクロの人氣安さとカラーだんだ

和歌山市 桜井 千秀

可と不可を足して二で割り生き延びる

叩かれた痛みをバネにして飛ばう

三面六臂阿修羅像にもあった慈悲

自分流に飼い慣らしてる孤独感

脚線美はみ出している網タイツ

和歌山市 福本 英子

援護射撃しよう拘泥り先ず捨てて

良い眼鏡買っても読めぬ文字がある

まだ脈がある洗濯機回ってる

切手選る好きな人へは好きな柄

拭つてもとれない疵を消すワイン

忌を重ね若い僧侶に拝まれる

びつたりと当り侘しい旅の傘 和歌山市 福井 桂香

たおやかに芯の強さを持つ小菊

肋には反骨と言うピラを貼る

細菌室の扉を開けたのは誰だ

家族という重たい石を抱いている

メニユーからしばらく消える肉うどん

年賀状孫の産声のせて出す

和歌山市 古久保 和子

無人販売に並ぶスツピンの野菜たち

真実一路柿も蜜柑も赤くなる
銃眼を覗きこころを見失う

血糖値毒饅頭を提げて友
住所録の所々に過去の顔

掬うものみんな零してきた両手
もうみんな赦そう月がまるいから

観覧車月の軌道に乗るつもり

京都府 丹後屋 肇

秋の虫切ないことが有るらしい

青天井から降ってきた悪魔

和歌山市 吉村 さち子

数珠を持つこと多くなり秋なかば

まったりのうどんで帰阪嘔みしめる
御来光岩場で拝む登山靴
深海魚この世のものでないライト
検診をいやな予感ですっぱかす
スピーチがしどろもどろの代打役
機窓から見る流星の長い帯

二番煎じの話とくとき聞かされる

不器用で不朽洞から這い出せず

再生紙と見れば情けで買つて見る

横浜 菱田 満秋

生さることの厳しさ此処も店仕舞い

胸の轍消えないままに早や初冬

下がつても持株減ったわけでない

和歌山市 田中 みね

裸の金父が握らす里帰り

お化粧が終ればメールする電車

丸裸恐れて大志いだけるか

ドストエフスキー読む君まだ貧し

アンコールないが自慢の黒田節

横浜 清水 潮華

上には上あつて悩みが軽くなる

じろじろと私に何か付いてます

食欲へ歯止めが効かぬ秋の天

和歌山市 西山 幸

外濠も内濠もない城に棲み

人の世を凝視している鬼の面

まだ涙残つてました芥子漬
私ならどうする背筋寒くなる
少子化へそのけベビーカーが行く
お誘いの手紙へ貼った花切手
計画がぐらつき出した検査表
じつと待つゆとりへ運がやって来る

東京都 播 本 充 子

オバサンが大志を抱くのも時代
便箋を買い足す秋の夜は長い
筆跡を変えるくらいは許される
手折られた痛みも見せず咲き誇る
すすくと伸びてぼつきり折れる鼻
着実に老化が進む薬代

青森県 西 谷 大 吾

ちぎり絵の隅にボツンと父が居る
出迎える妻と子があり飯を食う
この子らの未来に星があるように
汗だくになって明日を追いかける
いつか来るひとりぼっちのかくれんぼ
哀楽を秘めてつまびく津軽三味

弘前市 高 橋 岳 水

晩秋の中に一きわ烏瓜
憎しみを捨てると変わる風の向き
一輪の花が出合いを丸くする
乱伐の森に悲劇の芽が生える
職辞した日から身軽になる名刺
ひたすらに生きた十指がささくれる

黒石市 相 馬 一 花

現代もてはやされる柳腰
水割りを湯割りに変える歳になり

ヘルパーの資格に挑むまだ六十路

義理堅い笑顔の並ぶ祝賀会

美人にはからきし弱い天邪鬼

カルメンのハートで踊るフラメンコ

愛知県 早 川 盛 夫

星の数ほど女いてまだひとり

先頭が替わると活気づいてくる

三振を恐れず強振する若さ

アクセルとブレーキ意気の合うふたり

健康の自慢を事故が嘲笑い

本心をひき出す酒を追加する

堺市 志 田 千 代

カメラ用の笑顔を隠し持っている

気まぐれにスナップ写真とるなかれ

一声をかけてカメラを向けてくれ

気にそまぬ写真をはった免許証

遺影用の写真がたんとたまりだし

あるがままにうつるカメラが恨めしい

堺市 桑 原 道 夫

泡立草泡吹きそうな日本晴

校庭の馬跳びがまだ続きおり

下校時の音楽も晩秋となり

昭和遠し林檎を頬に押し当てて

朝告げる渋谷新宿大鴉

戀と書き不思議なもののは不思議なり

堺市 村上玄也

方言が集まつてくる観光地
掃除機の音に消される父の愚痴
乗り換えてにわか近鉄ファンです
初顔で敗れて苦意識持ち
ひ孫の名覚えきれない母長寿
見覚えがあつて名の出てこない顔

堺市 山本半錢

句会出てうどん食べたい気分なり
地下街の人の流れに逆らわず
ペンに來る睡魔とすぐに妥協する
水も空も命も秋は澄んだ青
山や谷ある日息子は父を越え
長生きのつもり十年バスポート

堺市 和田つづや

リストラに明日は強風注意報
陰干しの柿が秘かに旨くなる
郷愁に干し大根の煮る香あり
蒟蒻の多い松茸飯である
あれこれの指圖書き置き妻は留守
夢戻すおたま杓子の居た日まで

大阪市 西出楓楽

自己主張きつい女なのど仏
ストーリーだけ追っているなめ読み

駆引きは心得ているボールペン
サッチモが聴きたくなった夕茜
心配の一つ二つはあつてよし
師の教え守つていつか師を越える

大阪市 板東倫子

Qちゃん万歳イチロー万歳嬉しい日
テロリストがちらりと見せた悲しい目
人違いされてるけれど御挨拶
退屈な午後は子猫を追ひ回す
団欒も独り暮しもしてみたし
松茸は買ったが牛肉買い渋る

大阪市 鈴木トヨ子

万札の羽根も切りたい十二月
道化師のように娘がメイクする
貧乏神ときどき同居させる家
茜空ふんわり暮れる水平線
笑い種福の神からプレゼント
私には迷わず帰る家がある

大阪市 古今堂蕉子

かまきりが四肢思いつきりストレッツ
蝶々の国際会議華一杯
蜂さそり 昆虫界のテロリスト
つくだ煮にされずにいなご平和の日
人造の犬押入れでねむりおり
夫より犬と暮すという娘

大阪市 小林 周 信

七五三 親の数だけカメラマン

押すだけのカメラで写真コンテスト

預金して監視カメラに写される

難民の死角もさらすカメラアイ

本命でない娘も入れて押すシャッター

昔むかし米に変身したライカ

大阪市 鶴 田 遠 野

巣立つ子 wait たように倦怠期

賽銭に住所氏名を言っておく

妻までも油断させてる剃り残し

取り急ぎ夢でまた逢う一目惚れ

いい人を演じ悪友先に逝く

反省と感謝も連れてフルムーン

大阪市 中 澤 伽 羅

無駄口を万年筆は言いません

ペンの字と似ても似つかぬ大男

リストラが男盛りを打ちのめす

腹立てるのを止めてから老けてきた

再会にそりり名前をたしかめる

いい空気吸いに来たらと娘から

大阪市 津 守 なぎさ

顔色を褒めて希望を持たす医師

甘辛の言葉自由に俺お前

手に取って見る洋服の原産地

青い海郷愁せまるローカル線

ネズミ追う事もない猫日向はこ

ブレゼントされ雨降りを待ちわびる

大阪市 榎 本 日 の 出

無差別のテロが世界をかけ巡る

細ほそと築いた城が愛おしい

握手した手の温もりは忘れない

歳だけは同じで皺の数ちがう

介護する人も隠れて飲む薬

良いこともグチも聞かせる墓参り

大阪市 津 村 志 華 子

フルムーン気軽な旅のペアルック

松茸の味覚はほんのお吸物

傷心へ風はやさしく背を撫でる

いとおしい命をつつむ妊婦服

神妙に聴く振りしてて上のそら

人生の節目ふしめに耐えた背な
松山市 丹 下 美 津 子

耐えて来た数だけ克つたなと思う

母がいる食べに行きます祭り寿司

食べて寝て長生きをしてすみません

入院して掛け替え無いと気付く嫁

ひっそりと父子の食事淋しそう

退院日窓の灯も華やいで

愛媛県 中居善信

地球上に人間魚雷生きていた
役者だと言われた事のある素顔
いい顔をしてるコーラスのおばさま等
湧き水があるから僕はここで住む
喧嘩した笑い話をしましょうか
ぺらぺらの男に腹をたてている

香川県 神保坊太郎

リストラの風に首すじ撫でられる
妻に告ぐため松茸の値札みる
燃えつきるまでつれ舞うて秋の蝶
ジャーネエと明日を信じたグッドバイ
ここいらで脱がぬと苦しい猫かぶり
永生きがしたくて過去を眠らせる

香川県 清川玲子

深呼吸してから愛を打ち明ける
悟られて今日はいつもの手がきかぬ
二人手を組めば越えられそうな坂
見ぬ振りをしてくれて居る思いやり
赴任地のさぬきにうどんな好きになる
うどんな打つおやじの汗に長い列

香川県 川崎ひかり

考えてかんがえ抜いてまだ迷う
老斑の数とおんなじ物忘れ

妥協案紫煙の中でゆれている
秋空を辿れば戦う国がある
真っ直ぐに生きてりゃいつか陽が当たる
良い時は風も優しく吹いていた

香川県 池内かおり

お仲間に入れて頂きフルコース
うず潮をこわごわ覗く橋の下
新米もスタチも栗も着く頃よ
うっかりを笑って聞いてくれる酒
とり止めた命うれしい風が吹く
迷ってる間に欲しい物が無い

唐津市 仁部四郎

呼び戻せ社長に拳上げた奴
受け継いだ椅子にせりふが似てきたね
晩酌や末の娘の誕生日
相部屋の音にぎやかに宿浴衣
教員に叱る技術が今欲しい
イベントへうろうろ市長読書せず

唐津市 久保正剣

パトロンになりたいような胸にあう
代表者は深くお詫びをする仕事
信号を信じて犬が待っている
肘鉄を女にかましたことがない
糸電話携帯に替え娘も二十歳
お金には糸目をつけず捨てる国

唐津市 宗 水 笑

わがままの小骨残して好々爺
あいうえお順で押さえる天邪鬼
世の平和祈りながらも銃をとる
攻めるだけ攻めて野党は疲れない
人の眼に知られてならぬ鳥の墓地
夕焼けの砂場に子らの虫の墓

唐津市 井 上 勝 規

錆だらけの俺もまだまだ全自動
方向音痴母は迷わず逝つたらか
酌ぐ老妻に素直に詫びる空手形
税のゆくえまた晩酌が増えている
フルコース炙つた目刺し欲しくなる
衰える五体妄想生みつつけ

唐津市 山 口 高 明

冗談も言えぬ奴だと煙たがる
支援する奴も居たんだテロ行為
少子化の波に分校廃止され
国民を搾る知恵ならよう回る
聞かれたら困る話はハングル語
庶民には届かぬ景気浮揚策

米子市 澤 田 千 春

船底で身の上語り合う荷物
ポケベルよ遊び心はほどほどに

ケンケンパ夢中であそぶ児がない
うっかりと二重約束してしまう
忘れずに心の窓をみがきたい
太陽にピチピチ魚の背が光る

米子市 木 村 富 美 子

無口からやつと冗談こぼれ出す
月の歌うたいたくなる丸い月
不揃いの手打ちうどんにあるぬくみ
朝つゆに輝いている雑草の貌
父母よりも長い君との五十年
お母さん元気な体ありがとう

倉吉市 米 田 幸 子

脱皮して母の港をあとにする
脱皮する少女に親は偏頭痛
父権まだしっかりしてて子もまじめ
人が人裁く此の世のおぞましさ
おぼれたらあかん情けの淵に立つ
船が出るぞー三途の川の渡し守り

鳥取市 岸 本 宏 章

涙壺うれしいときのためにある
妻だけのファッションショーを審査する
犬かきで泳いだ川に水がない
庭付きにこだわり駅を遠くする
隠したらそのままになる忘れぐせ
押し通す嘘に費やすエネルギー

鳥取市 岸 本 孝 子

なさけなや腹が立つたら顔に出る
言い訳を考え帰る重い靴

満腹になるところが丸くなる

タクシーに乗ると数字が気にかかる

いいことがあると風まで背を押す

ロボットが人間間引くのが怖い

鳥取市 植 田 一 京

パワーある人の背の後ついてゆく

道草もよし無理などはして生きぬ

思い出の中に花火とタコ焼と

追い風に乗って愚かな夢を見る

どの幕も喜劇のままで終りそう

あれこれを水に流して生きのびる

鳥取市 武 田 帆 雀

いい人に拾われ龍となる浮き木

大臣も僕もおんなじ赤い羽根

まだ何も喋らぬうちに野次が飛ぶ

小細工を憶えて菊の股を裂く

義理恩も跨いで通る長い脚

もう一杯ゴーヤジュースは如何です

鳥取県 西 原 艶 子

コスモス満開生きているってうれしいな

犬猫 小鳥 鈴虫もいてみな元氣

まんまるに目鼻を描けばわたしになる

父さんの歩いた道に陽が当る (工夫叙勲賜る)

父の背はいつまでも子の道しるべ

命ある小さきものに癒される

鳥取県 奥 谷 彩 子

でこばこ道汗して走る生き下手下で

悲しさも軽いジョークでまぎらわし

明日を信じ木の実笑って落ちて行く

うれしさをぎゅうぎゅう詰めに返し縫い

火吹竹恋の余熱がまだ少し

未知の楽しさあるから明日も生きられる

鳥取県 さえき や え

さだめ運命なら何をくよくよ秋の空

いい話ふわりと風にのってくる

つぐみよ鳩よ早う熟柿を食べにこい

信仰ウイルス心のすきに入りこむ

安心は大きなヤイトすえてから

鳥取県 石 谷 美 恵 子

相談に來たと言うのに自我通す

長いながい話になった身の証

太目のわたし豊かな秋が困らせる

葬列の無邪気な遺児をみる辛さ

癒すとは忘れることか秋に入る

流されぬ杭をここに打っておく

鳥取県 土橋 はるお

お隣の木犀の香よありがとう
峠の茶屋も昨日廃業したそうな
スズメ蜂が展望台を占拠する
ステップは踏めぬが地団太は踏める
無農薬野菜の出前してくれよ
間引かれて三途の川を渡る羽目

鳥取県 羽津川 公乃

彼岸花褪せて日暮れが早くなる
神無月叔父の家から葬二つ
検眼は何だったのか度が合わぬ
座っても立っても膝の泣きどころ
申告を迷う満期の保険金
探り合い止めたら腹が減って来た

岡山県 富坂 志重

笑顔にはどんな化粧もかなわない
若いとは翼なくても飛べること
どんな夢見ようと金はかからない
いくつかの意味を隠している笑顔
愚痴を聞く事も一つの介護法
川柳に体温が有る夢がある

岡山県 小林 妻子

零細農家お米は買っているんです
農器具も買えぬ苦渋の選択肢

休耕料いただくのにも金がいる
転作の訳は知らないソバの花
貧乏がいくら合併してもびんぼう
米の飯が毎日食えるいいくらし

岡山県 矢内 寿恵子

雑魚なりに川の流れを読んでいる
豆の木が伸びる宇宙に夢追うて
時に遠く時には近し里の道
ういのおく山越えて光をてのひらに
なるようになる人生も風任せ
山育ち小さい事にはこだわらぬ

広島県 藤 解 静 風

コスモスの勁さ細身の師を想い
ケータイでたしかめ合っている不安
妻にまだ大和撫子残つとる
ひらかなのよの字におんな髪洗う
男のたたかい松の廊下が二度三度
新刊書ひらき暫く遊泳す

竹原市 時 広 一 路

笑うのを一生知らぬまま金魚
人間をしてるいいやら悪いやら
落ち葉焼く何の未練も無い煙
定位置が集合写真に有る私
どの鬼も角を持つとは限るまい
薬に手自然に伸びてゆく食後

竹原市 森井菁居

先送りして来たツケが大きすぎ
病んでから人のなさけが有難い
偉大さに気付く巨星が墜ちてから
巻き添えが恐いと思う交通禍
まだトゲが抜けない幼年期の悪夢
制空権妻に譲つて恙無し

倉敷市 小野克枝

見ないふりしている雨が降っている
妻に無い優しさを見た昼の月
ためらわずウドンと言える歳になり
リストラの予感に触れず酌み交す
足音がいつもと違う妻の勘
宿命という名の函が重すぎる

宇部市 平田実男

良い案も良くない案も多数決
休刊日続くと脳が錆びてくる
体調のバロメーターに酒の味
本当の友ある時は敵になる
握手して票になる手とならない手
野次だけで歳費もらっている議員

出雲市 伊藤玲子

望むなら両の眼もあげましょう(献眼)
斜めから覗いて不信感誘う

旅が好き葉袋も伴にして

一歩ずつ深いご縁を大切に

雨上がるつぶやくように茗荷の芽
満々と注がれたコップ動けない

出雲市 小玉満江

見た目には恐い人だが泣き上戸

欲張つて食べ残したバイキング

父さんの右手にいつもけむり草

拍手した手に疑いはなかったか

ライバルが先取りをした夢の椅子

安曇野の秋を歩けば道祖神

出雲市 城多喜

幸せの予感空気がやわらかい

ちよつぴりの幸せに酔う ちよつぴりの

雷に打たれて胸に傷が出来

なるようになった縁ならそれもよし

さらさらと指から今日が洩れてゆく

そして今生まれ変れる詩がある

出雲市 岸桂子

どう風が吹こうと過去は従いてくる

こつそりと夏の切り札裏返す

躓いた石を自戒のふところに

中流と思つて暮している蛙

雨の夜どこかでドアを閉める音

笑わせてくれる仲間と靴を脱ぐ

出雲市 板垣夢醉

秋深し熟柿投身自殺遂げ

秋山のもみじが急かす冬準備

日暮れには雀絵本へ帰り着く

雑草のように不況を乗り切る気

人生のはかなさ秋の虫に似て

肥満体小石にころり転がされ

松江市 銭山昌枝

名月や研ぎ澄まされてくる右脳

ライバルの見えない位置で猛ダッシュ

わたくしへご褒美深紅のばらを買う

尽くしたと言う妻に耐えたと言う夫

価値観の埋まらぬままに黄昏る

怒鳴らなくなつて気になる隠居部屋

西宮市 亀岡哲子

十五夜のお風呂親子が良く笑う

運動会赤のどれかがうちの孫

内緒話するわけでなし手話習う

もう少し星と語ろうあす日曜

身分証明期限の切れたバスポート

九十のおばのジョークはほんものだ

西宮市 門谷たず子

だまし絵であればと思う癌告知

子のメスを信じて鯉になつておく

トンネルの向こう一縷のうす明り
各停の駅のベンチがあたたかい
雲悠ゆう生きる力を貰えそう
曖昧に生きて明日を疑わず

西宮市 奥田みつ子

何しても自由というも淋しかり

気に入らぬ帽子も時にかぶる破目

かなしみが女を磨くかも知れぬ

聞かないでおう知らぬが花と言う

節曲げて生きる気はなし月の道

青空からもう元氣とロマンスと

宝塚市 嵯峨根保子

損をして一人友達できました

枝豆の緑をうんと食べておこ

完熟でガンがぼとりと落ちるなら

侍史と書く封書を持つて気が重い

林檎には敗戦いらい恩がある

同窓の皺と苦勞は別らしい

三田市 久保田千代

土に凝り窯元訪ねる旅続く

この土に魔法かければ名陶器

この土地に惚れて陶工居を構え

原因は口かも知れず四面楚歌

約束を後姿が念を押し

鼻欠けていても野仏拝まれる

岡山市 井上 柳五郎

秋の蚊に生き血振舞う庭いじり

食欲の秋へ体重またも減り

一言の不足を悔いる仲違い

この絆細い糸だしのし袋

天職と好きな仕事の鬼で生き

岡山市 川端 柳子

へのへのもへ忘れられない顔がある

きつちりと耳傾ける人でした

持ち前の明るさで舞う風車

眠れぬ夜またたく星の小さ過ぎ

秋風につられて帰る遠回り

倉敷市 井上 富子

アウトドア秋を満喫したリュック

待ちばうけもう信じない花時計

月並な言葉で濁す第三者

割烹着秋を手頃にちりばめる

追い風を読み損なつた風見鶏

岡山県 大石 あすなろ

桐一葉ふと夏のこと冬のこと

単純な思考回路に錆がくる

ふり向いた顔が隠している涙

頭脳派がわたしの周りにいて困る

裏口に誤算ばかりが積んである

岡山県 山本 玉恵

イヤリング揺れてる謎は深くなる

古里の味が私を呼び戻す

傘の雫切れても想い断ち切れぬ

美しく生き様弥陀にあずける身

空回り重ね背骨の軋む音

広島市 森田 文

誰にでも輸血のできる型で生き

お似合いの夫婦別居で皆黙る

せつせつせと鬼門に赤い花を植え

信仰とはありがたきもの恐きもの

時が来て秋風の中蝶の葬

竹原市 岩本 笑子

笛 太鼓 夜店も不況風が吹き

あれもこれも百円ほんまにいいかしら

試食して一言もごもご何か言い

のどかなり貨物列車が渡る橋

生き残るのは妻だと思ふ食欲よ

竹原市 三宅 不朽

ふつと杖が昇天したらどうしよう

赤い羽根紺の背広の律義だな

当りますようにポストへ一札す

孫なみに叱られました泥遊び

いくさにはふれてはならぬ菊花展

竹原市 小島 蘭 幸

おふくろに甘えることはいいことだ

お見舞いに外国人も来た長女

ゆかりとはいいい言葉なり作家展

難しいことはいつでもおふくろに

亡父によく似た蠅螂よ振り向くな

竹原市 古谷 節 夫

情熱と少し痴呆も交じる酒

人間の浅知恵テロと核兵器

地図帳に残して置こう江戸マップ

源流の清さを知らぬ雑魚の群れ

夕焼けが一瞬止まる絵のままで

美祿市 安平次 弘 道

ティータイム夫婦は別のこと思い

頂点に立つてシナリオ書きかえる

足跡を消すから神に疑われ

起承転結祖父の手紙が手厳しい

狂気かな神の返事がまだこない

北九州市 梅田 宣 司

ピカピカの記念切手は嘗めて貼り

愛妻家にしとききましたと妻が言う

玄海産と箔つけられている鰯

空いている上座に若さためらわず

どちらにも傷がつくので押し黙る

唐津市 樋口 輝 夫

長話みな乾杯の手が震え（敬老会にて）

保険屋が生涯保証とそそのかす

狂牛が怖い酢豚にしておこう

愛憎を混せてちゅらさん幕が降り

秋祭唐津っ子という誇りあり

唐津市 市丸 晴 翠

小さい母逝つて大きさと噛みしめる

維新前の暦が活きる農作業

自分史の中身閻魔がチェックする

難民に銀座の烏首を垂れ

ノルマ遂げ母の深夜の仕舞風呂

熊本市 永田 俊 子

結婚の花束きれいに親ばなれ

一念発起ママがダンスを習い出す

その裏を読んで賢い笛を吹く

落魄へ情けは和紙の薄さほど

これからは神にまかせる時刻表

熊本県 岩切 康 子

ひと時を笑いこけてる田舎寄席

古日記結婚前に燃えました

お電話で済まず何しろ会う破目に

噴水は屋内だった道しるべ

唯一のお洒落帯メ母の彩

熊本県 高野宵草

奥様が自転車に乗る楷書体
母の腰曲げた私の親不孝

久しぶり姉妹の声が絶えぬ夜半

いつの間にか溜る輪ゴムの消費税
寿命とは待つものでなし前を向く

松山市 宮尾みのり

ジョークだと言い訳出来ぬ酔いが醒め

雑用もばっばとこなしよく笑う

隙のあるところも見せて処世術

無防備な隙を他人の目がのぞき

一徹を都会育ちが持て余し

香川県 滝井勝

綻びはあっても温い女です

掛け替えない一生だから挑む

見栄張りを煽つてのせる泥の舟

道端の石に温もる文がある

近すぎる福に気づかぬままで過ぎ

高知市 北川竹萌

気張っても九十の皺が身を包む

大根の抜き菜ご飯の舌鼓

孫からのメロン味乗る時を待つ

宅配の盛り花とどく敬老日

屋根越えた棕櫚剪定の四十年

高知県 赤川菊野

国際線別の私がそこに居る

日本の良さが身にしむパスポート

伝統と誇りと歴史高床に

民族衣装つけて部落に仲間入り

パスポート亡夫に感謝しています

弘前市 櫻庭順風

出張の治療一途に悩む日々

開業か医局か喉で絡みあい

杞憂まだどこかに残る開業医

我武者羅に心血注ぐ日のカルテ

開業に漸く句読点を打つ

弘前市 福士慕情

夜半の風栗の実屋根に落ちている

集団で消えてしまった蟬時雨

文庫本眼鏡買い替え急かされる

日記帳灰になるかも知れぬのに

踊るたびラストダンスと思う靴

弘前市 一戸ツネ

点と線あしたへ続く道標

秋彼岸五体不調の立ちくらみ

曼珠沙華孫へひまごへDNA

ときどきはおかめの面も牙をだす

獣道迷うた女風に遇う

弘前市 須郷井蛙

濁流にのまれて見たい乳房抱く
ふる里の私道にいつも血が通う
人生は険し舗装の道がない
蟻属に区分をされる父である
台風に水道局が感謝する

弘前市 宮崎ヒサ子

ぐずついた空が私を写し出す
もうそろそろ電話が入る菊自慢
思いつ切りコスモス揺れて山衣替え
二人暮しいつも笑顔でいたいけど
何でまた傘の中で小競り合い

弘前市 相馬銀波

秋霖にきのこの山へ欲の靴
言い訳のしない男と手を握る
雨が降る小さなミスは許されず
どたん場で補欠の汗が物になり
一本の道足跡のない農夫

弘前市 蒔苗果林

稲刈りのツアー泥んこ顔比べ
左手は厭とギラリ鎌睨む
父と子が奇声に勇み稲を刈る
稲の葉に指切り舐める血の味覚
コンパインより子等の刈る米美味しいぞ

弘前市 小寺花峯

やめられぬ酒だ右手に震えくる
津軽冬腹に包帯巻いておく
リハビリの汗輝きを増す夕陽
十七歳過激な言葉で脱皮する
ポケットに正義を持ったまま果てる

弘前市 今愁女

プリントミスが誼となった句の御仁
大会でなければ会いたい人と逢う
手作りのノート戴く嬉しい日(女様)
雲海が雪塊に見え北帰行
櫟の実口に含んで旅おわる

十和田市 阿部進

価値観の違う夫婦で仲がよい
緊張の連続でした晴れ舞台
魅力ある老いになりたく励む日々
結び目がだんだんゆるむ倦怠期
健康を目ざし毎日一万歩

砂川市 大橋政良

カトレアがリボンのように咲きました
雑巾の形で使い捨てになる
堅い口ひらいた貝のひとり言
冗談に固い空気が割れてゆく
騙された仕返しをまた騙される

横浜市 田中笑子

にんまりの顔かくせない当り籤
ご無沙汰の理由に離婚聞かされる
脳軽く骨も軽くて老い迫る
戸をたたく風に眠気を奪われる
健脚がエスカレーター避けている

横浜市 保田絹子

飛び付いて値札に迷う試着室
百円でベストセラーのビジネス書
ゴキブリが悲鳴に行方くらませる
フルムーン宿でまさかの人に会う
音も無く稲穂の風に鬼蜻蜒

横浜市 山下省子

鳥取の砂丘へ夏の風邪捨てる
冷蔵庫開けてレシビのページ繰る
ブルマンをレギュラーにして貯金箱
脳ミンがボワッ口だけよく動き
柳歴が進み嘘までうまくなり

横浜市 菊地政勝

米国の威信吹き飛ぶ悪夢見る
地団太も素直に刻む万歩計
不景気に両手上げたいまねき猫
狂牛の騒ぎにビフテキ安く食べ
満期来る秘密をばらすはがき着き

横浜市 小野句多留

励まされ手術段々でかくなり（ポリプ摘出入院 3句）
調べたら早期の癌と軽い口
許された酒よ今夜は有難う
高飛車に出て威嚇する物忘れ
かくし事妻がつかんだ導火線

富士宮市 渥美弧秀

花重唱妻も私も若い顔
荆妻の苦言を酒が忘れさせ
呑み足らぬ酒は冥途へ期待する
潮が引く孤独に迫る浮き沈み
アルミ貨も役立つ福祉の十二月

静岡県 蘭田獏杏

極楽へ通じる道は光ってる
同じ道歩き早くも差がついた
ユーモアが解けて明日へ高笑い
収獲祭御幣新たに田の神へ
地獄への道は細くて真つ暗闇

さいたま市 八田敏

上向いて歩こう喜寿の背を伸ばし
不況下で年金デフレに助けられ
レシビ見て作る料理は二度出来ぬ
空爆のニュースに遠い日を思う
五感みな鈍るが欲は鈍らない

富山県 増田 紗弓

プロローグ母の讃歌をおおらかに
美しいことだけ忘れない山河

負けている方へ涙を流す癖

にわか習字がいやだと筆がすねている
ありがとう言えるといいなエピローグ

富山市 舟渡 杏花

腰痛が不老長寿に水をさす

腕立て百回ライバルが目の前で

私小説の節目に足しておくピンク

同時テロ知っているかや赤トンボ

手弱女が一夫一婦を覆す

富山市 酒井 輝

水音が心経になる滝修業

ライバルは追わぬと決めていい目覚め

リフォームの壁にコピーの絵が似合う

入院で出会い敵と打ち解ける

家ごとに決まる過不足無い暮らし

京都市 都倉 求芽

曼珠沙華これが匂えば凄かろう

父の忌にぎんなんぼとぼと父の墓

ひとひらの雲より軽い秋の月

同じ草ばかりに飽きたかたつむり

秒刻みで夜長を浪費するテレビ

京都市 山海 友熙

神様にくどくど愚痴を言う師走

今日暮れて明日の命を大切に

玉葱を刻んで白い涙かな

十二月雪が積った街に棲む

いい人に出会った町は十二月

京都市 高島 啓子

留守にする私を見てるお豆腐屋

炊飯器目盛り通りに炊いていず

柿なます母思う日のおばんざい

種の無い柿をお猿は蟹に遣り

仏壇の掃除をしたら閉めておく

京都府 稲葉 冬葉

近鉄が好きだった仏と祝う

先代の威厳をたもつ向こう傷

范洋に彷徨うている修羅の面

絶景に勝るオカメの無表情

来世は指輪の似合う手がほしい

岡岡市 井上 森生

一面の見出しが急にデカくなる

長嶋もQチャンも良し大見出し

我が姓も我が血も繋ぐ孫を抱く

亀岡の秋はしつぱり深い霧

掌のツボに余生をそつと訊く

大阪市 神夏磯 典子

一年がだんだん早くなつてゆく
眼病の夫へ話す柿の色
御地藏さん目印にして迷わない
カチャカチャと残しはしないフルコース
機嫌とるお菓子が横に居てくれる

大阪市 玉置 英子

大好きよ孫の背洗つてやりながら
半断食おなか为空いて無理でした
孫連れて親孝行に来る息子
薄くなり八十年目眉を描く
ただいまと言うても昼間仏だけ

大阪市 川端 一步

笑顔ひとつ鉄の扉も動き出す
神ほとけ鉄砲打てと教えしか
あの人の笛ならきつと踊るだろう
漱石のヒゲによく似た郵便屋
古本が好きなお人と長ばなし

大阪市 川久保 睦子

にんげんが愚かで森に人はなし
星を見て静かにいつものロゼワイン
豊かさの深みで遊ぶEメール
匿名で書く大胆な私小説
ステップが上手に踏めてから狂う

大阪市 杉澤 汀

渡り鳥第三波きて秋闌ける
この兎らもやがて知識に汚される
野仏の由来は訊かぬことにする
引越した家に万年青の忘れもの
なにげないその一言に身は凍る

大阪市 清水 武

食欲の秋に家族でまわり寿司
銀行が狙われている十二月
忘年会続き車へ泊りこみ
安売りの墓の広告集めてる
終電へ土産の折を置き忘れ

大阪市 奥村 五月

ありがたいお経に足もしびれてる
白寿でも惜しい人だと悔やまれる
松茸はただ嗅ぐだけと心得る
腹黒い男がうまいほめ言葉
まだまだと歳を忘れた厚化粧

大阪市 榎本 舞夢

顔ぶれが揃つて楽し前夜祭
シャッターのチャンスフィルム切れている
大声で叫びたくなる鬱の日は
ブラームス音をたどれば妊婦さん
晩学で書斎が欲しい主婦である

大阪市 町田 達子

カサブランカが匂う王女の顔をして

一ときを花の香りと飽かず居る

お向いの夫婦ガーデニングで揉めてはる

漱石が飛ぶよお花の苗が売れ

故郷の便り鬱など飛んでいけ

大阪市 松尾 柳右子

足のうら押して明日への夢つなぐ

足しげく来るセールスに根まけし

美術展感心ばかりしてる首

飛行機をあおぎ無事など祈ってる

お財布も忙しいです十二月

大阪市 岡本 久峰

松屋町目ばしい客を手で招く

干からびたさんま買わされ猫の餌

胎内に似て安らぎの奈良盆地

小国の哀しさ本音ひっこめる

無病息災独り舞台を楽しまん

大阪市 川原 章久

笹舟の回りを巡る水澄まし

発泡酒で一時の夢買うてみる

CTで頭輪切りの厭な音

明暗を母に伝える長電話

明日から酒やめますはまた明日

大阪市 津守 柳伸

慶びの宴万歳高らかに

優勝セール口程にない値引き

舞い込んだ蛾に一室を開け渡す

紅葉が割高にする旅プラン

コスモスが淋しく笑う青田刈り

大阪市 安達 はじめ

振り向けば他人ばかりの暮れの街

人の義理宅配便で返す暮れ

大根炊き湯気ありがたい了徳寺

除夜の鐘過去と未来に鳴り響く

早口の話へメモが追いつけず

大阪市 小糸 昭子

酔うている父に他人のふりをする

朝焼けの狭間に遠く神が住む

二番だし分厚く切った大根炊き

ひかえめで真っ直ぐ伸びる吾亦紅

越して来た幾つもの坂今日の風

大阪市 小林 トメ子

精一杯働き通し嫌がられ

しかえしのしかえしとなり返って来る

陰徳を積んで己をいやしてる

テロ事件テレビの前で夜を明かし

病院で検査検査で奇病かな

大阪市 寺井東雲

人前も妻をほめとくよい旦那
出鱈目に生きているけど八十歳
未だ欲がありコウモリ傘に八千円
ボールペン替えてしばらく考える
小学生携帯電話持っている

大阪市 渡部さと美

箸こけてまだまだ可笑し五六十
夏ばてを朝寝昼寝で追い返し
鉄くずの山恨めしい同時テロ
日本人記者中東のひげに負け
神道よしチャベルまたよし添いとげよ

大阪市 本間満津子

ひと憶う明かりを消した星月夜
誠実で考え込んでいる無口
喜びはみんなに分けて上げたくて
本気で怒る真つ直ぐにしか見ていない
嗚咽より深い悲しみ涙出ず

大阪市 前 たもつ

孫の歌孫の日もあり菊かおる
銀杏がまつ赤にみのり城に秋
妻の旅わが家静かでおそろしい
新庄が日本人への夢配る
引き際へ男美学を見せるなり

大阪市 清水絹子

留守二日花にも水の二日分
子の家の留守預かるも日の長し
介護の姉今日も笑顔を寄せつけず
掛け捨てになれば極楽介護料
斎場の膳の頃合いお骨上げ

池田市 岡本吉太郎

商売人騙し騙され一人前
裏の事何でも知ってる先輩や
パーキンソン風呂に入るも一苦勞
待つ事に慣れて何時でも先に行く
損して得とれと言うけど中々に

池田市 栗田久子

肉好きが今は魚ちりつついてる
下戸なのに時に備えて酒をかう
法隆寺夕映えの中柿実る
斑鳩の里は古代の風の道
華やかに口紅色のシクラメン

池田市 藤井計光

サン格拉斯女の美学変えさせる
肉じゃがのグルメに男貝になる
鮮やかに男のけじめ長嶋さん
定位置の虎に未練のあるノムラ
凡々と馬に託して去る大蛇

和泉市 中川 楓

その奥は触れぬ話の秋灯下
嫁くれし二人に余る栗ごはん
松茸を一つ買うにも値札見る
桐一葉せつかちなのは親ゆずり
飯の世の川の流れに生れ落ち

和泉市 西岡 洛 醉

鬼の酒ちびりちびりと雨の午後
天下泰平洗濯機の夢回る
百円屋小さな知恵を買って来る
肩書の無い人生で荷が軽い
妥協策明日に残した茜雲

和泉市 岡井 やすお

何処から何来るかも知れず今世紀
無辜の民殺せとアラア教えしや
飛び出せば隣の国の目が光る
歌合戦眠りの時を忘れさせ
仕合せは心静かに除夜の鐘

泉佐野市 山本 蛙 城

物忘れ貧しい過去に都合よい
一番の自慢曾孫がもう四人
賞状に和みを添えた粹な人
不勉強ですがバネラー不勉強
自己誇るひとこと祝辞卑しいぞ

茨木市 藤井 正雄

鯉の洗い氷の上でピンク色
赤提灯ピタリと足が止まる癖
即答が好き小気味良いボラロイド
自己主張少し脚色する日記
嘘一つ加え相手の顔立てる

茨木市 島元 ふみ

習性で寝ていられない今も主婦
空気のように寂しいですね老い二人
ドア一つ閉めて野中の一軒屋
地球の上でまだ両足が役に立つ
変わらないことが目出たい老いの四季

大阪狭山市 矢野 梓

辞書なしで書けぬ漢字が増えてくる
冗談をすぐ真に受ける癖があり
肩書きを好きに使うて罪つくる
冷めた目で親を見ている反抗期
口答えだけはしっかり出来る姑

交野市 森本 弘風

ここに我金木犀が自己主張
竹林に紅一点の彼岸花
要件は最後の一分長電話
久しぶり速いと思う新幹線
チャンネル権今日は独占妻は留守

河内長野市 井上喜醉

自家野菜作りすぎると妻はやき
携帯に監視をされて邪魔になる
半分はボケても食欲は達者
方言を聞いて楽しい居酒屋
雑草の力が欲しい弱い虎

河内長野市 水谷正子

光琳の間のシャンデリア別世界
深呼吸嬉しい事があつたから
正直がネクタイしめて蕎麦する
土壇場になると踏ん張るタイガース
冬がくる太郎花子も風邪引くな

河内長野市 植村喜代

お世継ぎの出来る日本へおめでとう
名月や昼の雨量も忘れさせ
タクシーが走りやすいと言う不況
岩湧山正面にして布団干す
真つすぐに歩けるうちはまだ元氣

岸和田市 高須賀金太

台風がそれて輝くりんごの朱
美しい話はきつと裏がある
杯洗の水は政治の裏を知る
内気で自分殺してばかりです
余白には筆を入れない方がいい

岸和田市故池 田寿美子

塩焼のコツを覚えたさんまの味
あべこべにあすはわからぬ娘の入院
介護保険いざという時信頼感
バーゲンで久留米絆は我が宝
タンゴ聴く今夜ひとりの月見かな

岸和田市 原苑子

私の精密機能作動せず
忘れない事忘れずにまだら呆け
すすまない箸でほめてる娘の料理
口では上手く言えぬからメール打つ
父さんが元氣なりやこそカカ天下

岸和田市 井伊東吉

だんじりの熱氣奪ったテロ騒動
ちゅうらさんの爽やか笑顔忘れない
秋空に両手を挙げてストレッチ
一時代画した背番3が去る
タイガース見切り鞍替えバファローズ

岸和田市 岩佐ダン吉

衣食住足りて不足がたんとある
志高くひもじい僕になる
目の光る男がひとり群れの中
銃を持つ少年の明日思いやる
テロと報復哀しみ深くなる地球

堺市 齋藤 さくら

疲れたと言わぬ夫の高軒

父さんと似ても似つかぬ人と添い

大海も知らずに旅をつづけてる

すぎ焼きのあとのうどんが喜ばれ

ノー言えず当たり障りのない返事

堺市 河内 月子

アベックの鳩が時々来てくれる

子守りした位でおばあ疲れへん

息子等が来るとハッスルしてしまう

熟女だと自分に暗示かけている

芳しいお茶と羊羹秋だすな

堺市 矢倉 五月

月刊誌読み終えぬ間に次が来る

タクシーにお礼言うてるこの荷物

迷うてた物を娘が捨ててくれ

無駄な抵抗止めて素直に歳とる気

ライバルと握手のできる時が来た

堺市 宮本 かりん

向き合うて夫婦に話題特になし

清濁が格闘してる胃袋だ

はらはらと背中見送る以外なし

万歩計つけると動き出す足だ

傷跡をいっぱい持つっている古木

堺市 柿花 紀美女

常識の中で平均点搜す

私の句読まれておもわず胸踊る

汗知らぬ主賓の大きなバラの花

無言劇夫婦にしてみる虫の声

ゴキブリを追ってる妻の凄顔

四条畷市 吉岡 修

内定の知らせとびきり弾んでる

タレントに懲りてた票を繰り返す

株高で飾ってほしい年のくれ

検査パス嬉しい今日はもう一本

大セール赤字覚悟であるものか

吹田市 穴吹 尚士

骨折の妻をひたすら愛おしむ

骨折の妻の甘えを受け止める

骨折の妻に夕餉の指示仰ぐ

骨折の妻の好物買いに行く

退院の妻待ちかねる猫と俺

吹田市 野下 之男

美しく老いているかと鏡問う

嫁はんの柔らかいよで固い壁

家計簿にいやいやしてる妻の顔

負け犬の涙の中に明日を見る

台風も日本の国が好きらしい

吹田市 大谷 篤子

歯に衣を着せない人と渋いお茶
胸の奥深いところに住むマグマ
病んでから視点をかえた明い絵
無口です内にあるもの深いです
美しい嘘でしばらく友見舞う

吹田市 石原 靖巳

逃げ道を知っているから慌てない
無位無冠あつまる友もみな無欲
野望には遠いレールに乗っている
逆襲をこらえる妻が恐ろしい
沈黙の臓器を泣かす飲んだくれ

吹田市 瀬戸 まさよ

マスコミで知る無洗米無洗剤
童心に還る涙をもつアニメ
指定席払い眠っている映画
乗り継いだ価値ありうまい漬物屋
好きな人いるから続くこの講座

高槻市 江原 秀夫

ほろ苦い酒に本音が割つてある
甘辛い噂が煮立つちゃんこ鍋
ぼそぼそと原稿読んで最敬礼
投げかけた噂見事にブーメラン
本性が写る鏡は嫌いです

高槻市 井上 照子

C Tの結果信じて食の秋
息切れて辿り着いたがバスが出る
階段を駆け下りるのは芸当だ
OB会彼女年々若返る
充実の今年感謝で暮れていく

高石市 浅野 房子

島流しだろつかひとり住む離れ
うぬぼれていられるうちが花なのだ
さりげなく大事なことは言わないで
方角がずれて調子が狂い出す
人生のおまけの中で生きている

豊中市 江見 見清

風呂の椅子ひとつ増やして孫を待つ
料亭の味は知らぬと愚痴る妻
ロボットより安く器用な手先です
恥かいた話も和む糧とする
もう少し休めとトンボ鋤の柄に

豊中市 安藤 寿美子

喜寿はまだ米寿になれば祝うてや
首相参拝親子喧嘩のネタとなる
気になってキャッシュカードは置いて行く
出て来れる幸せ喜寿のクラス会
大阪へ着いたらおうどん食べようね

豊中市 松岡 久留美

ライバルがべったり彼の横に居る

再会の友と語って夜もすがら

御仏も秋がお好きか彼岸花

何気無い上手な嘘で人助け

飲む程にまた風呂敷が大になり

豊中市 田中正坊

何時どこで何が起こるか分らない

目には目を 報復戦争始まりぬ

日の丸を見せよと迫る星条旗

この時と出番待ってた自衛隊

アフガンの難民の子のうつろな目

豊中市 吉田 あずき

怨念の深さ地球は火の車

深みゆく秋が足許這うてくる

神ならぬ人間うつむくこと多し

親切にされてげんな顔をする

赤トンボ君の視野には負けている

豊中市 湯浅馬洗

人命を奪い許せぬ自爆テロ

狂牛病秋の実りに水を差す

四監督過去の名譽は触れず去る

右顧左べんやつぱりボクは風見鶏

ボクと妻バランスシート ボクの借り

大東市 児玉 蛙

好きな物食べたたら糖尿うずき出す

まだ死ぬ欲しいもの有り日々楽し

ラブレター残しておきたい青春譜

久し振り町へ出て来て迷う地下

我を忘れ遊んでみたい傘の中

富田林市 大橋 鐘造

双方の出方次第の風見鶏

しっかりと両手で掴む藁一本

定退の明日へ漕ぎ出す櫓を握る

風ばかり読んで己を見失う

善人に疲れて被る鬼の面

羽曳野市 吉川 寿美

逃げ道をぬけるとそこに母がいる

パレットにわたくし彩の秋を溶く

人の噂へ一際赫い蛇いちご

病知らずの卒寿の母の紙オムツ

またくると言えばホロリと泣く母で

羽曳野市 酒井 一壺

初恋は年上でした友の家

初恋にそっくりの人終電車

半世紀バナナも安くなりました

売っている果物どれもきれいすぎ

くだものの食べ頃を知る鳥なかも

羽曳野市 川口信子

打てそうで打てぬ人生ホームラン
逝かないでケンカ相手が居なくなる
大切にしまい忘れてゴミに出し
恋のツボ押されて好きと言わせられ
心の揺れそのまま写す水鏡

羽曳野市 西村りつえ

ピカピカの初孫抱いた新世紀
星条旗のビル崩れ出す新世紀
ITに六感無くて勝つヒト科
仮りの世のテロに震える曼珠沙華
日替りのアート楽しむ秋の雲

藤井寺市 中島志洋

不況風じんわり響く年の暮れ
カレンダーの美人はいない京の庭
柔らかい言葉の裏にある皮肉
酔うた振りしては勝手な事を言う
終電に忘年会が滑り込み

藤井寺市 太田扶美代

突き刺さる目だなたしを責めている
もう年ですと仏様にもボヤク
マンネリの見舞へ今日はサクランボ
友達を作りに行ったバス旅行
目を閉じて人の心をやり過す

枚方市 森本節子

金木犀二三歩すぎて振返る
ペット偲びただ黙々と土手行く
赤まんま野菊野の花秋の土手
満月は都会のよごれ浄化する
秋物の入替えしながらミサイル攻撃

枚方市 安達忠央

CDの鈴虫を聞くティールーム
ささぬ蚊が一匹泣いて眠れない
そこだけが平和のように蝶が舞う
逃げた場所教えてくれよ蟋蟀よ
結局はカメラ係で酒飲めず

枚方市 鈴木政子

女高生も足を止めてる金木犀
誘拐された七歳の記憶に脱帽
九年振り立山変らずホッとする
黒部ダム放水に霧が虹となり
エメラルドグリーンの流れ黒部川

東大阪市 指宿千枝子

金木犀私も負けず自己主張
足音を忍ばせ犬をテストする
相性の悪いテリアがすぐ吠える
子犬から飼われ家庭のひとりなり
人よりも犬の演技に高いギャラ

東大阪市 安永春

御門前 蛙挨拶してくれる

修学院離宮 蛙も宮仕え

牛蒡の葉育ちのよさに秋の風

秋盛りコスモス凛と咲き揃う

コンバイン稲束忙しく響く

東大阪市 北村賢子

青い地球を真つ赤に燃やす人の罪

逢いたくて逢えない今も好きだから

長いトンネルだったね今日の笑い声

燃えるだけ燃えて沈んでゆく夕日

寵愛うける術は知らないかすみ草

寝屋川市 太田とし子

ジャンケンで負けて不足が言い切れず

介護保険名もない寄付をしています

杖ついた人に道問うオートバイ

秋の雨胸にじんじんくる演歌

天秤にかけた命と預金帳

寝屋川市 籠島恵子

禁句ひとつわが身を光らせるために

夢を追うわたしに影がついてこぬ

しあわせの温度差ボロを纏ってる

痛点をさがし当てられない主治医

洗濯機雨が降ろうが回ってる

寝屋川市 酒井勇太朗

病得てスリル禁止の日々過ごす

チャネル戦妻子に勝って孫に負け

花板の保証も無くて皿洗う

湾岸の悪夢がよぎるトマホーク

血圧が気になるドラマ サスペンス

寝屋川市 森

勘違いしている父さんの駄洒落

神様はひよいと喜び下さった

悪役が揃うと喜劇弾けだす

ニアミスをするり躲した赤とんぼ

時偶は大劇場で観る映画

寝屋川市 高田博泉

もの言わぬ墓に向って言う小言

健脚が笑いはじめた六十路坂

まだ若い十年前をしんみりと

助手席ですやすやねむる妻も歳

すねかじりされて口でも負けている

寝屋川市 北岡波留吉

大国のエゴが平和を掻き乱す

夫好みのドレスで祝う金婚日

古くても走りつづける父の貨車

玄関の小菊が癒す旅疲れ

ほのぼのした人情が待つ都落ち

城一つ構え男の顔になり

寝屋川市 堀江光子

沈黙が問いかけてくる石の庭
有能な秘書か笑顔が乱れない

言訳をしたを自分に言訳し

テロの世を見下ろす星座整然と

寝屋川市 富山ルイ子

世をはかなむ事のないよう話しかけ

ポケットと相談気持だけ包む

介護保険料毎月とは痛い

古里が体に溶けてきた帰郷

柔和な眼 何時か吸い込まれてしまう

寝屋川市 坂上高栄

予感したいやなお方と鉢合わせ

よく見える目を有難うお母さん

天の川落ちる彼方に父母居ます

笛太鼓つられ祭の人となる

一人また一人 此の世の卒業生

寝屋川市 岸野あやめ

デパートはオバサマ達の漁場です

大声で言えない貸しのあるあんた

かあちゃんがしつかり者で家二軒

すり切れた鞆に詰まってるキャリア

あんたさえよければいいは表向き

鰯雲 今日の仕事は今日中に

肩で息吸うて言い訳考へる

借金を返してからよく喋る

流れ星やつぱり電池切れたんだ

仏さまときどき電話下さいね

箕面市 出口セツ子

実る日もあると信じてする努力

魂は売らずに生きている自信

故郷の原風景にある温み

生きていることも幻かもしれぬ

松茸も牛も食わずに過ぎる秋

守口市 井上桂作

過去よりも未来に夢をお年寄り

いい目覚めさわやか秋のありがたさ

散髪屋 仮寝をさそう長い椅子

毛筆で手紙を出せるすばらしさ

医療ミス過失でしたて済まされず

守口市 結城君子

仏飯へ新米ですとまず告げる

やはり秋献立かえて読みふける

テロ忘れ菊人形の君をほめ

ピアニシモ聞える耳よありがとう

息子の家は建つただろうか星月夜

松原市 小池しげお

八尾市 高橋 夕花
まるで守護神 携帯電話ふところに
心残りではないが会いたき人よ

青春を謳歌した足が病んでいる
はらはらと聞いている娘の英会話
禁猟区 水鉄砲で打診する

八尾市 高杉 千歩

行雲流水 不義理ばかり重ねて
十二月たった一つの忘年会
転勤を見送るデート風よぎる
反戦の旗なら真っ先に振ろう
裏口を開けて帰らぬ人待

八尾市 井尻 民

雑踏に消えてしまっているひとり
お屋敷へ素うどんひとつ出前もち
駄目なのに求人広告目を通す
無駄遣い詫びる夫へ酒を酌ぎ
来る年の願いを込めた手帳買う

八尾市 篠原 いつふみ

死んだ振り敵の油断を待っている
信じきり風に凭れている女
大切な夫婦茶碗に残るひび
人見知りやっぱり隅で飲んでいる
血の絆金がからんで深い溝

夕方の水で花なら生き返る

一つだけ残した妻の形見分け
その度に違う味する男鍋
お供の多寡でお下がり大中小
一人旅受入れる宿少なすぎ

八尾市 長谷川 春蘭

秋の蝶吹かるところまでが今日
荷を解けば母の便りと柿の艶
思い出に何時も母あり栗の飯
老いて娘に従う朝のスープ皿
菊まくら匂うや夢の中までも

八尾市 宮西 弥生

お茶だけですます範囲が弾まない
子を産まぬ予感しつかり貯めてある
わたくしの世界はここだ伎芸天
男運そのうち来るというみくじ
生きざまに喝ほしくなる万歩計

八尾市 吉村 一風

朝市の母活き活きと若うなり
幸せもほどほど酒もほどほどに
父の釘錆びてますます効いてくる
ときどきは用事でずれる休肝日
呆けぬよう晩学あれもこれも詰め

八尾市 生嶋 ますみ

芦屋市 黒田 能子

無口だがなんとも言えぬ味な人
菊の花摘んでくださる顔なじみ
誤解とけ急におなかがすいてくる
三日来ぬ隣の猫を案じてる
コスモスは転けても笑顔忘れない

大阪府 初山 隆盛

つつがなく第九の歓喜年を締め
お辞儀して月を迎えるすすきの穂
土瓶蒸しぎゅっと詰まった小さな秋
松茸の礼状最高の賛辞
恥かかんだけは財布に入れてある

神戸市 池田 善守

特撮を観ているようなテロ事件
台風も吹きとばされたテロ事件
貧困の沼からわき出るテロの虫
八十でまだお若いのご挨拶
貯金より貯筋が大事一万歩

神戸市 山口 美穂

自己嫌悪のわたしを励ますのもわたし
秋の日溜りバツしばしのまどろみか
山から里へ紅葉下り冬近し
ひそと咲き野菊のしあわせそうな色
一葉一葉 芸術的に染めて秋

頼りすぎ器用な人が疲れてる
スケジュール器用にこなしくたびれる
贈り物時々絆たしかめる
考えは明日になったらまた変る
秋風に疲れの残る蟻の列

尼崎市 春城 年代

節くれの指にいまさら宴とは
身構える性をかなしく身につける
セールスに断わる顔をきめて出る
欲が少うし淡泊になり留守居好き
不器用と貶し続けた手のいとし

尼崎市 春城 武庫坊

濁流に揉まれ師走の海に出る
まだ夢があるから秋の坂登る
伴走の妻のおかげで今日を歩き
歳はかぞえず自力で少し頑張ろう
神とは何か疑問がとけぬ昨日今日

尼崎市 奥山 美智子

幾年ぞあつけらかんと過ぎて行き
お守りを肌身離さず母を恋う
わだかまり大きな海に流させる
呼吸まで落ち着いてくる母の里
地藏さま星が欲しくて空ゆする

尼崎市の場 十四郎

台風も去りさわやかな朝のモカ
また台風慌てはしない庭の石
善人でありたい今日もよい笑顔
甘菓子で一息入れて座がなごむ
アトリエの乳房ふくらむ秋の風

尼崎市 内田 美也子

十月十一日バイクにバッグをさらわれる
ひったくられ一瞬わが身見失い
不覚さを嘆いてみても追いつかず
被害届へ川柳塔誌書き加え
独り身の脆さ感じた夜の道

尼崎市 田辺 鹿太

暖まる話題の欲しい冬の耳
幸せなことに部品はまだ若い
ためらいは強気弱気の交叉点
水割りがお湯割りになる秋灯下
男にはやはり挫折という薬

尼崎市 松下 比ろ志

行間に友情滲む見舞状
ちちろ鳴く秋の夜長の大欠伸
秋の灯や哀愁滲む伎芸天
覗き窓閉めても神の眼は光る
そつと肩抱けば川面の月揺れる

尼崎市 長浜 澄子

月煌々二〇〇一年秋の章
秋灯下マロングラッセなどいかが
香水の香も慎重に射程距離
コンビニへ淋しがり屋がまたひとり
たおやかに自我は崩さぬ秋桜

伊丹市 山崎 君子

テロも人の子 親に届いた遺書哀し
炭そ菌生命の尊さ知ってるか
朝刊に平和をさがす老眼鏡
宅急便松茸茗荷秋のせて
茜雲めおとコウモリ絵になつて

伊丹市 小熊 江美

口出さぬ方が利口と悟る日々
ああ言えはこう言う孫に負けている
拘摸にあい厄落しだと気を晴らす
信楽の里は秋めきちぎれ雲
信楽の狸並んで太っ腹

西宮市 西口 いわゑ

歯医者さんを恨むことなどないんです
曇りのち晴れの夫婦に酒がある
秋の天ばんやり見てる詩人なり
世界地図深い憂いに包まれる
天高し光る秋刀魚を二匹買う

西宮市 山本義子

西宮市 菊池トミエ

通された広い客間に落着かず
どうでもいい話ときどきむきになる
さわがしい街だが暮らしよいひとり
ど忘れです ほんと忘れたわけでない
渡り鳥になるのもいいな 来世には

西宮市 緒方美津子

明日あると思う油断に踏みはずす
世のうつり氏子幟にコマーシャル
亡母という黒い台紙の写真帖
見たままを描かぬ人気の似顔絵師
美味いもの一時預かる御仏壇

西宮市 牧刈富喜子

曼珠沙華トンネル越えた辺りから
ペダル踏む闇にほのかな金木犀
食べつくし青虫木の葉になっている
ねぎ刻む空爆報道なお続く
神無月もいちど花の出番くる

西宮市 秋元てる

うまく炊け盛付け多目 栗ごはん
食べ過ぎてせんぶりの事 祖母の事
引越して半年ベランダ虫が鳴く
値も歳も思わず買った花模様
昭和一桁 年寄振りはまだ早い

はんやりと拾った貝の名も知らず
歩いても歩いてもひまわり畑
鐘をつく心の迷い消えてゆく
荷物捨てそして此の坂越えて来た
汽車は出る そして一人の母残し

相生市 中塚礎石

なぞなぞが解けないままに夜が明ける
沢庵に天下御免で乗る重石
醤油一滴おかずはいらぬ熱い飯
玉の汗 見事に風を捕まえる
懐かしいローカル線の継ぎ目音

姫路市 古川奮水

たこ焼の匂いに負けた交叉点
時限立法緊急自宅禁酒令
テロ対策修学旅行先変る
玉手箱開ける心地のゆうパツク
地下鉄を降りて浦島太郎なり

川西市 松本ただし

何れまた セールス名刺置いてゆき
冥土旅その日のために書き遺す
去る者は追わず焚火が消えたまま
金の成る木が見つかったことがない
船頭の櫂にまかせた川下り

川西市 西内朋月

したたかな明治の母の七回忌

すててこで梅と焼酎関東煮

手遅れになってしまった歯を磨き

齒科眼科泌尿器科まではしごする

名月へあげる団子で飲んでいる

川西市 米原雪子

子の心読む術親は鍛えられ

監督の言葉実った優勝戦

絵手紙に秋の味覚が乗ってくる

プライドに貧乏暮し強いられる

小さなナイフから起きた大惨事

三田市 北野哲男

神様の意地悪二人に別の夢

体型も市松人形に似ています

寝たままで頭を上げるのもお辞儀

涙腺の緩さで善人らしく見せ

後輩に間もなく敬語いりそうだ

奈良市 天正千梢

結局は自分を殺す事になり

裸の心でゆつくり経を読み

諸刃の剣組織の人事振りまわし

力こんにやく一串食べて山登る

仏閣が山にはりつく立石寺

奈良市 米田恭昌

聖戦という名でアンタ何すんの

機密費が息をひそめている役所

内憂外患総理の額寒くなる

恥ずかしくケイタイ鳴つても出ぬ初老

残暑まだ肌を露わにさせる秋

橿原市 居谷真理子

奥様は恋という名の病気です

狂い咲き自分に正直だっただけ

きつぱりとけじめをつけて孤に帰る

白足袋を脱げば獣の足である

爛徳利可愛く酔える歳は過ぎ

大和郡山市 坊農柳弘

越冬の仕度せつせと蟻の列

さりげなく時間ですよと起こす妻

渡り鳥シベリア海峡戻り旅

七五三晴れ着の孫の稚児化粧

渡り鳥国境線を越えて来る

大和高田市 岸本豊平次

川柳塔表紙面白寿の筆が描き

あの猛暑が秋の味覚を引き出した

おにぎりはカロリーよりも元氣くれ

マルチーズが連れで適度のウォーキング

庭畑の出来栄え喝采老い二人

香芝市 大内朝子

フルコース食べた帰りに食ううどん

甘い水深みにはまりゆく予感

思い出を運んでくれる赤トンボ

前向きに進むと風も味方する

まだやれる夢がひろがる秋銀河

奈良県 渡辺富子

信楽へ秋の七草遊ばせる

明日香路を巡るペアーの秋帽子

満月と一駅歩き恋予感

露を踏みヒールこつこつ朝帰り

骨太の楷書で大志書いてみる

滋賀県 中 宗明

不況時代会社よろこぶフリーター

独走にストッパかける苦言吐く

行く先をベットに任す散歩道

乗る人の顔皆なじみ過疎のバス

腹芸で世渡りうまくする男

和歌山市 木本朱夏

もつれ糸解けぬままに秋の底

曼珠沙華地獄極楽のぞき見る

コーランの響きが秋のテレビから(テロ 3句)

民族の血はふつふつと目には目を

聖戦を叫ぶ兵士の目の光

和歌山市 牛尾緑良

すぐ過去へ転んでしまいうティータイム

珈琲の海深々と恋沈む

牛丼を食べてから聞く狂牛病

輪廻いまホモサピエンスしています

賛美歌が流れ続けて神の私語

和歌山市 山口 三千子

明るい色足してあしたの夢を描く

過信してうっかり踏んだ自動ドア

心の海に沈めたはずが浮上する

気が付けば心の奥にみる砂漠

パノラマの景色心の画布に描く

和歌山市 川上大輪

目覚ましが鳴らぬお前も疲れたか

真つすぐにしか歩けない父の靴

連休のプラン浮いたり沈んだり

決断を迫られているグーチョキパー

笑い話のまま別れてそれっきり

和歌山市 楠見章子

目には目を風に託するマタイ伝

苦勞して釣った魚だゆずれない

紅筆が弾むわたしだけの世界

別腹の蓋にストレス溜りだす

振り向けば近場にあった景勝地

和歌山市 細川 稚代

幾度か関所くぐつて来た踵
久々の誘いへはずむ靴の音
いつか会う約束ばかり鰯雲
合縁奇縁ぬくい絆を信じてる
寂聴のひとこと抱いて床につく

和歌山市 山根 めぐみ

放つときな月は欠けてもすぐ満ちる
ストレスがパリパリ煎餅かみくだく
ラッパ吹く貴男の傍で気が細る
熟し柿なつかしそうに姑が吸う
しなやかな強さ女の目が笑う

和歌山市 青枝 鉄治

票もらうために見事な嘘をつく
傷口が癒えて謀反の首もたげ
諦めの良さには馴れているピエロ
隅にいる一言居士が目障る
外堀を埋めてから練る善後策

和歌山市 松原 寿子

冬音を温めて愛の距離守る
波瀾呼ぶ予感へ闇が忍び寄る
意に叶うこと少なかり人生譜
荒れている心をぬぐう瞳がぬくい
片思いのままで続いている絆

和歌山市 玉置 当代

みどり豊かな山に抱かれて母達者
思いやり欠けて空気が濁りだす
顔ぶれが揃うとなぜかほつとする
三百六十五日あんに燃えている
幕開けたとたん険しい新世紀

和歌山県 中後 清史

いつどこで何が起きるか知れぬテロ
殉教へ殉国の士をだぶらせる
野次馬でいられる内はよい火の粉
もう少しスローで喋れ真紀子さん
雑魚の眼に届かぬ国のお付き合ひ

海安市 三宅 保州

他人から余生と言われたくはない
まあまあとわけのわからぬ宥めよう
いざというときにマイクが入らない
浮気などできぬ男と釘さされ
王手飛車何度もあつた人生譜

海安市 谷口 義男

金婚を夢見て傘寿まで生きる
泣き落す壺心得て攻めて来る
根回しの努力が生きる黒子役
子のために美田遺さぬ老いの主義
最後の最後まで味方は妻一人

鳥取市 春木 圭一郎

酒のある暮らし人生艶を増す
酒に酔い負けた将棋を反省す
酒飲んでみんな忘れてしまいたい
酒注がれ意見の矛がにぶりだす
酒飲めぬ男へ娘嫁がせぬ

鳥取市 徳田 ひろこ

周波数びたり愉快な遠回り
鈍行の駅をエリートたちが越す
駅裏で親指族の発信機
ストールにすっぽり影を包み込む
結露の窓に思い出が浮いている

鳥取市 福田 登美

嬉しいと人に親切したくなる
余生まだ磨けば光る欲をもつ
思い出は褪せても揺れる軽い思慕
微笑んで風を読んでる振りをする
老いの身の脆さに触れず茶を含む

鳥取市 倉益 一瑤

泣き虫が今では強い母となり
うれしさの中で生れてくる涙
豪快な笑いに負けたなと思う
飾らねばだんだん小さくなってゆく
特売日老母と孫とおしめ買う

鳥取市 夏目 健一

雑音の中から本音拾いだす
できぬこと言って反応読んでみる
頼りない愛を信じて飢える子ら
恋ごころあっても誰も疑わぬ
逃げ道を確かめながら吠えてみる

鳥取市 西村 黙光

多発テロ戦さの構図描き替える
戦争が思い出させる青春譜
統制だ配給物資だ生き地獄
地球儀を回せば飢餓の呻き声
家もなく職ない飢えの民侘し

鳥取市 杉本 孝男

平凡なくらしの良さをまだ知らぬ
知らぬ振り隠しカメラが皆あばく
腰痛を庇う両手がしびれだす
肩書きのないクラス会丸く酔う
言い訳のコントを抱いた朝帰り

鳥取市 美田 旋風

少子化がタネなしブドウでも流行る
変化球投げ合う親子歳をとる
回り道ばかり歩いて白髪増え
毒舌を聞いて安心子が帰る
笑顔さえあれば誰とも付き合える

鳥取市 富山 檳榔樹

落葉掃く天衣無縫の焚火する
間引きされリストラの風凍りつく
どうなさる山は生きてる火を噴くぞ
しなやかに力量示す男舞い
こぼれ種大きな夢を抱え込む

米子市 政岡 日枝子

コスモスが見える窓だけ拭いてある
人を怖れて裏山ざわざわする
パノラマのように朝日を見る夜行
ワイン飲む少し晴れやかな顔で
玄關をあける気力も失せた鍵

米子市 林 瑞枝

幾星霜山稜守った杉木立
少々に驚いてたら身が持たぬ
一期一会の出会いタクシーの大阪弁
鳥取県勢 氣勢の上がるカワイヤノー
暗黙の了解笑顔に包まれる

米子市 鷺見 正子

五十坂越えると思えるものがある
三手先読めない方が生きやすい
抜歯した日のカツ丼が許せない
馬鹿じゃない証拠損得なら分かる
銀行が祝ってくれた誕生日

紫にあける大山神々しい

米子市 青戸 田鶴

一夜だけ炎える花にもよるこびが
きりかえて楽しい話だけに
予感よく当り私は頼られる
戦いが始まりそうで落着かぬ

米子市 野坂 なみ

深刻な話小児科医がいない
紅葉の樹海深入りしたくなる
クロン牛かも とびきりの霜降りだ
深夜ラジオ時にゆったり聞いている
うれしさは人に貸す手がまだ少し

米子市 門脇 晶子

母の手は何時でも拝むかたちして
つまづいて急に信仰深くする
ラベンダーの中で夢かもうつつかも
仏像に触れて一つの願いごと
肝臓の本音に触れた小さいメス

米子市 白根 ふみ

森の中秋のこびとと戯れる
倒木のしづく明け方にはきのこ
不真面目な冗談だから笑えない
鎮守の森に代々支えられている
風穴をあけて退屈から抜ける

米子市 光井玲子

倉吉市 山中康子

吉報だ私の中で鶴が舞う

束の間のよろこびギョッと抱きしめる

愛をいっぱい詰めておかねば母の蔵

思い出の柳行李が捨てられぬ

辛うじて外形保つ祖父の家

米子市 木村春枝

逆縁の葬に涙の曼珠沙華

それから子供に一步譲つてゐる

あきらめて居ながらついつい夢を追う

姉妹で癖それとなく亡母に似て

今にして明治の父の氣骨知る

米子市 中井ゆき

旅がえり先ず仏壇に礼を言う

大鯊の機嫌の悪さ横をむく

私よりからす承知の生ごみ日

老犬の耳にゆっくり話する

夕風に急に逢いたくなつて来る

倉吉市 野口節子

と月とお日オアシスだった母の海

古だんす妙にこのごろ懐しい

名人級の嘘にころりと騙された

誘惑に負けてしまった午前様

人情をいただきました信濃旅

深刻に世界が揺れるテロ多発

レットルに眩んで中味見うしなう

その先は言い訳になる愚痴になる

沢山の薬を飲んで異常なし

老いの身に張り合う趣味で馬が合い

倉吉市 牧野芳光

また会うか会えぬか知れぬさようなら

摺り鉢の底に落ち込む冬を待つ

真つ白な地図足跡で汚していく

木枯らしに似合うコートを買に行く

本当のことが上手に話せない

倉吉市 猪川由美子

教師ですと大きな声で言えませぬ

切り札がだんだん減つておんな老い

改革の痛みも知らず票を入れ

年寄りの話は回路変えて聞く

期待せず求めもせずで安穩だ

倉吉市 松本よしえ

年齢と言うブレーキが効いて来る

体温の低い人には近寄らぬ

一昨年の護符が時効になっている

どうしたと言われないようシャンと立つ

申どしの男頼んで柿を採る

倉吉市 最上和枝

阿寒湖のまり藻沈んでいる美学

バックする車に不意を突かれてる

お静かに虫ご自慢の四重奏

物腰は静か魂燃えている

駅伝へ泡立草が旗を振る

鳥取県 岩崎 みさ江

母性には出来ぬ戦をする男

闇を照らして悪魔は進むトマホーク

トマホークまるで命があるように

飢えた子の目よ哀しみに箸を置く

君のため兄は南へ征ったきり

鳥取県 土橋 睦子

所帯主替えてすっかり気が緩む

夕顔が人待ち顔で咲いている

爽やかに思いを告げてグッドバイ

離婚した友達がいるうれしそう

一滴も飲めぬ男に芸習う

鳥取県 原 みさを

幸せになれそう石に腰おろす

本堂の西日に瘦せたソクラテス

Gパンの少し軽目な朝を出す

アラビアンナイトに今宵トマホーク

地球儀がまた揺れているふるえてる

鳥取県 村上 信子

見栄を張るその分肩が重くなり

秋だから変身しよう髪を切る

ワイングラス底にこだわり少し溜め

花もいいだんごもいいと欲を出す

欲がありかなわぬものに憧れる

鳥取県 乾 喜与志

たそがれの空に明るいお月さま

半生の妻よもうすぐ会えるかも

物忘れまだ忘れたと気がつかず

晩酌を忘れぬ膳にしてくれる

吟詠を楽しむだけの散歩道

鳥取県 西川 和子

送り仮名一つ誤解の種となり

報復へ子等の澄んだ目見て欲しい

力瘤やせて子供の手を借りる

感動の無い一日で句にならず

師走風やり残しには目をつぶる

鳥取県 近藤 春恵

私の脳誤作動ばかりして困る

イベントのカニ汁二杯温まる

人情にふれた故郷の風に逢う

愛情をたっぷり受けた子が叛き

自己主張曲げずに生きた父の背な

鳥取県 谷 口 次 男

どうしたもこうしたもないリストラだ

神々ようしたテロが後絶たぬ

よく怒鳴る社長が陰で泣いている

暗闇にサタンのような神が居る

西の空ツアーに見える雁の群

鳥取県 国 森 武 子

茸があり栗あり日々が楽しみだ

世は不穏だけど大地は裏切らぬ

難民は気の毒早く救いの手

一回の此の世難民で生きるとは

恵まれてとも言えぬけど不足なく

鳥取県 津 村 八 重 子

米寿杯受けたうれしさ忘れない

良い嫁で笑いぶくろをいつもさげ

病む私ささえてもらう御近所で

ため息は他人に見せない場所に捨て

周囲皆仏に見えるうれしい日

鳥取県 田 村 き み 子

信仰はしてるが愚痴もまだ減らぬ

美しい女にもあった武勇伝

低気圧の妻に冗談二つ三つ

肩書が消えて退屈する五感

笑いたくも泣きたくなるばれた嘘

鳥取県 石 尾 かつ 乃

朝寝坊今日のリズムを狂わせる

ここまでの話に涙こぼれそう

秋風に虫と小鳥のハーモニー

伝えたい言葉が出ないまま別れ

長年の付き合いだからピンとくる

鳥取県 吉 田 孔 美 子

しあわせネ育児最中の小走りネ

迷わずに産んで育てた花道だ

嫁かないと母の歳月片づかぬ

氷山も溶ける秘密も明かしとこ

老人クラブから招待されて初参加

鳥取県 太 田 幸 枝

憧れの男とダンスのバラの夜

何気なく言った言葉が仇となる

大ジョッキ氾濫の泡口で受け

テロ事件対岸火事と見ておれぬ

力抜いて気楽に余生今日も生き

鳥取県 上 田 俊 路

平和とはこんなに脆い自爆テロ

宗教が狂気か解せぬ自爆テロ

善人の仮面ときどき重くなる

新聞のおくやみ欄で生かされる

多数決次の景色が見えて来ぬ

鳥取県 鈴木公弘

真相に触れないほどの仲がいい
込み入った話はしない雨やどり
わたしより少し太めの人が好き
芸術の秋にも掘りに来ませんか
回り鮎そんなに急ぐことはない

鳥取県 橋本多哥由

ふる里の家が炎に包まれる
平凡に暮らし楽しい余生なり
風呂敷を揚げた後で妻に詫び
甘言にだまされまいと念を押す
人権がときどき悪に味方する

鳥取県 林露杖

コスモスが背丈を超えて未だ咲かぬ
首手足四十八枚エレキバン
これしきと思う動きに噛みつかれ
ゴミばかり増えて心が病んでいる
大食い競争平和が生んだナンセンス

鳥取県 埜寛子

新世紀をまた戦争で汚すのか
床ぬくもれば難民の子ら抱きたく
ワタシ音痴旅の終りになって知る
級友集う皆膝痛の大先輩
子らは皆老いは自由というけれど

出雲市 園山多賀子

木杯が金屏風に映え風薫る（薫風師叙勲記念大会 2句）
温かい握手右から左から
傷心を鼓舞してくれる空の碧
諦観の忍の字を書く座り胼胝
疑問符は握らぬ両掌開けたまま

出雲市 吉岡きみえ

昨日と同じように生きている
でこばこの道も走ってきたわたし
みの虫よしっかりしなよ台風だよ
深追いの傷に三日月突きささる
とろりとろりお酒といつも妥協する

出雲市 久谷まこと

勘違いでしたて済まぬ句読点
生き方を変えても所詮茨道
意地っ張り明日の孤独が待っている
きっぱりと言ってもらいたい陰の声
駆け足の終点となる大晦日

出雲市 青山久子

うつし世の夢くり返す砂時計
揉まれては骨を抜かれてゆくタオル
Eメール受けてやさしい鳥になる
許されて涙が甘くなってきた
おきざりにされた新聞ぬれている

出雲市 佐藤 治代

お暇なら充分あつて金がない
おふくろの袋を出ない甘えん坊
難問が解けてお茶漬けほつとする
母ひとり大きな里の秋を抱く
淋しくてむなしくて今あめなめる

出雲市 板垣 草丘

栗ごはんあしたはむかごめしにする
置き場所がありますピアノ持つて来い
十年をきっぱり辞めてゆく娘
アフガンがかわいそうになる新兵器
戦争は年中風呂のない地域

出雲市 石倉 芙佐子

人妻のふと振り仰ぐ蒼い月
十字路でまだ迷つてる人の妻
あるときは妻という名を盾に取る
それからはゆらりゆらりと秋の道
人妻が効いているのも六十路まで

出雲市 小白金 房子

回転すし孫食欲の皿を積み
遺句集へ友の面影重ね見る
才女にはなれず農婦で生きる詩
牛の背でトンボも憩う秋の天
こはれ種咲いて和ます朝の庭

出雲市 岡 あきら

コスモスの風にお辞儀をくり返す
香煙に父母を浮かべて秋彼岸
のり易いことを見越した矢がささる
旬の茸一本今日の市場籠
ガス点火ひとりになった夢を見る

出雲市 富田 蘭水

精いっぱい松茸などに用はなく
ぼろぼろになつても心売りはせぬ
肚力まだまだいつかを信じてる
メモ生かし忘れを乗り切る老いの海
酒愛でて豪快にあす信じてる

松江市 小川 注湖

騙すこと騙されること嫌いです
六十年妻の手綱のありがたや
退職後カレンダー日々よく詰まる
妻元氣携帯朝も鳴ってくる
やらやと小さい幸だこれでよい

松江市 川本 畔

秋風も素通り出来ぬ薄い肩
一言が欲しくて港まで走る
淋しさを絡ませながら膝を抱く
音たてたポストが秋を深くする
カレー煮るわたしの時間深い夜

松江市 津川紫晃

幸せの尺度は胸の奥にある
幸せは家族の箸がみな揃い
泣き声がびたりと止んだ母の膝
チエツクする赤鉛筆の独り言
蝸牛 家が重たい日もあろう

松江市 佐野木みえ

儂げに気ままに揺れる秋桜
雨宿りタオルを借りた人の情
蒸したオル顔に理容師なすがまま
梨を食う音さくさくと夜のしじま
写経終え朝の光がまぶし過ぎ

島根県 堀江正朗

半世紀越える闇路の小さい夢
いただいた歳が教える曲り角
見えずとも胸にふつつ湧く情け
手さぐりを笑うか逃げる探し物
年齢を味方のように負け惜しみ

島根県 堀江芳子

バースデー正朗さんは卒寿です
向かい合う笑顔宝にして生きる
大きな窓小さな窓にも満ちる秋
空でさえポトリポトリと貰い泣き
腹立ててきまり悪そう手を握る

島根県 伊藤寿美

今日の雨ショートショートを読む愁思
備長炭置いた客間に通される
石路の黄に染まった二羽の蝶
後ろ姿を写す鏡を傾ける
待合所いつもの人も待っている

島根県 榊原秀子

あやまちをまた繰り返す彼岸花
したいことまだ積んである曲り角
雑談がはずんで消した雨の音
花の苗わけて貰った秋日和
雨のち晴れ 私が咲かす花の数

島根県 森茂美

鍬洗う老婆の背中には茜雲
軒下に夜風が誘う虫の声
コスモスの町は槌音ダムの町
収穫の無花果背なに秋動く
運動会の稽古に気合い乗る童

島根県 多々納テル子

秋が来て堪忍袋しめ直す
雑巾の儂い命使いきる
指先に恋慕ただよう赤い爪
もてなしへ一輪の花演じてる
磨かれたコップ心も透き通る

大阪市 長谷川 会 美

師のジョーク傷もつかずに句評聞く

老犬と一緒に生きる青テント

あつさりと別れる程の恋でした

テレビ前ほとんど食べたおせんべい

大阪市 黒 田 真 砂

日本海の逆まく波にうつ捨てる

ふと夫の裏の顔みた口喧嘩

良い夢の続き見たくて二度寝する

ふいに出一言悔いて仕舞風呂

大阪市 中 田 あい子

甲子園涙で掬うた砂は銀

ひとり居は心の栓にねじをかけ

不況からぬけ出すステップほしい今

二千年宗教戦のひどいテロ

豊中市 井 上 直 次

ビリに居て先行く人をよく眺め

エレベーター若い異性へ目をそらす

のびた爪湯上がりに切る秋夜長

欠席の返事を出した気の軽さ

豊中市 岸 田 知香子

正統派人の違反に渋い顔

長い物に巻かれて余生恙なし

閉じかけたドア大物がお通りだ

運動会パレード流す秋の雨

岸和田市 木 村 正 剛

肝心なこと雑音となる補聴器

車椅子ぼくが乗ってる夢ばかり

大地震に備えて鯰飼ってます

まだ苦勞足らずとみえて素直だね

岸和田市 原 さよ子

下積みの苦勞トップの温かみ

血糖値に縛られるさく言う食事

まだ少し女残しておしゃれする

ふぐだけは老舗の店へ食べにいく

堺 市 源 田 八千代

何はともあれおばちゃん連のこのパワー

自衛隊に出征兵士だぶらせる

作戦をアニメの如くとらえてる

秋思ふと孫らの未来如何なる

枚方市 二 宮 山 久

まちわびた初孫笑顔とツーショット

孫をだく娘に妻の若かりし

宅急便届くふる里秋本番

自爆テロ世間ゆるがす大不況

寝屋川市 柴 田 英壬子

立ち読みで覚える技ももう出来ぬ

出来るのは朝の挨拶歯を見せて

黄金の刻を大事に喜寿近し

鴨すきを食べに小雪の奥琵琶湖

交野市 山川 日出子

お月見はすすきに団子芋お酒
長嶋さん監督やめてヒーローに
爆弾と食糧落とす米英機
また戦火深い溜息戦中派

西宮市 刈田 泰司

原石を信じて孫の磨き甲斐
涼風が立てば行く夏惜しまれる
歯よ舌よ義歯に抵抗せぬように
石に這う虫にも届く除夜の鐘

西宮市 井上 松煙

コスモスと浮気している赤とんぼ
かまきりのこわい貌にある孤独
なるようになれという気が強くなり
金婚が孫のカメラに嬉しそう

兵庫県 大谷 幸次郎

ときどきは人に会いたい孤高なり
考えるばかりで知恵が湧いて来ぬ
別段に秋でなくても肥えている
奉賀帳とてもとてもと拝辞する

鳥取市 岩原 喬水

大軒ラップをかけてやろうかな
中年の恋は打算と欲がある
朝帰りいつもの鍵で戸が開かぬ
もつれ糸すすき酒が解きほぐす

鳥取市 山本 益子

手加減はほどほどにして子を諭す
人魂は不滅に生きて家護る
すすきりと腹割つて言う仲直り
余生への句読点打つ退職日

鳥取市 近藤 佳子

作務衣の僧キャッチボールに若さ飛ぶ
父の癖吞めば必ず二日酔い
送り仮名迷つてばかり戦中派
金もうけうまくいくつも顔を持つ

鳥取市 前田 一枝

甘い口手軽に乗った落し穴
大虎をバトカーに乗せ呑みそびれ
喪のハガキ年賀はがきとすれ違ふ
大根も役に立つてゐる村芝居

鳥取県 権代 康女

腹八分守れないから胃が痛む
玉子割り手を洗わない人はいや
肩書きのわりに責任感のなさ
クリに茸沢山とつて秋深む

米子市 永井 三津子

オベを待つ後悔ばかり積み重ね
死ねませぬ老いたかあさん看取るまで
自己中にや人の迷惑見えもせず
失敗も許す差の有り嫁と孫

第21回横浜川柳作家賞

奮って御応募下さい。要項は下記の通り。

課題と選者

「自由吟」 鈴木柳太郎
(2句3人選) 堀井 勉
「エキゾチック」 播本 充子
(2句3人選) 関 水華
内平登代子
斉藤よし一

参加費 1,000円 全国から応募可
賞品 3位まで名前入り楯、20
位まで呈賞

締め切り 14年2月28日(当日消印有効)

発表表彰 14年4月29日

第73回京浜川柳大会席上

投句方法 葉書大用紙に自由吟、課

題吟別 2句連記、ご記名の上、

投句料と共に送り下さい。

送り先 横浜川柳作家賞係

〒252-0801 藤沢市長後1537

高橋里江子宛

主催 横浜川柳懇話会

満足な一日でした合掌す
予期しない人に出合った玉手箱
鳩時計少しなまけて顔見せぬ
彩のない国にいましたアイマスク
ふいご吹く筋が模様になっちゃった
自らの賃金カットせよ議員
反省をモンキーに習ってやろう
理不尽だ○か×かでの逃げ道

松江市

安

食

友

子

この人は同級生だった計報欄
老い一人仮設に震災一周年
ごめんなさい言えずにのどに詰めている
年金が有るから生きて来た老後

倉吉市

淡

路

ゆり子

子

米子市

神

庭

詩

郎

第3回 文学ルート川柳募集

文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

募集作品 文学ルート(5市)周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳。(未発表のオリジナル作品に限ります)

宿題・応募先(宿題に応じてご応募ください・各2句)

松江市「城」「そば」松江市経済部 観光文化課

〒690-8540 松江市末次町86

TEL(0852)55-5293

FAX(0852)55-5553

尾道市「路地」「古寺」尾道市産業文化振興部 観光文化部

〒722-8501 尾道市久保一丁目15-1

TEL(0848)25-7366

FAX(0848)25-7293

今治市「渚」「海峡」今治市教育委員会 文化振興課

〒794-8511 今治市別宮町一丁目4-1

TEL(0898)36-1608

FAX(0898)25-1700

松山市「花道路」「マドンナ」松山市企画財政部 国際文化振興課

〒790-8571 松山市二番町四丁目7-2

TEL(089)948-6634

FAX(089)943-9001

高知市「自由」「鯨」高知市教育委員会 社会教育課

〒780-8571 高知市鷹匠町二丁目1-43

TEL(088)822-6394

FAX(088)823-9361

応募方法

- ・専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品(FAXによる応募可)
- ・応募作品には「宿題」及び、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。(雅号の場合は本名も明記)
- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。

応募締切 平成14年3月31日(日)(当日消印有効)

出品料 無料 選考 平成14年6・7月

発表 平成14年8月、入賞者に通知します。(表彰式は、平成14年11月を予定しています)

選考委員 (第二次選考) 仲川たけし・吉岡龍城・橘高薫風
(第一次選考) 長谷川博子(松江市) 小島蘭幸(尾道市) 渡邊南奉(今治市)
楠本知由(松山市) 荻谷たかし(高知市)

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

自選集

橘 高 薫 風

月 原 宵 明

佳き年の後ろ姿へ除夜の鐘
秋の夜の松山城よ唐津城よ
雨さんぞ酒呑童子の眼にさんぞ
笠智衆晴じゃ降りの志村喬
畳まれて目だけになった鯉のぼり

黒 川 紫 香

正 本 水 客

静けさや此処まで来たかお茶の味
お互いに連れがあるので知らんぶり
口髭がもじゃもじゃちびた煙草喫う
一言は何か言いたい生薑糖
人間らしく生きて行きたい九十四

竹 内 紫 鏑

板 尾 岳 人

教師問う父の名いえば湧く笑い(奇名多き家族 2句)
名づけ屋ともじり屋ほくを振りまわし
シニアとはすでに弱者よ入館料
似顔絵の若さがみやげ学園祭
モノレール富士の数秒見た驚喜

悪友と言う誰よりも頼る奴
この家はあるじも猫もいま昼寝
父さんより僕が偉いと肩車
水溜り後ろ向いたので飛べず
風鈴の短冊飛んだままに秋
失言のない演説など信用せぬ
本心を見せろとはおこがましい
同情の言葉とだけはうけとれぬ
挨拶も出来ぬ子供に育てあげ
蟬時雨の中に一とき座つてみ
十二月小さな耳もよく聞え
降る雪を待つて父の樹母を待つ
淋しくはないが孤独な十二月
十二月十二日生れ岳人様
あの人と出会った街も十二月

小林 由多香

瘦せた土地やっぱり苗も痩せている
ゴミ拾う地球の未来案じつつ
楽しくて笑いすぎたか腹がへり
世のしくみ不法投棄もしたくなる
懐かしい風なつかしい人に会う

工藤 吟笑

行き詰まり明治の知恵を借りに来る
程のよい嘘で縁談まとめられ
竹槍で勝つと思つた遠い過去
石垣の島に眠つた鉄兜
鍋釜を持たずに暮らす小鳥たち

木村 あきら

北風にワンワン風が空に舞う
虎落笛鳴つて師走の風寒し
スス竹の売り声凍る昼下り
ひたすらに海を目指している小川
日溜りで猫が昼寝をする長閑

西村 早苗

わらべ唄もうそろそろに眠る瞳だ
猫舌へ粕汁やつと冷めたよう
また寒くなるねおそばに酒かけて
あの女の花顔がきれいな菊花展
遅れたなと思ひ入つて来た座席

榎本 吐来

浪人のシナリオも持つ豪華邸
リストラやバイトの妻が威張り出し
テロ賄賂今日もニュースが充ち溢れ
秋桜出るは溜め息ばかりなり
満月を背ににやにやとそわそわと

石川 侃流洞

曾孫誕生 妻いそいそと爛をつけ
ジャンボくじ当てて福祉へ出すブラン
辞世の句できたらお迎え承知する
農薬へびくともしない虫がいる
医療改革 痛みばかり負う余生

田口 虹汀

一句なと石は無理だが短冊に
馬の背を分ける夕立遭わぬまま
ひと月で私も満の九十二
炬燵では見えぬ句材へ杖を借る
安心して牛も食べない丑の年

西田 柳宏子

味覚未だ達者で秋を食べ歩き
携帯のマナー傍若無人なり
ちょこまかと雑用こなし何でも屋
簡潔な語尾に自信が見えかくれ
深い溝越えて浅瀬に足とられ

堀端三男

店舗改装 味が落ちたという老舗
集合写真 歳はやっぱり争えぬ
二輜目の前から乗ると決めている
天災より人災多い死亡事故
もてなしに苦勞はいらぬコップ酒

舟木与根一

いい奴が鬼籍に移り秋深む
母の味 小言も言うてくれる店
割り勘に席順があるのも歴史
旅立ちの順序決めてる遺言書
田畑と墓があるので老夫婦

阿萬萬的

老いてなおファイトでつなぐ趣味のみち
I・T化に取り残された八十路坂
出しゃばって掴みそこねた運もある
司馬遼の道を訪ねる秋日和
万歩計いつもの人と犬に逢う

藤村ノ女

波を打つ金波銀波の野の芒
煩惱をシツクに包む秋の風
いい電話らしい目元が笑うてる
くつろいで話の出来る友を持つ
耐えて来て笑う芝居も上手くなる

宮口笛生

丹精の菊が大きく咲いてくる
菊見事今年も写真撮っておく
来客に褒めていただく菊の出来
写真出来て北海道を振り返り
交番にパトカーがある日の安堵

河井庸佑

借景の庭山茶花が彩を添え
晴耕雨読きょうはのんびり軽い本
書き終える積りで五年日記買う
庇い合う心で回る夫婦独楽
いそいそと行く顔見世へ母の供

恒松町紅

意地悪はもう呆けていた同窓会
欲目かな一番利口そうに見え
再びの夢を追ってるループタイ
老眼鏡の裏側が燃えている
人情が一つ落ちてゐる無人駅

土橋螢

恋びとの名前を呼んで秋惜しむ
八時間睡眠十六時間安心
平成に昭和の利子を食い潰す
香水をつけて文化の夢フェスタ
地図にないところも歩く膝栗毛

野田 素身郎

忙しさを妻楽しんでいるみたい
直系の孫 僕に似てない色白で
何でもない事ができない身障者
丹念におめかししても二児の母
松茸のこれはお山で採れたもの

越智 一水

ああ秋よさんまは煙までうまい
大根は脇菜の種も入れて蒔き
老夫婦どちらともなく折れている
弱い者いじめ知りつつ煙を打ち
絵手紙をもらい安らぎ取り戻し

小西 雄々

繰り返す火気の注意へ山は雪
阿弥陀さま引導へ向き変えないで
鳩尾に秘める火の気へ媚び忘れ
地方色ゆたかな砂丘こころ溶け
火の思いとても消せない秋桜

芳地 狸村

日本語で知らずローマに今着いた(ローマ 5句)
シグナルの赤が泣いてるルール無視
ひるめしのピザがローマの旅おわり
うまいこと財布とられたひったくり
またくるとコインを投げている泉

遠山 可住

ソーメンを二階で食べる遠花火
子や孫と暮らす部屋割り出来て
水をとられてるともしらずへちまの根
年寄りには神さま病院ねんごろに
いい月が出ると一杯ほしくなる

斉藤 昴

節くれた手から民話の芽が育ち
足裏が忘れはしない丸木橋
ニュートンのりんごも旅をしたかろう
コンパスで描くと個性出ない円
コスモスの柔軟性を見習おう

八木 千代

シャンデリア人を祭りに溺れさす
祭り客なり晴れやかに眉上げて
光琳の間に九百の瞳がキラキラ
金色の屏風に君の金の影
美しき秋の宴のクリスタル

藤井 明朗

みんなお蔭さま長寿の台変り
二千年宇宙の旅は夢で見る
難民の不運世界平和ならず
歳は取っても負けぬ気が負けている
につぼんが好き忘れず渡り鳥

波多野 五楽庵

北へ一步浜夕顔の静かなり
綻びの美学を知っていたりんご
この世からますます遠くなる耳よ
故里をいつかは捨てる桜貝
南無大師金剛雪になりました

森 下 愛 論

手を結び花野抜ければ弥陀の里
カラッポの頭に蓮の花咲いた
夕焼けへ石積み過去へひとりぼち
4Bの芯が時々息切れす
はんなりの日差しの中のカテグリー

野 村 太茂津

老い毫れてエアロビクスに走り出す
賞味期限切れた老妻には負ける
ブルースのリードに乗ってくれている
老兵のたわごと俺にも言わせろ
年末はまた来年の事呆け進む

川 島 諷云児

従容と逝きたし延命はご免
家族とや近くて遠い向こう岸
天命のままに余生を走りぬく
人生の岐路にもほしい道しるべ
うなずいてやるだけでよい妻の愚痴

両 川 洋 々

夢を追うピエロで僕が終りそう
手なずけた鬼が裏切るかも知れぬ
ダイヤルを指が覚えている不幸
小さな鬼で炬燵を出たがらぬ
人に飢え人に疲れて年が暮れ

八十田 洞 庵

傷口の深さにめげず火の匂い
雑魚のまま朽ちる頭を撫でている
縄文の壺も知ってる陽のあかり
アラビアの夜も満月だったよね
受難濃きクルスの影を今に見る(平戸にて)

玉 置 重 人

緋けば和顔愛語に叱られる
勲章のように老斑ふえてくる
立山にのぞかれていたにぎりめし
ひと目千両ロブウエー下の紅葉
紅葉の余韻に浸る黒部ダム

河 内 天 笑

寂聴さんの名説法へなびく葦
隣席へ揚羽がとまる如く美女
瞑想の時間をくれるハーブティー
転げこんだ勝ちで自信をとり戻せ
大好きやけど恋人と違います



板尾 岳人 選

鳥取県 山宮 愛恵

お洒落して生きいき生きる策を練る

血流をサラサラ今日も風まかせ

人間が好きにんげんに騙される

月光が憂いを深くして困る

皺の数 付加価値ゼロになるお歳

松江市 山根 邦代

粗大ごみ自分で言わぬことにする

強いこと言わないようにしています

狭い家炊けた炊けたと炊飯器

雨垂れのような小言が伝わらぬ

食欲がウエスト太くしてしまう

兵庫県 安達 厚

名月がきれいと言いに妻に呼び出され

嘘少し混せて自分史書いてみる

大輪の菊過去のこと語らない

輪になればみんな絆で結ばれる

猪は後継ぎのいる過疎の村

極楽で会う約束を妻とする

極楽へ一足先に妻の旅

長の付く役は何でも引受ける

生涯が学習九十のカタカナ語

浮世でも浮いた浮いたで過ごせない

京都市 清水 英旺

女房の趣味に染まって生きている

両ほほをぶたれてキレたブツシユさん

キリストもアラアの神も渋い顔

鈍感でよかったまだまだ生きていく

雨戸ひく手を止め仰ぐ蒼い月

府中市 馬場 利子

無人駅母の面影風となる

秋雲に乗せたい夢が一つある

淋しさに車線変更古里へ

こぼれ種明日の夢を見て過ごす

秋風と喋って今日の謎を解く

河内長野市 大西 文次

藤沢市 妹尾 安子

山坂を越えた伴侶の皺は見ぬ
ベットまで逃げ出す祖母のおせっかい
チケットのノルマにあえぐ馬の脚
ご近所を起こす元氣なハタキがけ
還暦に孫とそろいの赤い靴

札幌市 三浦 強一

美しく老いるに年金では不足
胃は丈夫賞味期限は気にしない
携帯の普及率から外れてる
皺ひとつ増やして老いの顔つくる
お父さんの仕事と分かる台所

大阪府 前田 忠子

空蒼し凜と名月黄金色
十葉の香りに出合う亡母の恩
家宝なる骨董鑑定せず宝
骨惜しみして後悔が付きまとう
爆破テロ夫の帰り待つ不安

北九州市 岡田 幸生

飢餓の子を思えと叱るパンの耳
ピリ辛が好きでカルテに叱られる
光らない石の磨きも請ける塾
再職の喜び磨く朝の靴
ひたむきな介護へ神も味方する

奈良県 古手川 光

きつちりと整理してから落着かず
食うために生きてるような伸び盛り
駅々で呼吸しながら行く電車
タイミング逃がすと言えぬ頼み事
聖職のせいはいりっしんべんでした

奈良県 江波 正純

骨太の魚はやめて秋刀魚買う
火遊びの火種死ぬまで放さない
月並みなお世辞にひよいとのつている
銘水もベットボトルで身売りされ
まだ土になるには早い夢がある

横浜市 近藤 道子

日めくりが瘦せて私が太つてく
天高く展覧会をはしごする
真実が二つあったらどうしよう
割り切っているはずなのに愚痴が出る
報復と言うには空が蒼すぎる

横浜市 三村 八重子

実りの秋行ったり来たりお裾分け
揉む余裕出来たら母の肩が無い
ささやきに私の積木崩れだす
想い出はベールかぶせて棚の上
他人には水に流せと軽く言え

横浜市 川島良子

故郷の土に還ってきた亡母よ
疑った日からの雨が降り止まぬ
人間を粗末にはいませんか
イヤな事忘れてしまふ癖がある
泣いた分明日はおもいつきり笑う

横浜市 福田由美子

鼻づまり寝る楽しみを奪われる
覚えたて手品のタネを教えてる
喫煙に妻も離れて身を守る
切れ味がおいしさを増す技となる
ゴミ置場 網の次の手待つカラス

横浜市 吉田裕峰

菜園に励み食卓ベジタリアン
青虫も一緒に茹でて和えている
自分ではうっかりなのに呆けにされ
来客にボチの持ち芸リハーサル
好物のスキヤキ鍋で迷い箸

横浜市 石原三郎

老妻は男女同権口にせぬ
無愛想がお世辞言うのも歳のせい
泥舟と言われ日本に住んでいる
生き延びる足に優しい靴見付け
庭の樹が台風来ると騒ぎ出す

横浜市 北沢街湖

便利さを追って地球が病んでいく
うますぎる話何やらきなくさい
石橋を叩いてチャンス取り逃がす
携帯が命令を出すにわか雨
箱入りの娘で表しか見えず

横浜市 芦田鈴美

新住所覚えた頃に風邪をひき
組板の鯉の尾鰭にある主張
その先を読んで私の負けとなる
簡単に受けてじわじわ重くなり
高価だと知らないうちは欠けもせず

横浜市 鈴江純子

微笑みをもらって温い日を過ごす
娘の日記消えた一行気にかかり
セミダブル大の字に寝る妻の留守
巣立ったと思いついつい勇み足
取り敢えず元気な子ねと言っておく

横浜市 荒井広和

負け犬が今日も吠えてる縄のれん
一年の苦勞が光る菊花展
菜園へ苗と明日の夢も植え
聞き役的笑顔に作意などはない
人生の節目節目に唄があり

東京都 清原悦子

父親の笑い袋は太かった
やりくりがメチャクチャになるこの師走

退屈で喧嘩の種に芽が出てる

風邪薬飲んで働き蜂となる

一瞬の夢をもらつた宝くじ

岐阜市 平野あずま

新米の一粒ずつにあるいのち

ちぐはぐな服でも案山子凜と立つ

淑やかな野心が並ぶ華道展

永らえた命を飾る数え唄

ビギナーの指にパソコンすぐ拗ねる

鳥取市 録沢風花

一万歩わたしひとりの風の中

お隣の犬に口止めておいた

旧家には女の涙埋めてきた

未完成だから光っている若さ

いつの間にか柱にされて肩が凝る

鳥取市 森美智代

延々と誰憚らぬ曼珠沙華

貝の日が続き世間が見たくなる

夕食はひとりほかほか無洗米

好き嫌い玉虫色にゆれる秋

病みそうな心細さに猫を抱く

鳥取市 永原昌鼓

飛ぶ鳥へ国境いくさありません
血税の行方をとくと御存知か

外務省絞れば膿がもつと出る

泣き虫に妙薬ひとつ母の膝

ささやかな幸せ抱いて今日も暮れ

鳥取県 澤裕子

腹を割り話せば誤解とけて行く

飼い主に似たのか犬も気が弱い

燃え尽きて落葉はやがて土になる

木漏れ日の中で落葉は蝶になる

峠には澄んだ空気が待っている

鳥取県 鈴木一弘

まろやかな顔をしていて脛に傷

母さんと沖の漁り火呼んでみた

らくらくと隙間を通るスキヤンダル

無理せんでもいいですよとは上手口

無意識の言葉たびたび人を刺し

鳥取県 西垣美知子

飢餓の子のニュースに夕餉はずまない

蜂の巣をつついた様に世が乱れ

落葉舞うふわり地蔵の頭まで

やさしさを母の形見が覗かせる

忘れたらどんなに楽になるだろう

兵庫県 徳 平 穂 子

ダイエットどうでもいいの食の秋
畳替え心も変えた秋の風
お元氣ねボストの声に氣をもらう
在りし日の母と食べてる栗おはぎ
好きだよと言つてほしいな月明かり

神戸市 両 川 無 限

鈍行に乗れば出番がありそうだ
母に似た満月だから見飽きない
聖書読む僕は弱虫かも知れぬ
ときどきは妻のハートをノックする
号令を信じて敵の中にいる

神戸市 山 口 光 久

澄んだ目は人を欺くことはない
私にはあなたがすべて羅針盤
過去のこと染みのところは蓋をして
先ず一杯少し酔わせて聞く本音
貧すれど金につられることはない

神戸市 木 村 忠 義

朝顔がまだ咲きますと咲いている
秋となり月と対話が多くなる
来年の手帳を買って予定書く
頭より手帳に頼る癖がつき
嬉しさと妻に氣兼ねの不意の客

綾部市 藤 田 芳 郎

目が入りダルマは見えない振りをする
山下りた天狗でただの変わり者
アレコレで通じて底がまだ見えぬ
戦場で引く引き金はみな正義
極限の我慢を医者に叱られる

岡山市 清 水 金 太 郎

事あれば憲法ばかり論議する
戦争にならぬようにと武器作り
妻や子にすまぬすまぬと暮す日々
妻病みて茶碗も一つ洗う日々
赤飯で祝い喜ぶ日を祈る

島根県 武 島 ちよえ

七曲がり越えても夢は捨て切れず
いざと言う時は女も腕まくり
子の盾になる覚悟なら出来ている
木をゆすり風がしきりに訴える
自信作ないまま年の瀬を迎え

出雲市 川 島 和 歌 子

行き止まり流れに沿って考える
無事な顔見れば安堵の愚痴ひとつ
淋しさに孤独を攻める長い夜
秋日和懸崖菊の咲き乱れ
衣替え女の匂う秋の彩

益田市 岡田 たいけを

どっちかが先に介護は受けるだろ
生れつきの器用を老後持て余す
明日生きる欲が医院のドアを開け
コスモスが揺れて旅情を誘ってる
体調の良い日は薬飲み忘れ

竹原市 正畑 半 覚

天に吹く風が大地に咲く花か
一言で水の流れが澄んでくる
どなたでもどうぞと山の水が湧く
きみのこと想えば命惜しくなる
人間の中のひとりのほくなんだ

奈良市 乾 春 雄

通勤地獄支えつづけた靴の底
完走の気迫タオルへ倒れ込む
お喋りな秋の切符と旅に出る
舞台裏見ればまさかの火の車
下り坂肩書だけが燃え残る

羽曳野市 福田 悦 子

木枯らしの中でしんみり聞く第九
走馬灯今年いろいろありました
重箱の中へ女が積む歴史
いい年にしたいと買った宝くじ
来年の手帳予定がまだ少し

高槻市 左右田 泰 雄

絵手紙の涼しい色を壁に張る
夕焼けが真っ赤に染めた乳母車
ぎこちない男世帯のたて結び
落着かぬ目線の中にある秘密
振り向くと動きを止める影法師

藤井寺市 西村 栄 一

保護色の中で安堵とイライラと
無条件に降服したい青い空
アンテナの感度を誇る地獄耳
君に会う元気はとっておくことに
チャンスだと風が背中をポンと押す

泉佐野市 稲 葉 洋

お荷物にされたか出がらし飲まされる
植山へとんとん話だけ進む
写経する墨書に和紙という符合
変な時だけタイミング合う凡夫
もう少し泣けば思いも薄れゆく

吹田市 木下 敏 子

顔洗う今日も綺麗に生きるため
母さんの言葉今頃噛みしめる
筆持てるだけで楽しい夢を追う
大根を煮て足りている夫婦箸
お団子に月も我が家も満ち足りる

香川県 伊勢 八重子

湯気の立つ様な話が風に乗り

名月に心あずけた露天風呂

さりげなく今来たと言う待ち合わせ

満月に独り住まいをのぞかれる

極楽の門を信じた遍路宿

高知市 小川 てるみ

酒とろり思い出すのは母の事

どの窓も幸せそうな秋夜長

共食いの報い牛には罪はない

呑み込めば楽になる字がのみこめず

夢を盛る皿が小さく痩せてくる

高知市 澤村 哲史

カーテンの揺れが吐息と重ね合う

問い正すパワーがネクタイ着けて出る

ローソクの炎しがらみ整理する

弱点を庇えず耐えた会話術

太陽は土の報いを誉めている

高知県 近森 功

五年日記買って八十路の杖にする

物忘れ何を忘れたかも忘れ

庭の松ほめてセールス腰をすえ

これからと言う人生にかける虹

竹踏んでごまかされてる万歩計

今治市 塩路 よしみ

慢心を柳の風に諭される

忘れたい事を他人は掘り返す

乗せられて甘い話に火傷する

板チョコにきっちり割れ目ついている

忘却のはるかな雲に詩がある

今治市 渡邊 伊津志

名山を養う形雲の峰

小走りの癖が身につく小商い

脇役の自信が冴えるかすみ草

底辺でもう転ばない身のこなし

流れ弾落ち目の人によく当り

今治市 中村 好恵

木犀の香りと語る昼さがり

久し振りですねと医者にいたわられ

年の瀬へ少し早目の冬支度

一寸無理しているような赤い靴

再会の涙黙って手を握る

愛媛県 花岡 順子

小さなうつ空の青さへ吸い込まれ

雑魚だから列を乱さぬようにする

仲秋の月を誘うているススキ

世をすねて裏から覗く事ばかり

生きるとはこんなに青い空を見る

岡山県 国 米 きくゑ

波瀾万丈生きてひとりの水流す
故郷の駅にずうとある黒板
十指みな弾ませている手話の恋
秋桜がいま真つ盛り手紙書く

岡山市 藤 原 一 平

やるだけはやった男の車椅子
寝たきりになってたまるか車椅子
車椅子押してる妻も背が丸い
片手でもワープロ打てる絵も画ける

岡山市 大 森 純 子

まんじゅしゃげの赤は秋への道しるべ
ゴミの日に文庫一冊ずつ捨てる
うまいお茶ニュースにならず生きている
幸せにくらしています鈍いから

倉敷市 家 守 政 子

しあわせは笑顔美人の嫁と住む
夜が流れ幽玄孤独亡夫を恋う
姿見の中姉がいる亡母がいる
諍いも夫婦元氣な証かも

因島市 村 上 和 輝

アフガンの崖にも登る青い月
秋の絵を拾いに独り旅にでる
触れた手の温みで終る初デート
野仏の微笑に触れる秋の道

宇部市 高 山 清 子

捨てきれぬ流行おくれの衣替え
華やかな青春知らぬ戦中派
携帯になじめず老いの糸電話
松茸のご飯恋しい亡母の味

尾道市 光 吉 裕

雑踏の風に世間の噂聞き
弱虫が長寿をめざす荷を担ぐ
激流に断固ゆずらぬ砂袋
定年でまだ昼寝など未経験

高知県 百 田 幸

ユーモアが予期せぬパンチ受ける羽目
長話鍋が悲鳴をあげている
触れたくはない古傷にさわれる
胡蝶蘭花屋でたとと見て帰り

高知県 桑 名 孝 雄

シナリオが狂い政治の第二幕
栄転も左遷も花は持つている
胃へ腸へカメラ覗きに來て困る
冷蔵庫ビールが凍りはじめたぞ

南国市 小 原 圭 二

晴耕も雨読もやたら肩が凝る
神の名を騙って恥じぬテロリスト
狂牛病騒ぎでやつと火葬され
遅れ咲き二本が目立つ曼珠沙華

香川県 松村輝夫

秋田県 秋野宏

早や師走何度迎えて仕舞うやら
美しい女将で銚子追加する
いい気分靴が勝手に風を切る
罪のない石を蹴とばしリズム取る

香川県 原賢

世渡りが下手で冷たい風に遭う
地球儀が緑の風で生きかえる
あせらずに歩けば見える街の風
平凡に生きると出逢う温い風

愛媛県 山之内八重美

秋夜長話がつきぬ里帰り
何にでも手を出したがる食べ盛り
花一輪心をいやす無人駅
鎮魂の刻を忘れぬ千羽鶴

今治市 野村清美

思いつきの駅を横目に通過する
いい湯だなのおんぴり母の隙だらけ
使うのは易し貯めるに在る根気
諦めて若くないよと言ひ聞かず

青森県 福士トキ

ファックスが一度も来ない新兵器
一張羅壁につるして出る日待つ
わたしには何も出来ないテロ事件
忘れてた愚痴も言わない足の裏

働いた汗が生きない低金利
野菊でも胸張ってたつ文化の日
終章を派手に飾って何に成る
引き際の美学男の眉にある

秋田県 湊修水

全世界どこもかしこもキナ臭い
動乱も知らずコスモス咲き誇る
新米の地酒が旨い秋田節
腹八分これが長寿の秘訣かも

日上市 加藤権悟

まだひとつ通天閣に借りがある
妻の愚痴これも愛だとしておこう
切れそうで切れぬ夫婦の絆だな
ひと粒の朶に祈りが深くなる

武蔵野市 亀井円女

ここだけの話聞く振りしてるだけ
幸せ過ぎて勿体なくて恐くなる
ピンチには妻の見事なタイムリ
嫁姑ちよっとひかえて円い仲

野田市 那賀島雅子

胸中に棲む人もなし秋の空
重い口開きやさしく聞いてやる
サングラス取れば異国の眼の蒼き
老いてなお取り出すうすきコンバクト

東京都 井上 つよし

亡き友が帰って来たか赤とんぼ
義に強く涙にもろくなるお酒
血と汗と涙がしみた丸い石
描いて見て見せて楽しむ自画自賛

町田市 土田 今日子

声立てて笑う若さのエネルギー
一周忌母の写真はよく笑い
わたくしの心見透かす青い空
子が巣立ち夫婦ごっこがきこえない

逗子市 神戸 みず帆

近道を選び不運な工事中
今日の雨許容を越した胸のダム
寄りかかる甘えを放す惚け防止
譲られる席に突然歳をとり

川崎市 中村 泰竜

言い訳を考えて干す女物
ベランダに櫓が飛び交う俄か雨
去年よりブルー浅いと伸び盛り
ここだけの話裏から裏へ抜け

川崎市 浦野 昭志

台風が去ったと虫が騒ぎだし
点滅の信号へ妻袖を引く
秋の雨春咲く花の芽を育て
青空を仰ぎ大きく秋を吸う

川崎市 大島 賛詩朗

禁酒してからの刺身は恨めしい
情報が溢れ不安をかきたてる
朝ドラがすんで老夫婦の朝餉
人妻が優しく見える倦怠期

横浜市 布山 嘉信

疑いが晴れて青空美しい
陽は落ちて牛の歩みは変わらない
内弁慶社では仏と親しまれ
トリカブト毒は見せずに咲いている

横浜市 秋元 和可

過去をみな食べていただくシュレツダー
愛でもせぬ野菜の花が実をつける
いつ咲くかわからぬ種も水をやる
休日をのんびりしては居られない

横浜市 巖田 かず枝

テロ騒ぎ地理と歴史を学ばせる
ぐうたら私の似てゐる寝待月
球根に春が期待をされている
妬きながら娘デートへ送り出す

横浜市 金森 徳三

不謹慎冬は嬉しい温暖化
二度三度衣替えする秋の空
もったいないつい口ぐせがうとまれる
広告の五点限りに長い列

横浜市 伊藤ふみ

平和論お好み焼きの上で燃え
秋風が騒ぐ木の葉が攻めてくる
バスツアー熟年パワー弾み行く
日々草雑草なんて言いません

新潟県 高野不二

名月の雨もやっぱり酒になる
銀行も保険もつぶれ生きのびる
百円シヨップこれでもうけているらしい
ヤセ葉今日もチラシに入ってる

富山市 松見たえ

花の散る予感が男走らせる
逢える日の朝はるるん蝶になる
口下手で喧嘩をしては回り道
石ころを蹴ってストレスなお溜まり

京都市 山本 磔

おもい焦がれて秋の改札口にいる
座り直すと別の答になりました
生きて来た証を喋れますかいな
一夫一婦のままで終りになりそうだ

京都府 前上英一

お喋りが妻の呆けない秘訣かも
玄関で睨みを利かす亡父の下駄
無人売りの野菜に媚は見られない
伝統の重みに耐えている薨

和泉市 横山捷也

窓口で明治ですかと覗かれる
七人の敵を持つてる敵作り
名所よりひなびた宿のフルムーン
老いの旅濃い目のお茶に安堵する

大阪市 大川道子

神棚にほこりだらけの宝くじ
おしゃべりが超ドレスアップして無口
一芸と思う座れば眠る人
月末になると思う貧乏性

大阪市 中村忠敬

居酒屋で大言壮語飛びちがう
九条をめぐり論争二日酔
大望も加齢と共に凋みゆく
四世代同居で暮らす古い家

大阪市 小川 恵美代

秋天の星を見上げるゆとりかな
アフガンを知れば四季ある有難さ
身づくろい化粧で闘志たぎらせる
赤い糸意外に強く夫は古希

大阪市 岩崎公誠

骨董の壺褒めすぎて値切れない
雑念を束ねて捨てる闇の海
リストラの椅子取りゲーム終らない
師走でも走らない人ちゃんという

大阪市 熊代菜月

まだ少しお年寄とは言わないで
酒やめた理由は秘密にしておこう
蓮池やどの蓮華座に亡母います
美しく枯れてゆきたいカスミ草

大阪市 星野きらり

お早ようさん花と交わしてプロローグ
絵手紙のメロンほのかに匂いたつ
ラブレター皆盛り上がる回春譜
表札の夫あされる今日も留守

大阪市 小泉ひさ乃

華やかな過去は言わない花の種
耐えて咲くコスモス風もそっと吹く
なんとなく許し許され共白髪
日常を引きずり演技するピエロ

大阪市 伊藤博仁

来年もお若いですなと言われよう
ダムの字を下から読むとムダとなる
塩爺が現役なのだまだやれる
少なくともライオンヘヤーを諦めた

大阪市 中井正秀

蚊も必死殺されるまでまとい付く
我が余生米寿の後と決めている
今の家終の棲家と決めている
新札は最後の最後遣います

大阪市 三浦千津子

淋しくてボロりと秘密洩らしけり
無傷では済まぬ脱皮を繰り返す
夢のない男撥る蟬しぐれ
失恋の旅にボツンと恋の句碑

大阪市 尾崎黄紅

煮るか焼くのか魚の目が睨んでる
太陽が真上影法師の憩い
支持率の人らがどうかしてるんだ
合言葉裏切られてるとも知らず

大阪市 浦田綏子

向かい風追い風になる折返し
双方がパラサイトという平和
悪口もお供養のうち夜とぎ更け
顕微鏡のように心がのぞけたら

柏原市 永浜加津子

本棚に御無沙汰詫びて秋夜長
白髪染めしようか迷うお年頃
昼寝する癖引きずって秋さなか
句読点欲しくて一人旅に出る

河内長野市 柏本靖子

生き抜いた後姿にあるドラマ
旅支度弾む心も詰めている
予定表キツチンに貼り十二月
冬支度そろそろせよと秋の虫

河内長野市 村上直樹

蝶になり風にもなつて舞扇
かつと燃えぱつと消えたい曼珠沙華
コスモスを傘に朝寝の赤とんぼ
雑草も雑草なりの冬仕度

堺市 荻野像山

靖国の犠牲の上にある日本
泣き声で見分ける母の慈しみ
逝く母とこの世の別れした扉
地図持たず逝つた母さんどのあたり

吹田市 二宮栄子

正月の約束をして子等帰る
独り住む自分に見合う丸を書く
ほどの暮らしに感謝ありがとう
誕生日とうとう古希にされました

吹田市 木村無禄

天命を読めたら怖いなと思う
迎え火を心の底に焚いて待つ
遺言状借金無しと書いて置く
満洲があつた私の一ページ

吹田市 後藤志津香

紅葉にやさしく抱かれ上高地
町角で秋を見付けたふかし芋
秋の山あらためて夫婦手をつなぐ
秋は好き人生ドラマに更けるとき

高槻市 生田義一

ずる休み告げる電話に咳を入れ
傾けるグラスが明日の虹を生む
主夫の座を優しく包む妻の顔
かくれんぼいつの間にやら鬼は留守

高槻市 執行稲子

言い訳を半分混ぜて懺悔する
恙ない五臓六腑が愛おしい
窓際の椅子野心ばらばら容赦なく
善し悪しを隠すポケットたんとある

高槻市 乙倉武史

鳥の声伴奏にして握りめし
頑丈で無口が似合う山男
人生観変わる傘寿の無為無策
老いぬれば辞書と医書とが秘書代り

高槻市 安田忠子

飲み会の連絡すれば皆OK
よい友を沢山もつて酒うまし
Qちゃんが暗い世の中灯をともし
近鉄が最善の夢実現す

豊中市 藤井則彦

一言がいつもレモンのような妻
果物も人も色艶味ですぬ
留守電に頭下げ下げ頼みごと
おまけまで聴かねば損とアンコール

寝屋川市 岡 本 勲

不況風夜店の金魚淋しそう
若い日の綴じたアルバム喋り出し
カードでもあの世へ旅立ちできますか
リストラで田舎暮らしも板につき

枚方市 小 川 良 吉

古稀過ぎてまだまだ元氣腹の虫
日暮れて酒一杯に生きかえる
いさぎよく老いを生きたい百日紅
自衛官千人針で身を守ろ

東大阪市 田 中 美 弥 子

落ち込みへ友の叱咤が目覚ます
ありがとう以上のことは探してる
言い勝った夕べが苦い今朝のお茶
妻と母ときに女の顔のぞく

東大阪市 笠 井 欣 子

叩かれて舟を漕ぎ出すヤジロベエ
軒先を貸した燕もお引越し
うさ晴し気紛れに書き画布汚す
家中をピカピカにして腰痛め

東大阪市 今 岡 貞 人

一輪の花に垣根が溶けてくる
今日のこと胸にたたんで明日の窓
感謝する言葉がふえる丸い背な
健康の秘訣笑いと旬を食べ

藤井寺市 吉 田 喜代子

買物へ行く先順も書いて出る
躰きに気が付いてない足先の先
寒空に缶コーヒーを買いましょう
あきまへんさっぱりですと小商い

八尾市 中 島 春 江

爪伸びて背丈ちぢまるばかりです
おことわりしたいが喜寿がむこうから
男心奪いし髪も白くなり
秋日和パッチワークの棚田見ゆ

八尾市 山 本 宏 至

大切にされて居心地悪くなる
大胆に翔んだ娘が母になる
妻の留守風呂に入ると鳴る電話
小さい秋通天閣の灯が恋し

八尾市 與 田 明

酒飲まぬ相手と聞いてやりにくい
耐えてきたでこぼこの道生きてきた
文化とはサンマを焼いて煙なし
ストレスを忘れる趣味でまた悩み

兵庫県 山 本 泰 子

締め切りへまたすれすれと知るポスト
無駄遣いストップかかると不況風
相談に乗って責任背おわされ
悩みごと相談されても出ぬ返事

兵庫県 広瀬房江

神戸市 伊勢田 毅

子のように育てた菊の美しさ
残菊に仄かな色香許される
もつれ糸すつきり解けて青い空
韓国の松茸だけど年一度

尼崎市 河津正治

美術館余韻に浸るティールーム
背信の月に不徳を睨まれる
余生ではない押せ押せの人生譜
天気予報祖母の予想が良く当り

尼崎市 軸丸勝巳

聖戦に正義に神は担がれる
また戦火見ている月も手が出せず
狂牛病われに幸あれ潜伏期
まだ生きるつもり名水取り寄せる

尼崎市 桑原東園

海で身を淨めた月が今昇る
回想を止めてあつさりたたむ傘
足どりは重く懐軽過ぎる
応接間金魚のいない金魚鉢

川西市 井本清山

ダイエツトすれば買わずに済むズボン
拝観料払ってなおも御養錢
斜めから見ると世間も隙に見え
仏壇のお下がり貰いお茶にする

ユニホーム変えても虎は動かない
可も不可もないから夫婦しています
ねつ造で日本のロマン消えてゆく
赤い糸妻が時々テストする

篠山市 谷田多美子

裏道も花道も来た八十年
目玉焼き元氣な朝が動き出す
満月に生き甲斐を見る四季の詩
取りあえず酒で話がすべり出す

和歌山市 武本 碧

幸せの足し算をする亀の足
改革の痛み小さい皿に盛る
人生の午後帳尻が合ってくる
名曲へ時代を越えて血が騒ぐ

和歌山市 前岡 健三郎

水の音火の音気丈義母生きる
ピンラディン世界注視の怖い人
波紋呼ぶ後方支援自衛隊
解釈を都合良くする第九条

和歌山市 上地 登美代

老後の夢儚く消えた低金利
立板へ女が流す裏話
介護保険老後信じていいですか
恨みごと流して月が美しい

和歌山市 芝 あつむ

取り敢えず騙されてみる秋の空
悪循環たち切る斧をかうお金
胸一ぱい空気も吸えぬ負の遺産
整形をされて胡瓜のお嫁入り

和歌山県 村中悦男

むつかしい話は睡魔連れてくる
コスモスの花花花へ日が沈む
旅の膳悲しいまでに活魚跳ね
妻であれ噂は小さな声でする

鳥取県 西冲彰雄

正直な鏡だ白髪顔の皴
白髪皴生きた証と顔の自負
やせ我慢しては落ち入る自己嫌悪
成るように成ると気楽に今日も生き

鳥取県 蔵本悦子

見て聞けて食べて歩いてしあわせだ
うっかりもせにや脳だつて大変だ
犬よりもオヤジの声がやかましい
時々幅広い世間を見失う

鳥取県 藤山弘子

大胆に自分らしさを描く日々
隣からスタミナつける匂いする
隣には空気のような人がある
自分から飛び込みいばら道ぬける

鳥取県 平尾菜美

生きるのも死ぬのも土と決めている
踏みまくる土を命に換えて生き
なまぬるい風で核心触れもせず
吹かぬやも吹くやも知れぬ明日の風

鳥取県 吉田弘子

裏切りが人間不信へと進む
新世紀の予感と悟るテロ事件
いつの日も母の遺言胸に在り
どれが効くあの手この手の腰治療

鳥取県 岩崎和子

胃カメラが私の秘密あばき出す
お医者さま命もみんな預けます
ピロリ菌あたしの胃の腑棲みよいか
後ろ髪合わせ鏡で老いを知る

鳥取県 福西茶子

重いけど遺言だから守りぬく
愛あれば言葉はいらぬなんて嘘
若草も芽吹きルール守らねば
逆流の血の勢いが止まらない

鳥取県 山岡久枝

控えめに香る小菊が愛らしい
小鳥来る朝を楽しむ窓を拭く
夕焼けに遠くの母が浮かびだす
母さんの大きな傘に子等育ち

鳥取県 小谷 はるみ

秋風に消される恋は捨てましょう
アルバムを開くと恋が目ざめそう
置き去りにしてきた恋が身を責める
淋しくて恋の抜け殻まだ捨てぬ

鳥取県 河本 晴子

腹巻を取れば調子が悪くなる
目をつぶり考えるのが癖になり
冗談を投げ掛けたけど通じない
出てみれば笑いもあつた夏祭り

鳥取県 平木 公子

まだバワーあるのに辞めてくれと言う
ときどきは街の空気が欲しくなり
あら嫌だ亡母とおんなじ歩き方
大役を終えて落葉は潔い

鳥取県 鳥羽 直市

教科書が他国のひとつつかれる
明日がある枯れないように水を足す
ほどほどにとぼけているも老いの知恵
横文字につまずきながら老いの旅

鳥取県 下田 茂登子

新世紀父のゲンコが忘れられ
ストップをかけた姑の痴呆症
夫婦の縁繋ぐ汗なら惜しまない
ライバルの心が読めて手を引いた

鳥取市 福島 庸二

夢ひとつ開いては消えシャボン玉
腹八分ごちそう前に押し切られ
歩くたび自己満足の万歩計
休刊日手持ちぶたさのモーニング

鳥取市 川本 菊香

流しびな苦勞もそえて川に消す
気弱な子に諭しながらも喝を入れ
唱名で流転輪廻の罪を消す
先の先矢印のない浮世です

鳥取市 田村 邦昭

嘘もある人生だからおもしろい
いい人と言われ嘘から脱けられない
不器用で亡父の影が邪魔になり
梅干しにやつと見つけた妻の味

鳥取市 岡田 信恵

悲しみを平気で母は耐えぬいた
ストップが効かぬ体重ふえつづけ
決心のつかぬ両手で握手する
子供らに甘えぬ覚悟できている

鳥取市 山口 千代子

年金が有って安堵の日を送る
親の敷くレールはずれの現代っ子
失恋かボタン一つのかけ違い
よい香り運ぶ木犀秋だなあ

倉吉市 前田 喜美子

有意義な今日は夕日も茜色

たかが耳されど可愛いイヤリング

ときどきは脱皮したいな主婦の顔

どうしたと言つて下さい好きな人

倉吉市 森川 あらた

すつきりと髪切り未練拭いさる

生きてゆくための強さを身に付ける

重くても辛抱強くたえる椅子

好きな歌聴いてリズムを整える

米子市 足立 由美子

裏表ない人だから馬が合う

半分はお世辞と耳に教えとく

退屈な指がダイヤル回し出す

亡母に似た雲を探している日暮れ

米子市 猪森 スミエ

金婚の猪口が袴をはいて来る

婚約にもう気の早いこうのと

退屈の顔が出揃うティータム

走つても距離は広がる老いの坂

島根県 福岡 博利

大安も仏滅もない夜の星

オフレコと言つたばかりに羽根がはえ

そもそもは同情心に罪がある

明日という未来へはげむ万歩計

松江市 松浦 登志子

伏せるよう北風からの手紙くる

港から一目散に来る噂

減量の儚い夢を食べるバク

雑巾がタオルの旅を締め括る

松江市 三島 淞丘

夫婦酒悲喜こもごもを語り酌む

血を分けた子に虐待をする不思議

ダイエツトしようお酒は減らずに

七人の敵が居るから強くなれ

松江市 松本 知恵子

コスモスが風にほほえむ秋になる

手鏡の向こうに大事な人がいる

ふるさとの夕焼け小焼け子が見えぬ

新世紀夢は束の間戦争に

島根県 菅田 かつ子

蝶にキスされてコスモス震えてる

充電をしに行く何時もの喫茶店

くだらんと笑われながら杭を打つ

あの頃があつてなかなか捨てられず

安来市 原 煩惱児

北方領土侵略ですと言うて欲し

喋るより聞く耳持つて団地の和

飲む自由僕は手酌が性に合う

猪の残してくれた稲を刈る

倉敷市 撰 喜子

左遷地へ噂が先に届いてる
父さんのサンタ出番を待っている
正論を吐いて会議が荒れ始め

広島県 福島 万年

勲章も恋も未練の七十歳
報復の向こうに見えるきのこ雲
尻尾立て鬼征伐を支援する

府中市 岩本 雅代

嬉しくも悲しくも見る三面鏡
墓洗う亡母の笑顔に見えてくる
秋一色黄金の波に栗拾い

唐津市 坂本 兵八郎

鏡台が元の私を見失う
回れ右して度忘れを連れ戻す
底抜けが嫌われながら愛される

唐津市 岩崎 實

足腰のしびれが続くご焼香
十五夜へ家族みんなで手を合わせ
一人前になってほしいと肩叩く

愛媛県 安野 案山子

山里の深き眠りへ星が降る
空き缶に一輪咲いた菊の花
定年が秒読みとなる秋の風

愛媛県 宮本 末子

貧乏に勇氣もあつた実年期
利口ではないが評価は人がする
幸の卵は保存しておこう

愛媛県 黒田 茂代

筋書きを変えて生きぬく知恵模索
何もかも飲み込み過ぎた胃の痛み
煩惱の重さ六十路の入り口で

松山市 高橋 宏臣

隙だらけ脳に一振り唐辛子
思惑を捨てると消えた鰯雲
六畳に伸び伸びできる我が天地

東京都 やまぐち 珠美

思いびとの中で獣が死んでゆく
会わなけりやすぐ思い出にするものを
引き際の男に勝ちがよく似合う

横浜市 長島 亜希子

新しいマニキュアにして無洗米
宇宙での塵が光って見えている
テロリストみたいな猿と対峙する

横浜市 山梨 雅子

爆音があわてさせてるうろこ雲
開業の胡蝶蘭鉢競い合い
選択を迫られ脳が働かぬ

横浜市 平 達也

我がままな娘見直す子の蜩
心閉じ顔はにこにこ聞き流す
正直に時々見せる裏の顔

横浜市 生坂 サト子

百合花粉花言葉まで憎くなる
見る度に健康機具の大欠伸
押し入力で造花いくつも四季を越す

川崎市 塩沢 ひで

幾許の余生無理無駄捨てて生き
古稀迎え皺の素顔に人の艶
砂浜に足跡深く食の秋

川崎市 小林 久美子

夢だから高級品を買い漁る
進む道教えてくれた誉め言葉
老い支度できぬ男の横にいる

静岡市 中西 雅

百歳の笑顔はまめな畑仕事
十六夜のみごとに清い青い空
お茶の花貴婦人のごと楚々と笑み

尾張旭市 三浦 きぬ

情けない打たれ仕舞いの杭で老い
お洒落するチャンス今だと琥珀買う
平等をお頼み申す福の神

京都府 三宅 満子
海のむこうブッシュが燃えてきなくさい
食べられず葬られ行く牛あわれ
病んでから身辺整理荷を軽く

生駒市 飛永 ふりこ

かたつむり深く読みすぎ動けない
肩の力抜くと友達増えてきた
痛み止め飲んでも恋はなお燃える

生駒市 小西 稔

足よりも口が楽しい歩く会
味覚にておさまる秋の腹の虫
車椅子すわりて足に感謝する

和泉市 小坂 凡英

憂き世をば浮き世に代えて余生かな
大国に歯向かうテロの因と果と
牙えに牙え名月地球を睨みつけ

泉佐野市 大工 静子

もの忘れ今日の医者行き忘れてた
生き字引と言われ我が死期読めずいる
法螺貝を吹いて知人の葬送る

門真市 矢阪 英雄

イベントで心ふれ合う音聞こえ
着ぐるみと握手が楽し童たち
ゴミ分ける若者がいてゴミが減る

河内長野市 杉谷 一栄

知らぬ町提灯だけが目に残る

引き算が出来るか自分ためしてる

幸あれと茶漬けのあられ拾う箸

河内長野市 印藤 智子

夢の中映画のシーンか多発テロ

多発テロ見ながら安定剤を飲む

寂しさに亡母の写真に笑いかけ

河内長野市 木太久 正一

父母の好物おはぎ買う彼岸

兄弟の元氣確かめ合う法事

故郷は新幹線の日帰りに

岸和田市 不破 仁緑

戦争を知らない子等の祭り笛

肉嫌いの妻が一層身構える

澄みきった空に平和を噛みしめる

岸和田市 亀井 皎月

奮にはそれなりの自負秘めている

感謝して逝ける最後が望まれる

世間して並みが分らぬ雑学者

堺市 渡辺 さだを

船酔いを海の蒼さがなくさめる

甲板の虹は僕らのためにある

海外ツアーめっちゃ減り君もテロ怖い

堺市 大橋 錦

秋になり病気の話をんこ盛り

この秋は医者のはしごに小半日

孫からの手紙肉筆漢字増え

堺市 藤井 一二三

大阪の恋はうどんで口説かれる

喰いものにする思惑もあつて押す

コスモスを揺さぶる蝶の重さなり

吹田市 須磨 活恵

秋の夜のちっちゃな倅せ柿を剥く

あの話返事に迷ういわし雲

コスモスの強さ優しさ風の花

高槻市 大崎 侑子

まいた種思わぬとこで実を結び

はめられてその後ばかり伸び悩み

カメラには笑顔の裏は写らない

高槻市 西谷 治三郎

おへそ出し雷さまもあきれてる

ロボットはよく嬖られ素直です

人間が作った機械に使われる

豊中市 源田 啓生

食の秋しつべ返し of 病い牛

新米で招き招かれ村祭り

重い荷を降ろして軽い年金と

羽曳野市 山 本 たけし

一家言持って動かぬ父の眉
格好の聞き役見付け吐いた愚痴
クラス会話は遠い日に戻る

羽曳野市 永 田 章 司

良き友は見方によれば好敵手
遍路道白装束に秋の風
侘び寂びの心忘れた新世紀

枚方市 二 宮 紫 鳳

ティータイム孫の寝顔とシューベルト
平和なる孫の寝顔にいやされる
孫の顔見つめていたら日が暮れた

枚方市 大 昇 隆 広

立板に水の弁舌だから嘘
我が生もたかが枯木の賑わいで
老夫婦宿の玄関杖二本

藤井寺市 若 松 雅 枝

のんびりと出来ぬ鋭い孫の問い
野仏が欠伸をしてる秋の空
柿たわわ取りにおいでと故郷の母

八尾市 田 中 トシエ

飾らない言葉にとけてゆく垣根
新しい日記私をにらんでる
髪型を変えて笑顔に箔が付き

八尾市 平 川 幸 枝

一ぱいの酒が涼しい風になる
携帯電話それぞれ一つ老姉妹
朱を入れる墨絵に文化匂いたつ

八尾市 松 葉 君 江

友情をバネにどん底這い上がる
一か八角をとらせて歩で王手
一筋の道にこだわる博多帯

八尾市 高 橋 明 子

タンポポよ踏まれて蹴られ花咲かす
不景気も知らぬ私は同じ服
地球儀を回してこれが日本か

八尾市 鷺 見 章

みどりして故郷の山信貴生駒
オルゴール宝石箱は空のまま
病むベッド三度三度を有難く

大阪市 木 村 青 生

ママの声常連さんには裏返り
ままごとは折り目正しい父母ばかり
扇風機うなづくように首を振る

大阪市 中 村 叡 子

寝そびれて旅のアルバム出して見る
葱三つ葉鉢植にして重宝す
防空壕日夜おびえた日は二度と

大阪市 中川 千都子

見まわせど見つからぬまま金木屋
心配をしてたと無沙汰責める文字
凄惨な街の合間にコマーシャル

大阪市 内海 綾乃

献血で恩返しする私です
戒名の夫と毎夜話する

大阪市 伴 洋子

気まぐれな雨に誘われ喫茶店
大勢に押され妙案闇の中
損得が絡むと濁る水晶体

大阪市 平井 露芳

扇風機今年も徹夜で頑張った
猿沢と広沢どっち月見する
歩くのは痛いがベダルは踏める足

大阪府 桑田 ゆきの

未完ままゴッホ気取りのひまわりで
多発テロ心に大きい穴があき
ゆつくりと人生の坂押し登る

大阪府 東 文江

見守って地上の平和お月様
後から肩を叩かれ落し物
祭り過ぎ深まる秋を存分に

大阪府 小栢 こずえ

秋晴れて田にはそれぞれ色がつき
日記帳胸のつかえを書き下ろす
年金が許す範囲のオシャレする

大阪府 畑 中節子

カレンダー寒くなるほど薄くなり
すず虫の声にカーテンそつと引き
見たまを額に入りたい秋紅葉

大阪府 藤井 郁代

ボランティアの花咲き揃う悲惨テロ
寒桜ひっそり咲いて人恋し
初雪に歳も忘れて飛びはねる

大阪府 野田 栄呼

コッソツと健康貯金万歩計
村中が家族の様な過疎の村
まだ仕事残して夕闇覆い来る

兵庫県 黒崎 美紗子

笑み浮かべ燃えた話が懐かしい
宅急便思いがけない里の秋
ひとときの安らぎもらい花活ける

兵庫県 岩本 美緒子

鉦叩き秋空の旅さあ参ろう
コスモスが揺らぎ声する女連れ
明日あると信じて眠り入る安堵

何想う奥の院まで来た女性

固く寄る月の名所の影ふたつ

月に濡れまた酔い果ての肘枕

尼崎市 山田耕治
尾宮弘治

梨三個買うて終った預金利子

独り住み一人入って仕舞い風呂

聴く耳と聴こえない耳妻の機智

伊丹市 延寿庵野露

勇み足吐いたことが背に迫る

ドアチェーン盛られた嘘をしまい込む

丁寧に頭を下げてふいを突く

神戸市 森本みはる

アイロンをかけましょ愛の冷めぬうち

朝顔の種子来年を約し採る

菊人形に母は驚く事ばかり

篠山市 円増純子

大胆な台詞へ女心揺れ

貯まるまで待てずローンの世話になり

美しく青き地球のはずだけど

宝塚市 飯西ミサヲ

気づかないほどの幸せ探しあて

お月さんあなたの国で餅つきを

バイキング済ませてからがダイエット

振ってみて少し音する養毛剤

腹割ると恨みと愚痴がこぼれ出る

娘が嫁ぐ日妻が母のを締める帯

西宮市 坪井孝一
姫路市 服部一典

窓際も広く浅くが博識と

粗大ゴミ色分けされる瓶もある

美人です噂になつて我慢する

姫路市 北条てる代

人の世をまだらに咲いて丸く住む

底辺で生きてプライド失わず

だとしても傍迷惑な蜘蛛の糸

和歌山県 中村君枝

女百態 夜叉も仏も使い分け

冗談と言うが本心覗かせる

特攻の面影よぎるテロ爆破

和歌山県 森下順子

試着室で似合つて買ったはずの服

秋日和三日続いて外出日

花言葉ほんのちよつぱり思案する

和歌山市 根田美子

婿養子 大黒柱凜と立つ

趣味問われ月とスッポン夫婦です

虫の音と夫の鼾聞いている

和歌山市 松尾 和香

優しさを包んで返す嫁がいる
手品師のベールの中に居る私
途中から一人で歩く回り道

和歌山市 宮本 三喜夫

リストラでやっと繰り上げ返り咲く

元部長返り咲きです頑張って

本気で相手見つけて恋をする

和歌山市 永廣 昇太郎

風呂敷に包んで届く母の愛
嫌な客帰った後で塩を撒き
運のない人で成り立つ宝籤

和歌山市 今 一歩

舌を巻くイチローヒット人気者

神頼み昔も今も変わらない

流れゆく雲間から射す陽が頼り

和歌山市 吉田 比佐子

鯖鮓を押して祭りの客を待つ
病名を悟られまいと気を配る
便利さが消費を上げ塵芥の山

和歌山市 土屋 起世子

やわらかな鉛筆で書く月の詩

向かい風男信念まだ曲げぬ

仕舞い風呂月と一しよに汗流す

和歌山市 橋爪 佐一

予約済み雨を迎えに旅に出る
人生に悔いを残して逝けますか
美女聚りわざと鴛鴦見せたがり

海南省 堂上 泰子

一触即発知らぬ秋空澄み渡る

殺風景な心に染みる紅芙蓉

コンバイン終日響き村は幸

鳥取県 平井 栄翁

味よりも心おいしいお裾分け

やけ酒で音痴の歌が出る宴

新聞が今日の始動のスタートに

鳥取県 竹信 照彦

昼寝ぐせ酷暑の夏の置土産

放任畑虫も殺さず無農薬

牙は研がぬが包丁は研いでいる

鳥取県 山下 節子

心機一転ステップ軽く跳んでみる

三食昼寝足りて体型崩れ出す

銭湯の鏡ブライド崩れさす

鳥取県 竹森 富久江

角砂糖あなたはすぐに打ち解ける

文字を購う拡大鏡や虫めがね

春巡りこころの地図を拡げよう

鳥取県 小谷孝美

追憶の日々にあなたがいつもいる
休刊日いつもの朝をもて余す
空っぽの箱をためてはまた捨てる

鳥取県 鳥羽玲子

職歴の欄に溢れるほど記帳
雑学のおかげか広い視野を持つ
最後の菌機嫌そこねぬよう磨く

鳥取県 岡村孝明

古希の坂パワー小出しに登ろうよ
腹に無いおせじ時々言ってみる
少年の言葉の裏に愛の飢え

鳥取県 橋谷静江

ゆずられた席へ座って老いを知る
おふくろの秋は手近にきこの飯
考える力こぶしが小さくなる

鳥取県 松川行男

鏡から手が出て紅をひいてくれ
棒グラフ峠だんだん低くなり
昔ほど鏡に時間とられない

鳥取市 谷岡清子

すず虫に今日のごきげんきいて見る
破れ傘一人でさせば先も見え
洗面器に満月借りて独り占め

鳥取市 横田春名

だんだんとお地藏様に似て老いる
頼みがいいると言われて腕が鳴る
聖戦だ恐い言葉をまたも聞く

鳥取市 渡部伯坊

ときどきの夢見の悪さリストラだ
平凡に生きて悔いなし風まかせ
落葉踏む辿る八十路がみそぎする

鳥取市 加藤茶人

フリーター名前どうあれ無職です
死を急ぐように文明歩を早め
蝶の自負やせても蛾ではないと舞う

鳥取市 福永ひかり

老人の保健施設にやさしい名
進む呆け便利を敵にして防ぐ
主婦業も家事を投げたい時がある

鳥取市 河田のり代

おせっかい歩む一步にレール引き
欲の皮生きる力に加勢する
心とは問われいきなり愛と言う

鳥取市 宮脇道子

黒髪の古い写真を撫でてみる
留守電が待っててくれる家がある
秋風が少し身に沁み彼岸花

鳥取市 近藤 秋星

死ぬるまで戦い人生とは哀し
九条九条お前九条知ってるか
念押せば返事の声が小さくなり

倉吉市 西脇 日出子

雨漏りを直し雨降り待つ心
無縁仏花のすそ分けして拝み
どうしたか何時も留守電案じ出す

倉吉市 木下 智子

流れ星見ながら弾む世界旅
まだ火の気求める母の膝の中
仕舞い風呂自問自答の答でず

米子市 小塩 智加恵

親の苦労知ってか孫がアルバイト
強がりを言っても女涙つば
夏やせがすぐカムバック秋の膳

鳥根県 持田 多輝子

熟慮してウソは言わない事にする
信仰でお浄土ゆきの自己暗示
時々は無我の境地で座禅組む

鳥根県 毛利 幸

麻酔薬この世の憂さを忘れさせ
(入院句 3句)

同病者己の過去を語り合い
温かな心に宿る看護の輪

鳥根県 松本 聖子

出雲市 梅 ミツエ

のんびりと本をよんでる秋の風
靖国で兄が静かに眠ってる
秋の空雲がぞくぞくわいてる

出雲市 加藤 スズコ

雷の影にやさしい母がいた
ちぎれ雲きつと何処かで手を繋ぐ
忘れものしたか秋晴れ白い雲

松江市 福岡 芳枝

弱音はく右脳に発破押花絵
悔しさの涙悟りの道に捨て
懐の深さへ悪もこうべ垂れ

第30回かもしか川柳同夢

課題 「海」 3句 (新作に限る)

選者 佐藤 容子・宮本めぐみ
佐藤かつろう・神川 敦子
樋口 仁・福力 明良
八坂 俊生・末村 道子
ふじむらみどり・高田寄生木

賞 (大賞、準賞他)

出句料 1,000円

記入 ①郵便番号②住所③姓
号④電話番号⑤県名⑥性別
⑦年齢⑧好きな四字熟語
▽会費と同封

締切 1月31日消印有効

送付先 〒035-0083

むつ市大平12-39

柳谷方 川柳同夢宛

主催 かもしか川柳社

同人特集

歳末風景百句

平成八年〜平成十二年
同人吟から 編集部

十二月首だけ入れて吞んで行く

路 郎

十二月宝石の美の極まれり

薫 風

ジングルベル財布の口も落ちつかず

吐田 公一

追いつかれそうな足音師走風

山崎 君子

十二月まだ生きてます年賀状

麻生 アート

借りた本貸した本あり十二月

初山 隆盛

吹きすさぶ師走風にもある情け

安本 晃授

もえさしの夫婦 師走へ初春の夢

渥美 弧秀

師走来るまでは形にならぬ家事

吉田 あずき

餅つき器 男の出番無い師走

田中 文時

除夜の鐘 蕎麦屋は湯気の中で聞き

椎江 清芳

除夜の鐘まだ降参はしていない

鈴木 公弘

突然の用事が出来る十二月

辻川 慶子

捨てるもの今年も捨てず十二月

柿花 紀美女

あかぎれの薬買いこむ十二月

安藤 寿美子

形状記憶かやはりおせちをつくる妻

海老池 洋

息抜きに人波歩く歳の市

堀江 光子

今ここに札幌がほし十二月

宮西 弥生

ワイン傾け今日は開戦記念日か

奥田 みつ子

姿見がほりかむっている師走

川崎 ひかり

やせたのは消しゴムばかり年の暮れ

市丸 晴翠

ご苦労さんお疲れさんと第九聞く

酒井 勇太郎

手を抜いて今日もおでんの年の暮れ

八田 敏

十二月 山へ登って見たくなる

古野 ひで

何ぼでも忘れることがある師走

大晦日ジャンボくじにも見放され

酸欠になって不況の年くれる

熱かんと生そばで除夜の鐘を聞く

トイレに貼るカレンダー選る十二月

年末へ体力なりと蓄えて

お礼状ばかり書いてる十二月

関白も掃除手伝う年の暮れ

十二月は赤ワインでも嗜もう

奥の手が街を行き交う十二月

螺子の切れたピエロ転がる十二月

湯割り焼酎 師走の貨車が走り出す

日が逃げる時が逃げると年の暮れ

竹光を振り回し振り回し師走

買い物も医者も控えて年暮れる

借金もなく年末が活気ない

十二月おんなひとりも風が立つ

指切りの指瘦せてくる年の暮れ

おかしくて切ない顔に会う師走

年の瀬は意外な人とよく出合う

岩本 笑子

蘭田 獏杏

板東 倫子

林 露杖

吉村 一風

松尾 柳右子

高杉 千歩

中島 志洋

柴田 英壬子

荻野 鮫虎狼

木本 朱夏

春城 武庫坊

丹下 美津子

舟木 与根一

上田 俊路

土橋 はるお

清水 絹子

福本 英子

堀畑 靖子

古久保 和子

年末の床屋で聞いてきた火種

物欲がふつふつ師走追ってくる

何事も早い目にする年の暮れ

年の瀬の匂いのしない街を行く

ふところの鬼たしなめている師走

ドイツ語の歌が流れる十二月

大声の一族揃う年忘れ

地下街をよりせわしなくする師走

お互いに杖になろうと誓う暮れ

寒暖のめりはりつけて師走来た

ゆつくりと年の名残の髪洗う

日捲りとせかせか歩く十二月

除夜の鐘鳴つても秘仏まだ半眼

十二月八日の未明発熱す

聖母マリアに詫びねばならぬ十二月

年一度ルミナリエ見に故郷の姉

二枚舌一枚捨てる除夜の鐘

ジーンズを履いてわたしも十二月

十二月昔の恋も大掃除

十二月爪先立ちはもう止めた

井上 喜酔

籠島 恵子

田中 正坊

堀 良江

町田 達子

大石あすなろ

菊池 トミエ

米田 恭昌

川端 一步

福田 満州

一戸 ツネ

山本 玲子

湯浅 馬洗

牧渕 富喜子

舟渡 杏花

中田 あい子

川原 章久

高田 美代子

岸野 あやめ

長浜 澄子

残照や やがてを思ふ年の暮れ

十二月松の廊下が騒がしい

十二月暦を捲るのも忘れ

言い訳も心得ている暮れせまる

年の瀬の音を正座の胸に入れ

身勝手な話持ち出す大晦日

お互いに風邪に用心年の暮れ

年の暮れ父の墓石を光らせる

十二月津軽情つ張り未だ続く

手探りのままで今年も年の暮れ

人波に揉まれて母と年の市

恩を受け真心返す年の暮れ

今年の苦を波が持ち去る大晦日

いい人をやめたら楽だ十二月

食べるほどあれば事足る歳の暮れ

泣くも笑うも一年たたむ除夜の鐘

ことなかれ主義とはさびし年の暮れ

我が棘のいくつ抜けたか除夜の鐘

師走の街を夫婦老いてもふたりなり

門谷 たず子

鷺見 正子

浦辺 静江

久谷 まこと

堀江 正朗

清水 潮華

酒井 一壺

川本 畔

中山 雅城

相馬 銀波

河井 庸佑

安達 はじめ

宮崎 シマ子

山本 希久子

堀江 芳子

淡路 ゆり子

稲葉 冬葉

岡本 花匠

春城 年代

男手とお金も欲しい十二月

前かがみに歩く師走の風の街

睡蓮も鯉も黙して年の暮れ

十二月八日 戦を知らぬ孫が生まれ

ボチボチとマアマアで無事年が暮れ

たくさんのありがとうあり年終わる

師走風もう空っぱの福袋

行く人の言葉少ない街師走

電卓が言うこと聞かぬ十二月

大晦日懷炉水洩薪能

古傷が疼きだします年の暮れ

雑踏にまぎれ師走のメガネ拭く

除夜の鐘ゆるり今年を脱いでいく

片減りの靴に冷たい暮れの風

年末に暇もてあます友が来る

仕事着の塵を払えば除夜の鐘

万物流転句読点打つ除夜の鐘

歯の治療のばしのばして十二月

大晦日窓拭きぐらいやる夫

浅野 房子

吉田 笑女

森田 文

伊藤 寿美

寺田 甚一

亀岡 哲子

嵯峨根 保子

小林 周信

中塚 礎石

北野 哲男

川久保 睦子

大橋 政良

西口 いわゑ

原 みさを

村上 信子

森 茂美

永田 俊子

小玉 満江

小野 句多留

愛染帖

波多野五楽庵選

和歌山市 川上 大輪

一本の樹から生まれる私小説
手のひらの記憶を辿る雨の午後
慰謝料で傷の深さを測られる

鳥取県 鈴木 公弘

馬鹿らしい話を馬鹿になつて聞く
秋が来た逃げる準備をしておこう

和歌山市 木本 朱夏

恐ろしいものが写っている鏡
薄目あけときどき居場所確かめる

東京都 播本 充子

花束を持つ街角のソクラテス
潮時を蠟人形に問うてみる

弘前市 高瀬 霜石

千羽目はお前が折れと置いてくる
じっと眼をこらせば見える縄梯子

弘前市 斉藤 力

零れ萩 儂い命だとしても
内鍵を開けてごらんよかたつむり

尼崎市 田辺 鹿太

喝采のない花道が性に合う
舌打ちをするほど冬は小走りに

横浜市 田中 笑子

時により今日の年齢四捨五入
この歳で愛だ恋だと言われても

西宮市 奥田みつ子

隠すから大切そうに見えるだけ
食い違い一つ次々ずれてゆく

寝屋川市 岸野あやめ

まあつまりメリーウィドウです
船と鞭 両手に持って通せんぼ

川崎市 和泉あかり

AとBがらり違った地下出口
緑また減らして空に傷をつけ

和歌山市 西山 幸

蕭々と亡父の喇叭が鳴る夜寒
放浪記 安息の日はまだ遠い

和歌山市 青枝 鉄治

いわし焼く匂いに嘘のない暮らし
責任のない身が口を軽くする

四条畷市 吉岡 修

賛美歌を誰も歌えぬウエディング
家中にぼつかり穴をあけて嫁く

弘前市 福士 慕情

いくたび転んだか角がとれている
布団から出るに出来ない冬の亀

富田林市 片岡智恵子

熟年に不況の風が真正面
待ちぼうけ昨日の小指冷えてくる

横浜市 清水 潮華

振り向いた弱気が肩を聳やかす
満ち足りて欲が近頃深くなる

和歌山市 福井 桂香

雨垂れの音に目覚めて立ちくらみ
お月さま 子供を産んでいいですか

米子市 驚見 正子

草臥れた家で幸せごっこする
冷や汗を一緒に拭いた共犯者

愛媛県 花岡 順子

酌み合つて残響ばかり恋しがる
五平餅ぬくぬく平家物語

米子市 政岡日枝子

レモン百個で違う明日が買えるなら
ハイジャックされたか鶴がまた来ない

和歌山市 楠見 章子

わたしにも明るく喋る娘がふたり
限りある夜が来ました酔ってます

鳥取県 武田 帆雀

ひとと波乱あつて月夜の回り道
好き好きと喋り始めたビール泡

鳥取県 田村さみ子

妙に寒くて上着にかけるキミの嘘
好き好きと喋り始めたビール泡

東京都 山本 磔

好き好きと喋り始めたビール泡
妙に寒くて上着にかけるキミの嘘

横浜市 山下 省子

好き好きと喋り始めたビール泡
妙に寒くて上着にかけるキミの嘘

愛媛県 中居 善信

世を拗ねた男が頑として聞かぬ

広島県 福島 万年

世話になる女房だここは立てておく

西宮市 緒方美津子

種明してから弾む事にする

大阪市 小林 周信

点滴もゆつくり落ちる日曜日

大和高田市

鍛原 千里

ボサノバをじっくり聞いた昼の月

豊中市

田中 正坊

秋灯下 読みつぐ路郎物語

鳥取市

岸本 宏章

雑魚どうし泣きたいときは泣けばいい

弘前市

高橋 岳水

先送りした難問の悪性度

弘前市

相馬 銀波

結論に走ると角の立つ会話

弘前市

中山 雅城

檻の実是小町の塚に二つ三つ

鳥取県

谷口 次男

ヨレヨレの靴にも言い分あるだろう

鳥取市

岸本 孝子

乗せられた話に尾ひれつけられる

松原市

玉置 重人

生きてきた数だけ悩みつきまとい

富田林市

大橋 鐘造

狂わない時計で尻を叩かれる

鳥取県

上田 俊路

ときどきは仮面をぬいで陽に晒す

奈良県 渡辺 富子

指切りへ風花が舞う無人駅

横浜市

保田 絹子

I-Tに背を向け土を捏ねている

八尾市

村田巳代一

憎い蚊を副流煙の刑に処す

和歌山市

山口三千子

振り向けばいつも夫の露払い

砂川市

大橋 政良

よく喋る妻とうなずくだけの僕

尼崎市

長浜 澄子

美しい泪おんなの砦です

西宮市

西口いわゑ

絵の中の蝶よわたしの手にとまれ

倉敷市

井上 富子

政局はどうあれ今日も野良仕事

西宮市

牧渕富喜子

しみ抜いて私事にけりをつけ

鳥取市

徳田ひろこ

拳骨の大きい方へ従いてゆく

京都府

丹後屋 肇

朝顔と夕顔が咲くゆきかえり

鳥取県

西原 艶子

善人になろう目薬さしておく

弘前市

宮崎ヒサ子

安らぎが欲しくて白い扉を叩く

米子市

小塩智加恵

うるさいと思うが傍に居る夫

日上市

加藤 権悟

一本の葦が妥協をしたがらぬ

河内長野市 植村 喜代

胸の内秋が私をさらけ出す

倉吉市

野口 節子

母病んで千羽の鶴に命乞い

富田林市

藤田 泰子

限界が来てスイッチの切れる音

大阪市

浦田 綏子

明け暮れを裂いて消えない文字に織る

横浜市

菱田 満秋

被害者の他は想像する痛み

尼崎市

内田美也子

知恵袋繕う母の針仕事

池田市

藤井 計光

人間不信 土と生きてる余生です

鳥取県

土橋 螢

桐一葉 夫婦喧嘩の仲なおり

大和郡山

坊農 柳弘

行雲流水わたしの恋は旅に出る

神戸市

森本みはる

あやふやな感情捨てるハープ園

箕面市

出口セツ子

感情のままに溺れてみたい愛

大阪市

神夏磯典子

よく見れば埴輪の顔に欲が無い

米子市

野坂 なみ

死の予感なくてのはほん生きている

愛媛県

黒田 茂代

ストレスを流す雨なら降っていい

米子市

木村富美子

お手をしてお座りをして人と住む

藤井寺市 高田美代子
原作のままだと笑えない喜劇

寝屋川市 江口 度

いつも自然に一番隅の席につく

弘前市 一戸 ツネ

チャンチャンコ亡母の香りのぬくもりよ

西宮市 井上 松煙

駅前でティッシュを渡す無言劇

和歌山市 桜井 千秀

ターゲット絞るとそこに居たあなた

茨木市 藤井 正雄

リストラが氷点以下の風で舞う

八尾市 井尻 民

ふる傷をかくす心の化粧です

堺市 渡辺さだを

月にむら雲ひねた詩人に御座候

大阪市 松尾柳右子

鬼は外 せつせと掃除して居ます

鳥取県 ささきやえ

あなたに手紙書きたくなったそば畑

藤井寺市 太田扶美代

煩惱や計りそこねた余命表

倉敷市 小野 克枝

台詞覚えの悪い女で正直で

唐津市 仁部 四郎

三度めのダイヤル留守の方がよい

米子市 林 瑞枝

湯豆腐をくずす女の華奢な指

和歌山市 福本 英子

ご機嫌を伺うコーヒー豆を挽く

松江市 川本 畔
裁かれるときは六帖仏の間

横浜市 芦田 鈴美

降り出して雨の記憶に辿り着く

八尾市 吉村 一風

平均寿命延びてシナリオかき直す

今治市 渡辺伊津志

陽溜りに戦を終えた戦前派

海南市 三宅 保州

鳥かごを出たら生きられないものを

川崎市 大島賛詩朗

仏壇はないがおはぎが作られる

出雲市 石倉美佐子

人妻をがんじがらめにする指輪

高槻市 左右田泰雄

物かげに隠れて胸を撫でおろす

今治市 越智 一水

絵手紙の心はほろほろ温かい

黒石市 相馬 一花

尊敬が恋に変わってくるムード

横浜市 金森 徳三

丸暗記だけで育って誤差にあう

羽曳野市 吉川 寿美

樹に耳をあてて命の音を聞く

西宮市 門谷たず子

シナリオがすこし狂った私小説

堺市 和田つづや

深爪に蜜柑がしみる一人旅

和歌山県 中後 清史

ポックリと逝きたいと言う医者通い

横浜市 山梨 雅子
スタイルの良さと通販に騙される

吹田市 石原 靖巳

練習をしても笑顔は難しい

京都市 都倉 求芽

栄枯盛衰 洗柿まつ赤に熟れてくる

八尾市 村上ミツ子

負けの美学に酔うて暇はありません

高知県 桑名 孝雄

わが家にも留守電ついてＩＴ化

大阪府 初山 隆盛

月独り私もひとり深い秋

尼崎市 春城 年代

午後からのブラックコーヒー濃く入れる

尼崎市 春城武庫坊

燃えるもの抱いて八十路の坂のぼる

高槻市 乙倉 武史

生きているあかし不安がつき纏う

淳子市 神戸みず帆

言い勝ったあとでゴメンが胸を占め

鳥取市 近藤 秋星

平凡な人生でよし曇り空

八尾市 高橋 夕花

深ぶかと頭を下げておく受話器

大阪市 鈴木トヨ子

坂の向こう何か企みありそつだ

寝屋川市 籠島 恵子

息つぎの下手な男と紅葉狩り

大阪市 渡部さと美

暑さ寒さに強い花鉢だけ残り

秀句鑑賞

同人吟 宮崎 シマ子

11月号から

川柳のお仲間に入れて頂いて二十年。歲月

とともに上手にならない自分が不思議です。常任理事として句会部で二年、会計部で四年、定年になりやっと暇が出来たと初めは思いました。けれど、月四回事務所に通っていた時間が、いつの間にか詰ってしまい、今もって忙しくしています。そしてだらけていましたら秀句鑑賞をとの声に、しつかり勉強しないと云われていると思ひ、頑張りなればと、一生懸命鑑賞させて頂きました。

敵ながら天晴と向かいあう

高瀬 霜石

一読フウツと笑いました。小さな蠅と格闘する大男が、蠅にもあそばれている姿を、想像するだけで楽しくなりました。

浮世の毒をプラス志向にして生きる

西口 いわゑ

「毒が変じて薬になる」と言う諺にもある通り、プラス志向で薬に変えて生きてゆくのも人間の知恵。浮世の毒はまだ軽いと思いますが、現世の毒は恐ろしいですね。

西へ西へと今日が流れているようだ

川上 大輪

日が西に入るように、自然も西へ流れているのでしょね。人の気持も、極楽浄土を求めて西へ傾いていると思ひますが、流れに逆らわずゆつくり人生を楽しみましょう。

知られたくない事言ってみたくなる

竹治 ちかし

人間とは弱いもの。心の奥深くしまつてあの世まで持つて行こうと思つていても、誰かに話せば楽になるし、またいい考えを教えてもらえるかもわからない。別の読みでは知られたくないが、ちよつと自慢の気持もある。私は後の方を取りたいです。

図太さに太刀打ち出来ぬデリカシー

浅野 房子

弱肉強食、図太さも強食だと思ひます。「無理が通れば道理ひっこむ」の例え通り、とてもとても。こう言う事は女性の方に多いように思ひます。デリカシー云々は、何度かこんな経験があるのでよくわかります。

母さんの笑顔 安心製造機

古今堂 蕉子

母さんの笑顔を見れば、機械にスイッチが入り、安心という空気が動きだします。そういう昔の母親に、今のお母さん達は育てられたのだから、皆が安心機を持つてくれたら、虐待・子殺しのニュースなど聞かなくて済みます。安心製造機の言葉に嬉しくなりました。粗食とは申さず美容食である。

山本 義子

麦飯、菜っ葉の煮物、イワシ、どれもこれも体に良い物ばかり。安くて美容に持つてこいならば最高。「申さず」「である」の表現がよくマッチしています。

なさけない顔をしてたら猫が来た

牧野 芳光

愛猫と人との温い絆を感じます。楽しそうな顔をしていたら、ケセラセラと寄りつかないかもわかりません。猫の方から来たことに川柳味があると思ひます。好きな句です。目が覚めるだけでうれしくなるわたし

鷺見 正子

悟りを開いてるわけでないけど、老人保健証をもらう歳になると、誰も身に覚えがありません。特に病む家族を抱えていると、よかつた、有難い、で一日が始まります。

ありがとう言える立派な口がある

岸 本 宏 章

昔の修身で素直に「ハイ」、勇気を出して「イエエ」と、なかなか言えぬと習いました。それと同じく、アリガトウもみんなが知っている優しい言葉なのに、つつい等閑にしてしまふ。心せねば……。

悪妻と言われるほうにある魅力

平 田 実 男

良妻賢母は日本女性の美。そして男性の望む人間像。かしこいから良妻がつとまったのです。今の女性もまた賢いから、悪妻ぶっているのです。本当の悪妻には、誰も見向きもしません。

ワンテンポ遅れを拾う妻の耳

山 本 玉 恵

お母さんは忙しいので、何かにつけて夫からも子供からも社会からも遅れがちで、一生懸命ついで行こうと頑張っています。遅れを拾おうと努力している姿がうかがえます。

残いくら自動引き落しの命

井 上 勝 規

閻魔が持っている余命表。私は後どの位あるのか知らん。これを知ることが出来たら人は働かなくなるでしょう。わからなくて幸せでも、確実に一日引き落されていくのです。

母さんの掌に花嫁の跡がない

酒 井 輝

色白で白魚のような指を持った花嫁さん。お母さんにもそうした時があったのです。今は色も黒くなり節くれだつて、よく働いた事を思わせる掌になっています。お父さんの胸の中には、可愛い花嫁姿が焼きついていていこうとでしよう。

涙の木ボキンと折つて旅に出る

川 久 保 睦 子

あざやかな変身。木を切るまでの悲しみ苦しみの、プロセスを乗り越えての決心に、エールをおくりまします。

秋です ね松茸さまと二年振り

和 田 つづや

うちもその通りです。

叱られてすぐに忘れるのも自愛

森 茜

右を向いても左を見ても、ストレスばかりの世の中。叱られてぐじぐじしていたら身が持ちません。一度は叱られた理由をよく考えて、反省もしましょう。

にくしみをみんな刻んでチャーハンに

生 嶋 ますみ

若い句だと思えます。にくしみをチャーハンにして食べ腹に詰め、エネルギー源にし流

刺と事に当る。気分も愉快になるでしょう。

いつもの場所に宝を埋めに行くのです

田 中 亜 弥

いつもの所へ宝を掘りに行くのでなく「埋めに行く」に気を取られました。いつもの所でいつもの友に逢い、お茶を飲みお喋りをし、心に宝を一杯埋められたのでしよう。この宝は誰も掘りには来ません。自分だけのもの。

借り物の他人の夫がよく走る

白 根 ふ み

ハンサムで足の長い、スマートな他人の夫。秋の運動会の日を、借物競争で走り、きつと一等になったのでしよう。心臓も心もどきどきときめいて、借り物でなかったらいいのにと、何度おもったことでしょう。借り物がよく効いて、楽しい句になりました。

腹いっぱい朝飯くつて来た声だ

原 みさを

昔から注射一本より目刺し一匹、とよく言われます。食ひ力といつて、何よりも食べることが体に一番力がつきますね。温いご飯に熱い味噌汁で何杯もお代りして、元気もりもりで大きな声が出るのですね。

最後に次の句も大好きです。

寝ころんでようやく嫁もうちの人

吉 村 さち子

誹風柳多留二四篇研究 36

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾

清 博美・佐藤 要人

275 我意趣を殿にいわせてしらんかほ

橋本 意趣はいろいろな意味があるが、④人を恨む心があること。恨みが心に積もること。また、その心。(『日国』)

高祿の旗本か大名の側室(妾)の句。

妾は殿の寵愛をよいことに、自分に都合が悪いこと、思いどおりにならないことを、睦言とともに殿様に吹き込んで、殿様の口から言わせて事を成就しようとするのがテクニク。よしんばそれが問題になったとしても、殿様の言として我聞せずという顔をしているという句。まさか正室のことをあげつらうこととはないだろうから、大名家なら川柳では硬骨の臣とされている国家老の中傷か。

十三目出たくいしゆをかえす也 一九27

御しんじよで妾はなはだ我意をいゝ

安元札3

つへこへとあらゆる事を殿へつけ 拾二25

粕谷 賛。国家老の中傷かもしれないが、家臣かもしれない。正室かもしれない。あるいは妾の身内かもしれない。色々と情況は考えられるので、特定は無理では……

小栗 賛。礎、最後の三行不要。

清 同。一つのことだけ具体的に書くこと誤解をまねく恐れあり、いろいろな事を言うぐらいでよろしかろう。

佐藤 同右。

276 みんな見なくし拍子木てをんだされ

橋本 拍子木は吉原の引け四つ(ほぼ午前零

時)の拍子木。大門が閉まる。

吉原素見の句。登楼する気はないのだから気楽なもの。あれがいいこれがいいと張り見世の女郎を品定めしながら、廓内をひやかして歩き、みんな見尽くしたら引け四つの時刻になってしまった。拍子木の音とともに追いつ出される。

ひけまへに素見シと茶ひきいじり合 四26
金の無方御かへりと四ツをうち 安八天2
ほつきあるいて引け四に土手へ出る

宮一34

粕谷 芝居見物のようにも思われるが、類句からは吉原素見の意に賛。

清・佐藤 賛。

277 目に立疵ハかまぐらの權五郎

橋本 鎌倉権五郎景政は、後三年の役に八幡太郎義家の家人として十六歳で従軍、出羽国金沢の柵の攻略に活躍し、大いに武名を揚げた。『奥州後三年記』によると、このとき景政は、鳥海弥三郎のために左目を射抜かれたが、ひるむことなく即座に答える矢を射返してこれを倒したという。また同僚の三浦為次が刺さった矢を抜くために、景政の顔を足で踏もうとしたところ、武士の顔を土足にかけ

る非礼をとがめこれを謝らせたという。(『日本架空伝承人名事典』)

景政が鳥海弥三郎に左目を射抜かれた挿話を詠んだ句。「目に立つ」は矢で片目を射抜かれたことと「目立つ」(人目を引く)が懸かっている。

後三年ノめだつた手から権五郎

目に立たはたらきをする権五郎

もふおれも玉に疵たと権五郎

清・佐藤 賛

278 金屏風まだあそこだといふ道具

橋本 金屏風は江戸の天下祭(山王・神田)に飾る金屏風。借りたものを飾ることになっている。

金屏風は買うものではない。どこから借りるか。「まだあそこにはあるだろう」と推測して旧家に借りに行く。

金びやうぶ元が元だとかりにやり

金屏風どこにあらふといふ道具

清・佐藤 賛

279 うるしやハ外のの字ハ書ぬなり

橋本 漆屋は漆かき。生漆を漆桶に入れてかき回す。店先などの日向で往來を背にしながら行ったものである。(『川柳大辞典』)

漆かきは、長い搔き棒を持って、円形の漆桶の中の漆をひねもすかき混ぜている。それは平仮名の「の」の字を書いているような動作なので、之とか乃、片仮名のノなどはしらぬようであると描写した句。

うるしかきの字一字で日をくらし

うるしやハの字油屋しの字也

かどみのの字をぬいてときに出る

大野 賛。外のの字は「能」「農」「濃」

「通」「野」などのくずし字で書かない。

清・佐藤 賛

280 むりないけんハたましいを入かへろ

橋本 放蕩息子に「これからは魂を入れ替えて真面目に働け」と意見する常套句をとらえて、実際にはそんなことはできないのに、と理屈でこしらえた句。意見する主体は特に出ていないが、親父であろう。

親の気になれとは無理なしかりやう

さあそれが悪いと異見さへ返り
どういふりやうけんだにむすこまる也

清・佐藤 賛

281 うけ出すといふ父て候母て候

橋本 請け出すは身請け。年以前に前借その他の身代金を、全部その抱え主に払って、遊女を自分の自由にする。こと。(『川柳大辞典』)

他) いなはいなや(…といなや。…やいなや)の「や」の省略。同時、継続の意を表す。…すると同時に。…するとたちまち。(『小学館古語大辞典』)

『川柳大辞典』によれば「遊女の身請けは負債のほかに身代金として梅茶女郎でも四五十両、松の位の太夫となると千両も取られた」とある。遊女を身請けするとすぐに、よい金蔓と見たか、それまで見向きもしていなかった者が「父だ」「母だ」と急に縁者が増えて寄ってくる。

四両ですめばおくる請出す気

うけ出すと乱筆になる八文字

うけ出されいって先にも又遣手

清・佐藤 賛

1014

荀香のむ

宮西弥生選

殺し合う命を母は産んでない
生傷の内は他人に触れさせぬ

いまたしか動いたようなサンマ買う
お百度が減る十月の石切さん

よく笑う蛇口は開けておくことに
真っ白い紙に負けてはなるものか

一枚の風が動くときみな動く
喧嘩などいつでもできるからしない

まさかの事は考えず米を研ぐ
ひらがなのかたちで雨が降ってくる

主婦の名で万能鉢持つている
負けてたまるかまだ花もある道もある

だんご虫諦めきれず死んだふり
あなたには貸しがあるので離れない

花束の重さへ明日が重くなる
春夏秋冬 女は上手く節を越す

私語多く金魚すっかり痩せている
むずかしいルールはなしで生きている

光ってるうちは大事にしてくれる

橋原市 居谷真理子

尼崎市 長浜 澄子

川崎市 和泉あかり

和歌山市 福本 英子

和歌山市 福井 桂香

大阪市 神夏磯典子

倉敷市 小野 克枝

羽曳野市 徳山みつこ

芦屋市 黒田 能子

寝屋川市 籠島 恵子

熊本市 永田 俊子

鳥取県 田村きみ子

倉吉市 野口 節子

八尾市 宮崎シマ子

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 上地登美代

大和高田市 鍛原 千里

西宮市 西口いわゑ

岡山県 矢内寿恵子

ぶぶ漬けに誘われてから好きになる

シャワー全開やっぱ悪いのは私

自己愛のピエロの鼻が高すぎる

ドアチエーン外し人情通わせる

百歳の父がいるからまだ娘

昨日今日出来た皺ではありません

過去などは振り向きもせず川流る

来る来ないあとひとひらに賭けている

友の葬 招待状は届かない

肩を組む友達の無い塾通い

これも節目プラス思考に切り換える

入場券で友を見送る別れの日

親しさの中にも少し匙加減

ひとときを泣き平穏を取り戻す

白布に人生の色虹を塗る

深く心に届く言葉を父は持つ

子の部屋に掛ける大きな世界地図

ふくらませすぎて風船われました

目に見えぬ宝をもらう昨日今日

木犀が匂って忘れることを知る

神隠し大事なものが消えてゆく

コスモスが揺れる友達呼ぶように

ペランダに干した傘から落ちる過去

半月にことば少なになるニュース

誘惑にとっても弱い皮下脂肪

富田林市 中井 アキ

逗子市 神戸みず帆

和歌山市 西山 幸

八尾市 村上ミツ子

高知県 貞岡佐紀子

鳥取県 西川 和子

東大阪市 田中美弥子

和歌山市 玉置 当代

堺市 志田 千代

愛媛県 花岡 順子

西宮市 奥田みつ子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 吉村さち子

鳥取県 岩崎みさ江

和歌山市 松尾 和香

吹田市 山本希久子

米子市 鷺見 正子

西宮市 門谷たず子

米子市 木村富美子

寝屋川市 森 茜

富田林市 藤田 泰子

尼崎市 内田美也子

三田市 久保田千代

西宮市 牧淵富喜子

八尾市 生嶋ますみ

旅に出て地酒買うのも夫孝行

彼岸花燃えて無縁墓囲む

策つきて星に願いをかけてみる

母に負けず呆けないように紅を引き

辞書引いてなるほどろこ落ちて行く

土の香を忘れず帰りに来るつばめ

右腕の強さにびつくりさせられる

護身術 転ぶ稽古もしています

甘い水飲むたびわたし魔女になる

団欒を支えた亡母の割烹着

まだ未熟人の真心汲めぬまま

はしゃいでる人をひとりに出来ません

俗塵を離れ水車の音も冬

ああ言えばこう言う人に追いつけぬ

子供とてはめてやらねば貝になる

家計簿の赤ペン禁止令がでる

環境が後退前に家が建つ

うつぶせに栗もわたしも爆ぜぬよう

将来を語るうどんに腰がある

医療費で老いに銃口つきつける

身の丈に合った暮らしに感謝する

一人芝居身振り素振りがでか過ぎる

開発の横で植林促され

相槌はむざむざ打てず距離をおく

寄せ植えの真ん中辺に猫じゃらし

米子市 小塩智加恵

鳥取県 石谷美恵子

和歌山市 武本 碧

羽曳野市 西村りつえ

鳥取市 永原 昌鼓

八尾市 井尻 民

米子市 政岡日枝子

東大阪市 安永 春

大阪市 川久保睦子

横浜市 保田 絹子

富田林市 片岡智恵子

藤井寺市 太田扶美代

米子市 林 瑞枝

大阪市 板東 倫子

西宮市 緒方美津子

鳥取市 徳田ひろこ

横浜市 清水 潮華

藤井寺市 鴨谷瑠美子

香芝市 大内 朝子

和歌山市 山根めぐみ

鳥取市 福田 登美

和歌山市 桜井 千秀

横浜市 秋元 和可

和歌山市 松原 寿子

寝屋川市 平松かすみ

遣り残したことが有りそう虫すだく

親の背をみて孫たちが本を読む

赤い列だれを待つのか曼珠沙華

陰口を聞いたら便秘治らない

バラ一本百円なんて目茶苦茶ね

ぶらんこの空の青さを蹴りあげる

風花と一駅歩き恋終わる

意識せず会える男の傍がいい

愛は幻 阿吽の呼吸すれてくる

蕎麦の花 大きな波を生んだ風

宣伝と中味がこんなにも違う

つまらない風が小耳に囁いた

ドック入り平均寿命越す構え

むこう岸亡母のやさしい背が跨ぐ

吊革に出しそびれてる私の手

和歌山市 古久保和子

鳥取県 ささきやえ

米子市 青戸 田鶴

大阪市 星野さらり

寝屋川市 岸野あやめ

尼崎市 春城 年代

奈良県 渡辺 富子

東大阪市 北村 賢子

鳥取県 西原 艶子

鳥取市 録沢 風花

横浜市 川島 良子

八尾市 高橋 夕花

大阪市 津守 柳伸

米子市 白根 ふみ

堺市 河内 月子

眞理子さんの句―父の恩は山より高く、母の恩は海より深いとい

う。多少の時代錯誤があっても母の願いはいつの世も同じ。複雑な

社会に青少年犯罪の発生率が上昇するこの頃、この句の母の一声が

耳から離れない。澄子さんの句―常に笑顔でいる作者に、こんな壮

絶な句がどこから生れたのだらう。癒えるまでは「他人に触れさせ

ぬ」。これは女だから分る句である。あかりさんの句―とにかく楽し

い。日頃身辺に転がっている句材であるが、ユーモアがあつて新鮮

な季節感が溢れている。英子さんの句―どんなに文化が進んでも、

自然の摂理は変わらない。医者は暇になるといふ秋と、「十月の石切

さん」をかけたのは面白く着眼である。

未完

山口美穂選



バブル期の計画未完のまま眠り
名曲は未完のまま時を越え
未完成わかつた顔で聴いている
山男未完の夢を雪に埋め
句読点明日のこととして閉じる
明日という救いの神がある未完
明日へと続く未完をあためる
未完の美秘めた少女のつばらな目
苦楽まだ知らぬ未完の青りんご
虹の絵のあと一色がまだ描けぬ
片方の目待ちわびているダラム
まだ未完目玉一つが描けぬまま
移り気のわたしをなじる未完の絵
未完成だから人間味がある
未完成だから長生きしています
人ごとに未完のドラマ抱いている
未完成わが人生のカリキュラム
人生の未完の地図を描きつづけ
余白いっぱい未完の地図を敷きつめる
眠ってる未完の大事起き給え
不肖の子未完の大事と思つとく
大事晩成いつまで待てばいいのやら

青正 八重子 邦昭 正剣 巳代一 保州 日枝子 喜子 俊子 あずき セツ子 大輪 朝子 みはる 万年 公誠 輝夫 俣子 政良 和輝 倫子 靖巳

朝稽古未完の大事しこを踏む
才能が泣いてる大事まだ書
無言館未来もがれた絵が迫る
戦後史は未完残留孤児の顔
自分史の終章風に任せます
自分史へ未完のペンを研ぎ直す
終章を飾る言葉がまだ出来ぬ
霊柩車に運んでもらうまで未完
終章は未完のままにしておこう
巻末は弥陀にゆだねてあけておく
人生は未完のドラマかも知れぬ
立志伝未完のままの僕がいる
それぞれに未完の作を持って老い
未完成夢を明日に残しとく
まだ未完故郷の空を遠くする
生涯のライフワークはまだ未完
自分史がまだ未完です閻魔さま
芳一の耳に経文書きそびれ
寅さんの旅へ未完の恋続く
老い二人未完の画布を仕あげたい
人
三連休未完の大事は寝てござる
もう少し磨こうきつと光る石
天
絶筆に未完の余韻残される
軸
てのひらで未完の夢をあためる

一花 和香 春雄 富子 渡あずま 岳水 妻水 喬水 (福) 洋 圭一郎 徳三 水笑 浜丘 みず帆 高明 尚士 慕情 鉄治 悦男 求芽 強一 保田 絹子

ノルマ

島ひかる選



ノルマ追う靴が重たい師走風
おじいちゃん僕のノルマを教えてよ
給食を残さず食べるのもノルマ
割り当ての券が重たい初舞台
生きている証ノルマに囲まれる
等分の家事を男がよくこなす
神のノルマ二男二女を授けられ
人として生きるノルマを追っている
父さんの肢体ノルマを征服し
子育てのノルマと違う孫の守り
子育てのノルマ果たして翔んでいる
天地人ノルマたのしむ菊の花
生き甲斐のノルマを探す余命表
課せられたノルマを乗せて行くバイク
コヒーがまずいノルマがのしかる (伊) 玲子
親戚に迷惑かけているノルマ
コソコソとノルマ伸びる棒グラフ
ドリンク剤飲んでも伸びぬ棒グラフ
ノルマ以上は明日へそととておく
ノルマを食べて企業戦士の貌になる
それぞれのノルマ果たして終電車 (渡) 富子

さち子 檳榔樹 裕峰 安子 みつこ 充子 隆盛 省子 虹汀 孝雄 強一 螢 岳水 照子 玲子 大輪 たえ 霜石 半覚 千里 子

ノルマ達成おいしい水を呑んでいる
 達成が出来てノルマにまた追われ
 ロボットにノルマ盗られた失業者 (井) 富子
 寝て食べるこれもノルマの病み上がり
 糖衣錠 今朝もノルマの水を飲む
 女房に背を向けて寝るあばら骨
 ぶん獲った予算は役所使いきる
 報復へ支援ノルマが重い国
 日本のノルマお金ですまされぬ
 毎日の家事がノルマに思える日
 ノラにもなれず妻のノルマの台所
 一日のノルマを癒す仕舞風呂
 右顧左眄するとノルマに出るあせり
 過労死を生んだノルマの罪と罰

日枝子
 みはる
 周 信
 たもつ
 一 花
 満 秋
 セツ子
 圭一郎
 倫 子
 たず子
 鐘 造
 雄 々
 鉄 治

ハローワークにもノルマは書いてない
 血糖値下げるノルマの薬を刻む
 母の知恵ノルマ隠した誉め言葉 (松) 輝夫
 神からのノルマを生きている命
 ひたすらにノルマこなして来た蟻だ

一 風
 典 子
 朝 子
 功 子

人
 一日一善神とノルマをとり交わす
 あずま

地
 今日生きているのがノルマだと思ふ
 保 州

天
 親として子として果たし得ぬノルマ 加島 由一

軸
 青空の下で選句をするノルマ

ゆつくり

寺井東雲選



なじみ客ゆつくりしてねとほつとかれ
 泣きに来た娘をゆつくりさとす母
 ゆつくりでいいのに老いに暮れ早し
 勝算があつてゆつくり靴を履く
 パトカーがあとに続いている速度
 軍配をスロービデオがくつがえす
 まだ長い余生ゆつくり趣味に生き
 リハビリの効き目死までかかるのか
 ティータイムゆつくりコーヒー豆を挽く
 母さんはゆつくりが一番苦手
 ゆつくりと構えていては馬鹿を見る
 自爆テロスローモーションでも怖い
 實際で仕事ゆつくり出れば誰もいず
 呼び鈴にゆつくり出れば誰もいず
 ゆつくりの老母の歩幅で紅葉狩
 天寿全うゆつくり下ろす祖母の幕
 ゆつくりと今日を楽しむ老いの日々
 ゆつくりと歩めば花も笑いかけ
 花嫁の父でゆつくり歩かされ
 ゆつくりと地球の病進んでる
 ゆつくりでいいよと横で急かされる
 病み上がり主婦はゆつくり休まれず

志 重
 修 洋
 しの
 清 史
 泰 竜
 登 美
 像 山
 章 久
 千 代
 英 旺
 強 一
 遠 野
 喜 子
 富 子
 寿 美
 セツ子
 圭一郎
 日枝子
 公 誠
 たもつ
 照 子

ゆつくりと喋ると君の味が
 止まってるようにも見える観覧車
 ゆつくりとエンピツ動く夢の中
 ゆつくりと朝寝朝酒してみたい
 結び目をゆつくりほぐす春の川
 ゆつくりと過去振り返る老いの日々
 傘寿の坂はゆつくり登ることにする
 見届けてゆつくり回るホームラン
 ゆつくりと温めている柿の種
 ばあちゃんとはゆつくり話すボランティア
 下り坂ゆつくり行こうゴールまで
 転んだ子立つてゆつくり待つ母
 時差ボケをゆつくり溶かす家の風呂
 リハビリの老母とゆつくり散歩する
 遅いとは思っていないかたつむり

隆 盛
 みつこ
 和 香
 尚 士
 度
 義 男
 妻 子
 輝 夫
 シマ子
 典 子
 睦 子
 庸 佑
 正 雄
 正 子
 保 州

佳
 八方をさがりトイレでゆつくり練る思案
 ゆつくりと歩いてみたい蟻である
 ライバルが消える遅くなる流れ
 ゆつくりでいいのに亡友はいそぎ過ぎ
 ゆつくりと六根清浄一歩ずつ

人
 ゆつくりと回りはじめた夫婦独楽
 扶美代

地
 天国へ行けばゆつくり背を伸ばす
 重 人

天
 砂時計今日はゆつくり落ちていく 川上 大輪

軸
 ゆつくりと祖母の歩幅に合わせる

初歩教室

題一粒

吐田公一

「川柳は人間を詠む」。これは何度もこの教室で述べたことですが、新人はともかくとして大分学んで来られた方々の中にも、まだ分っていただけない方がいるようです。

同じ「月」を詠んでも、

名月や池をめぐりて夜もすがら

芭蕉

お月さんざんねんながら負けました

豆秋

前者は勿論俳句であり、後者は川柳なのです。俳句は情景を中心とした風評であるのに対して、川柳は月を人間として扱ひ、敗戦のやるせなさを月に向かつて吐露している作家の心情が詠われているのです。ここに俳句と川柳の大きな違いがあるのです。(つづく)

添削句

○母親の一粒涙子更生

三喜夫

子更生下五ではあるが韻律が悪い。川柳は韻律も大切な要因

▽一粒の母の涙で立ち直り

○大粒の栗目で選つて値ぶみする

よしえ

川柳は下五が大事。単調に流れすぎ。着想は異なるが、

▽秋深し老母の好きな栗ごはん

好勝

○粒数えるほど薬飲み生きてます

好勝

説明句に近い

▽五色豆ほど飲まされて葉づけ

朝代

○不揃いの粒でも個性光ります

朝代

てにをは添削。だが強調される

▽不揃いの粒だが個性光ります

忠子

○一粒の米も大事にしたむかし

忠子

政子さんの佳句をご参考にされたい。また

視点を変えると、

▽一粒の米にも農夫の汗詰まる

さだを

○小粒でもびりりと育て唐辛子

さだを

擬人法でいいが、育ての願望より育つの方が適切と思う。みつめいい

○一粒も残さぬ慣い無事に古稀

清

無事が冗長な表現

▽一粒も残さぬ羨された古稀

章司

○場所近し大粒の汗朝稽古

章司

上五と下五の関連が説明的

▽大粒の汗横綱の夢を抱き

益子

○ごはん粒眼鏡かけたら踊つてた

益子

見付けはいいのだが説明句

▽粒ほどをオベラグラスで見る踊り

○一粒の種が千年杉になる

半覚

千年杉をもつて来られたのが失敗。且つ人間が見えない。擬人法にすると

▽一粒が大樹に育つ夢を見る

ヤギエ

○金星を探す小粒の徳俵

ヤギエ

この場合探すは不適。小粒力士が土俵際で逆転した様子を詠むとすれば

▽金星を取った小粒の徳俵

照彦

○大粒の涙嘘でも信じちゃう

照彦

下五に一考が欲しかった

▽大粒の涙に嘘が隠される

宏子

○雨粒のおちてきそうな空と風

宏子

人間が詠まれていない

▽雨粒が楽しさを削ぐ旅の空

つよし

○開店に粒選り美女のお出迎え

つよし

下五が安易に流れている

▽粒選りの美女を揃えたセレモニー

重之

○大粒の涙に説教怯え出す

重之

原句もいいがやや説明的

▽純真に還る少女の涙粒

孝美

○一粒の涙心を代弁す

孝美

こは代弁すとするより素直に

▽一粒の涙に心動かされ

秋星

○一粒の種が百粒千粒に

秋星

全くの説明句。着想は異なるが

▽一粒の初も大事に秋を刈る

秋星

○吊し柿粒がそろつて下がつてゐる 栄一
丹精を詠むことで人間がうたわれてゐる。

▽丹精の粒が揃つた吊し柿

○大粒の涙を見せる芸の技 (山) 雅子

理屈を言うようだが芸は技であり、当然川柳のような省略の文学では極力重複は避けるようにしたい。

▽大粒の涙自然に見せる芸

○大粒の涙葬送終へる (三) 美恵子

葬送終へるが説明句にしてしまつてゐる。むしろ事件性(事故等)を採り上げると

▽大粒の涙で涙ぶ遺留品

○真珠から涙の粒が零れてゐる ふりこ

抽象的すぎて分りにくい。真珠を擬人法と考へてみて

▽改悛の真珠の涙零れ出し

○粒よりの人材集め成果です 純

時事吟にする句が生きてゐるのは。粒よりとあれば人材集めは不要と思う。

▽粒選りを集めて成果出ぬ不況

○あの人はいびりりとしめる山椒粒 春江

上五が冗長。擬人法でゆくと

▽山椒がピリリと締める会議室

○優勝に粒の涙が溢れ出る 謙次

単なる表現の差で多少とも川柳らしく

▽金メダル挙げて涙の粒溢れ

○形見分け涙の粒が光つてゐる 欣子

感情を挿入すると

▽形見分け思い出多き涙粒

○愛と手間かけた稲穂がよい粒に 郁代

粒を詠み込まなくても稲穂で分る

▽手間かけた稲穂に明日の糧を見る

○新米の粒の輝き笑う飯 和香

下五の表現が不適。笑い飯という言葉はあるが、新米(若者)には不似合ひと思つる。

▽新米の粒輝いてゐる笑顔

○求む水雨粒恵み天を乞う トシエ

句がブツブツと切れ流れがない

▽雨粒の恵みを願う早魃地

○一粒の涙を流す孫いとし 満子

青春の感受性を詠むとすれば

▽一粒の涙十七歳の春

○御飯粒茶碗に残す注意する 綾乃

下五が安易

▽一粒を大事とさす祖母の膳

○粒つぶのニキビが出来て春が来る 三郎

同じ内容を

▽粒つぶのニキビに孫の春を知る

佳句

不揃いの粒でそれなり自己主張

小粒でもキラリと光る孫がいる

クラス替え肩が凝りそな粒揃ひ

老いの衿真珠ひとつではなやいで 栄呼

手土産へ粒選りの梨兎栄も入れ サト子

小粒でもカニはカニの構え持つ 青生

濃いお茶に粒あんが好き秋の冷え 喜代子

選別をされて並んだ青りんご 鈴美

社会鍋米粒ほどの愛を入れ てる代

惚けたのか頬に米粒二つ三つ 和輝

この命二トロの粒に助けられ 像山

一粒の飯にこだわる戦中派 政子

ケシの粒ほどの噂に尾鰭付く 比佐子

泣かないと決めて耐えてゐる涙粒 菜月

大粒の涙に殿が惑わされ 昌鼓

大粒の涙そのまま子が寝入る 美代子

小粒でも主張を曲げぬ三歳児 智加恵

粒よりの輪からまさかの芽が育ち みず帆

一粒の真珠が煽る虚栄心 ゆきの

シンクロの美メダル嬉しい粒ぞろい さらり

弁当の蓋から食べる戦中派 裕峰

一粒の種へ無限の夢託す 美弥子

(明るくて素直で)

蝶よ花よ一粒種の子がそむく よしこ

(葉のむすかしさ)

一粒の唱えに世界揺れ動く (三) 重子

(時事を見事に表現)

私の句

更生を誓う一粒の涙あと

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 11月号から

鷺見 正子

手をつなぐただそれだけで元氣満く

飯西 ミサヲ

人には色々な励まし方があります。私の母は米寿を迎えました。手をつなぐとやさしい笑顔を返して来ます。ミサヲさんの句に母を感じました。

働いた手だクリームを塗っておく

中村 芳恵

自分を大切にしている人は、他人にも優しくなれます。どうぞ頑張ってあげて下さい。

一滴の水の中にもある宇宙

今岡 貞人

夫が入院している時、点滴が祈りの形をして落ちている、と感じましたが、水一滴に宇宙を見るときは、スケールが大きな句です。

足向けて寝てはいけない人がいる

古手川 光

作者の誠実な人柄を感じます。

彼岸花無縁仏に似て淋し

小泉 ひさ乃

昔ガキ大将が、しゃれこうべから彼岸花が生えると、教えてくれました。彼岸花の群生は古戦場を、無縁仏を感じ思わず手を合わせなくなりま

女とは違う男の笑う箇所

福永 ひかり

長い間の夫婦でも、ウフフとアハハに微妙なずれを感じる時がありました。なる程、あれは男と女の違ったんですね。

効能を聞くと食べたもののばかり

秋元 和可

今は健康ブーム。あれがいい、これもいいと聞きますが、腹八分が一番。お大事に。

太陽を真上に被る夏帽子

夕焼けに染まって戻る父の舟

安野 案山子

真上に被る、に夏の日射しの強さを、また茜に染まって帰って来る舟が、目の前に見えるようです。上手な句だと思います。

足腰を鍛えて跨ぐ水溜まり

猪森 スミエ

いつも備えを忘れないスミエさん。水溜まりよりもっと大きなものを、跳ぶことが出来るでしょう。

強いのが勝つと思っていた誤算

岡川 無限

今年のパリーグは近鉄が優勝しました。長年のファンとしては、今年こそ念願の日本一へと期待をしています。小が大を制し、弱者が強者に勝つ。ファンにはたまりません。

がらくたの真ん中辺にいる私

武島 ちよえ

自分で思い込んではいけません。まだまだ現役。ガンバリましょう。

ポケットに孫に貰った飴がある

野村 清美

愛してくれる人が子供は本気で分かります。ポケットにある飴に、両者のほのぼのとした交流が感じられます。

叩かれて釘が本気に仕事する

松村 輝夫

釘の男らしさに引かれてしまいうです。初めての体験七十五歳です

安達 厚

加齢を体験とおっしゃる厚さん。万年青年に違いありません。

ご近所を起して回るオートバイ

中井 正秀

うちにも毎朝5時前に、そのオートバイが起しに回って来ます。

「川柳の山頭火」 鬼遊先生

— 一周忌によせる —

酒 井 一 壺

鬼遊先生には川柳を始めて半年の時、毎日文化センター川柳教室（当時吹田）で初めてお目にかかってからご病氣されるまで、ずっと指導いただきました。

今、先生のあの魅力は何だったのか考えています。

教室では勉強の後、次の題を出され作った句を次回持って行き、その場で色々批評し指導をもらいます。その間いつも表裏なく、しかも公平に親しみ易い言葉と態度で接して下さいました。人の悪口、自慢話は一度も聞いた事はありませんでした。欲がなく悟りを開いた高僧の風格があつたように思います。誰もが気楽に近寄り、何でも話せる人なつこい人格を持って居られ、これが先生の魅力だったのでしょう。

先生独特の飄々としたユーモアを入れた話し振りから、「本当の川柳」「人間の生き方」を教えられました。

常に「川柳を楽しむ作り、川柳を楽しむ」

と教えられましたが、未だに楽しむ所まではほど遠く、毎日苦しみながら句を作っています。少しでも先生の教えに添えるよう、これからも努力したいと考えております。

六年ほど前、鳥取県のある人から、「薫風先生、鬼遊先生に直接教えてもらっているあなたは、日本一幸せ者だ」と手紙を下されたことがあります。

何度か先生に「句集を出して下さい」と、お願いした事もありましたが、「私は句集は出さん、句碑もいつかは消えるものだからいらぬ」と言っておられました。これが先生の本心だったと思われまふ。先生の遺句集の発刊があればと切望します。

亡くなられてはや一年、まだまだ沢山の思い出があり、尽きることはありません。

鬼遊先生、本当に色々ありがとうございしました。心からお礼を申し上げます。

あまりにも忽然すぎた師の逝去
鬼遊師の心を抱いて新世紀

川柳マガジン誌上コンクール作品募集

応募 大会投句用紙または市販のB5

原稿用紙に、課題「時」3句（未発表作品・住所・氏名（雅号）・年齢・電話番号・性別・所属結社名を明記。複数投句可）。

第一次選考

・牛尾緑良・小林由多香・濱野奇童ほか27名共選
・各選者ごとに特選1句、秀作3句、佳作10句を選出し発表する。

第二次選考

・第一次選考の特選、秀作句、計20句から、15名の選考者により大賞（最優秀）者ほかを選出。
・「川柳マガジン」大賞1名
賞と楯、副賞として受賞者の川柳句集を発行。

賞

・準賞3名 賞状と楯
・第一次の特選者30名 賞状

締切り 平成14年1月15日
参加費 二〇〇〇円（選句料として）
発表 第一次選考発表

第二次選考発表
「川柳マガジン」平成14年3月号

第一次選考発表
「川柳マガジン」平成14年4月号

応募先 〒537-0023 大阪市東成区玉津一―九―十
六―四F 新葉館出版内

川柳マガジン誌上コンクール係

本社 十一月句会

十一月七日(水)午後五時半
アウイーナ大 阪

立冬の七日は暦通りの寒い一日であったが、11月句会には102名の参加があり定刻に開催された。

はじめに先日亡くなった同人の和田維久子さん、池田寿美子さんのご冥福を祈り、一分間の黙祷を捧げる。

お話は常任理事の米田恭昌氏。命の正しい活かし方、独自の健康法を編み出し天風会という精神修養の会をおこした哲人中村天風(本名三郎)について語る。大正から昭和にかけて多くの著名人を会員に持ち、東郷平八郎も熱心に講話を聞いた一人であった。天風氏の半生は実に波乱に満ちていた。選ばれて軍人となり満蒙の地へ渡るが、帰国して過労から肺結核となる。人は誰も自己を強くする力を持つと信じ、自力で治すべく、米、英、仏と渡り歩き、教えを乞いつつ模索するも叶わず日本への帰途、ヨガの聖者 カリアップと会い、インドの奥地で修業、病を克服する。

帰国して健康法の広布に務める。「心身統一法」、要はプラス志向で生きることと言う。初出席に吹田市の太田昭さんを迎える。月間賞は堺市の志田千代さんに輝く。

(司会)遠野(記名)澄子・朝士
(受付)茜・義子 (清記)尚士

席題「もみじ」 岸野あやめ選

古疵を癒すもみじが目にはいたい
もみじの手に一番弱いおじいちゃん
秋冷えにもみじ耐えてるなと思う
紅葉が湯けむり越しに和ませる
画布いっぱい燃えるもみじに筆躍る
草もみじしぐれてゆくか山頭火
輪唱のもみじ校舎を通り抜け
池の面に揺らぐもみじに母の影
もう年やなあと分つてきたもみじ
ご近所のもみじですます今朝の冷え
諍いの仲裁孫のもみじの手
もみじ見一人は車椅子ながら
夕映えもみじ影絵のように浮く紅葉
絵手紙のもみじ秋をつれてくる
紅葉へフアイト燃やしている銀杏
はめられて真つ赤になっているもみじ
もみじ狩り白内障のオベ終えて
もみじ狩り地酒旨いと誘い来る
もみじの手宙つかんで立ち上がる
全山紅葉私も歳をとりました
無住寺の紅葉が人を呼んでいる

達子 英子 瑠美子 柳弘 隆盛 かすみ 和香 月子 三男 哲男 愛論 千里 玄也 しげお 隆盛 恭昌 希久子 千代

来年へ余韻残して散る紅葉
半世紀前のもみじの手のように
まだ過去にできぬ疵抱き散る紅葉
山もみじはみ出しそうな秋の画布
妥協したときから色褪せるもみじ
紅葉のトンネル抜けてきた札所
もみじ燃ゆ女の恋のはげしさか
紅いままダムに呑みこまれたもみじ
いろは坂もみじの底をバスが行く
草紅葉これから先は秋の風

佳

全山紅葉神様たちの絵画展
喜寿過ぎてまだまだ燃える葛紅葉
もみじ散り閉店の札また一つ
結婚も離婚ももみじの頃だった
さくらよりもみじが好きな天邪鬼

人

もみじの手にゆだねる二十一世紀
満足の色でもみじが地に還る
天 地 軸
左遷地のもみじに溶けていく野心

草もみじ六地蔵さんも見えておわす
兼題「ライバル」 初山隆盛選

フアイト湧く良きライバルに恵まれて
ライバルが増えると速くなる流れ
ライバルが一番先に来た見舞い

一步 岳人 澄子 美代子 保州 重人 菜月 保州 萬的 睦子 正坊 公誠 泰子 千歩 楓楽 笛生 鐘造 満津子 充子 靖巳

ライバルにいちばん高い花贈る
ライバルを見る時小さな虫眼鏡
ライバルを心の中に持つ強さ

正坊

ライバルがまたドル箱を積んでいる
長生きのレースは妻が好敵手

重人
鹿太

思い出に浸るとうどん伸びている
片づけの途中古着と話し込む
思い出をこぼしてばかり母の海
戦争の思い出は語らない

章久
睦子
恵子
たもつ

ライバルにあんな女と言うておき
ライバルが見てる寝たふりしておき
ライバルに紹介されてきたお客

東雲

ライバルが幸せそうな顔してる
ライバルの前は決して歩かない
ライバルは女ころがわかる奴

賢子
千里
賢子

思い出の中には妻の顔がない
貸し借りのおもいでだけがたど消えず
金子みすゞの詩は思い出たぐり寄せ
思い出の顔に逢いたい赤とんぼ

瑠美子

少年の頃ライバルは兄だった
ライバルが斃れるケルンに石を積む

鹿太

ライバルより先に笑ってやるつもり
本当のライバル自分の中にいる

美代子
萬的

思い出をフアイルするはなぜか秋
思い出を思い出せないまま冬に
明日からの生きる思い出書いている
かげろうの向こうで思い出が駆ける

伽羅

診察券ライバルよりも多く持ち
ライバルがいるので前に進めそう

愛論

ライバルの君が居たから今の僕
地

三男

思い出を消してマンション建っている
父ちゃんに内緒思い出二三つ

扶美代

励ましてくれるライバルだっている
ライバルの一番前に妻がいる

諷云児

ライバルが光るとわたし燃えてくる
天

恵子

思い出を消してマンション建っている
父ちゃんに内緒思い出二三つ

たもつ

ライバルの癖ひとつさえ華がある
ライバルが傾いている手を貸そう

西

永遠のライバル私なんだろう
軸

ダン吉

思い出を消してマンション建っている
父ちゃんに内緒思い出二三つ

東雲

ライバルを超えつもの玉の汗
ライバルと思ってくれていたらしい

扶美代

ライバルに年齢だけは差をつけた
兼題「思い出」

三宅保州選

思い出は過剰包装しておこう
思い出は柱の傷のこの辺り

金太

名コンビ裏を返せば好敵手
ライバルはまだライバルと見てくれる

天笑

好きだった思い出だけを書きのこす
思い出は飛ばずに消えたシャボン玉

螢

思い出に重なる着にして冬を越す
思い出の少女に羽根がある

澄子

ライバルに欠伸うつした楽しい日
ライバルの涙こっそり見てしまふ

はじめ

好きだった思い出だけを書きのこす
思い出は飛ばずに消えたシャボン玉

満津子

思い出に重なる着にして冬を越す
思い出の少女に羽根がある

雅文

ライバルの涙こっそり見てしまふ
ライバルと背くらべする棒グラフ

靖己

好きな娘のかばんに入れた蛙の子
少年倶楽部買いに走った一円貨

公誠

思い出は過剰包装しておこう
思い出は柱の傷のこの辺り

希久子

ライバルが良薬となりありがたい
ライバルに診察券は見せられぬ

遠野

好きな娘のかばんに入れた蛙の子
少年倶楽部買いに走った一円貨

寿美

思い出は過剰包装しておこう
思い出は柱の傷のこの辺り

いわゑ

ライバルのうしろ小走りやっこさ
お隣が買ったから買う新車です

修

好きな娘のかばんに入れた蛙の子
少年倶楽部買いに走った一円貨

朋月

思い出は過剰包装しておこう
思い出は柱の傷のこの辺り

楓楽

ライバルが良薬となりありがたい
ライバルに診察券は見せられぬ

春

好きな娘のかばんに入れた蛙の子
少年倶楽部買いに走った一円貨

義雄

思い出は過剰包装しておこう
思い出は柱の傷のこの辺り

かすみ

ライバルが良薬となりありがたい
ライバルに診察券は見せられぬ

満州

好きな娘のかばんに入れた蛙の子
少年倶楽部買いに走った一円貨

弘一

思い出は過剰包装しておこう
思い出は柱の傷のこの辺り

靖己

ライバルが良薬となりありがたい
ライバルに診察券は見せられぬ

雅文

好きな娘のかばんに入れた蛙の子
少年倶楽部買いに走った一円貨

求芽

思い出は過剰包装しておこう
思い出は柱の傷のこの辺り

アキ

地
思い出の古い方から美しい

修

天
思い出になるまで逢えぬ人が居る

セツ子

軸
思い出は私だけの玉手箱

兼題「おしやれ」 河内月子選

本日の主役を越えているおしやれ

充子

新札を財布から出すのもおしやれ

螢

おしやれして今日の演技をはじめよう

洞庵

おしやれして来ましたのんよ花時計

しげお

ご主人のおしやれ奥さん待たされる

三男

老婆の派手なおしやれに目をつむる

鐘造

おしやれする母さん今日は通院日

恭昌

おしやれする七色の服はけ防止

和香

お料理のおしやれに添えるもみじの葉

弘風

制服を着てもおしやれはすぐ分る

正坊

年なりのおしやれさまた同窓会

菜月

制服がおしやれだからと受験する

千代

おしやれしてハローワークに通ってる

朋月

スカーフで首のしわしわカバーする

天笑

コテコテのおしやれが好きな浪速っこ

鹿太

わたくしのはげましになるおしやれする

昭子

あんなそれでおしやれのつもりお化けやで

章久

鏡見て心もおしやれする笑顔

哲男

目いっぱいおしやれして行くクラス会

睦子

アダムとイブ着飾ってゆくディナーショー

雅文

私の楽しいおしやれです雅号

保州

色づいて山もおしやれを始めたよ

鹿太

嫁の口添えがあるわたしのおしやれ

冬葉

おしやれして置きどころない荒れた指

一風

ブランドの服に仕送り全部化け

セツ子

老人会少しはおしやれして行こう

房子

ブランドの下着を着てもわたし鬱

弘一

おしやれしてみても人相変らない

久峰

最高のおしやれよ羽化をした毛虫

修

わたくしが着たらおしやれでなくなった

洋

真つ黒なロングドレスに赤いバラ

千代

おしやれより大事にしたい身嗜み

伽羅

ジーパンを破って脚をのぞかせる

重人

足元のあたりにおしやれ見せている

賢子

本ものが一つ光っているおしやれ

たもつ

つけるだけつけて重たいですおしやれ

弥生

美術展巡り心のおしやれする

賢子

銀髪が光るおしやれを志す

セツ子

人

隆盛

にんげんをやめますおしやれやめるとき

楓楽

さりげないおしやれにお金かけてはる

天

おしやれして鮮度保っている私

茜

軸

洋

おしやれして待つてくれてる秋の山

洋

兼題「告げる」

都倉求芽選

告げて置く延命措置はしないでと

満津子

テロ廃絶告げるラッパを持っている

満津子

サヨナラを告げて私に戻れそう

充子

アフガンの児が空腹を告げている

鹿太

ガン告知医者はさらりと言つてのけ

菜月

異常なし告げるあかるい聴診器

重人

平静を装う告知された胸

賢子

遠回しノーツと告げる女文字

正雄

さりげなく大事なことを告げられる

房子

無理しなや無茶はしなやとカルテから

柳弘

大漁を告げにたなびくいわし雲

章久

杜氏発つ新酒仕込みの時告げる

利昭

告げ口の好きな女と暮しける

三男

寝たきりの母に朗報先ず告げる

恭昌

今度こそはと日延べしているガン告知

扶美代

横切った風に倦怠期を告げる

正坊

ひめゆりの遺影戦火の日を告げる

義子

加齢現象医者はさらりと言つてのけ

あやめ

癌告知気丈な妻と褒められて

千歩

告げ口もみんな時効のクラス会

かすみ

補聴器は神のお告げを聞くために

萬的

縄文杉人間無能だと告げる

弘風

告知して気安く主治医話し出し

靖巳

前ぶれも何もなかったプロポーズ

正雄

逆転を風呂場へ告げにくるナイター

愛論

賞味期限切れたと私告げました

隆盛

告げ口にわたしの色をすこし混ぜ

隆盛

愛の告白されてないのに眼でわかる
耳底の父と母にも告げておく
嬉しくておんなじ事を告げに行く
疑いが晴れても告げ口胃にささる
お別れを告げる役目もある白衣

賢子
扶美代
紫香
鐘造
哲男

佳

ポケットで告げるチャンスを持つ小箱
お姑さんに告げ口をするうちのタマ
告白の済んだ花から散つてゆく
ドクターに未だ告げられぬことがある
申告の出来ぬ小指がひとりいる

由一
英子
諷云児
あやめ
つづや

人

真実を告げない思いやりがある
さよならを地蔵に告げて村を出る

千代
金太

地

いろいろなと告げてくれますこの十指
いろいろと告げてくれますこの十指

いわゑ

軸

この星の終章告げる国のエゴ

兼題「歴史」

河内天笑選

焼け跡のリングの唄が夢をくれ
大阪のうどん歴史の味やねん
母の着た袖私が娘が孫が

隆盛
千里

移民史は希望と挫折に織る
足踏みのミシンが知つて歴史
美化されて神話になった社の歴史

(田)

節子
伽羅

歴史に誇る忠敬の日本地図
過疎の村歴史ひっそり生きている

求芽
満州

満州

恭昌

歴史上の人物みんな字が上手
生き恥をさらす自分史編んでいる
あの一杯僕の歴史を変えました
アメリカの歴史揺るがすバイオテロ
歴史には載らないけれどボランティヤ
タリバンの歴史じつくりテレビから
捏造の歴史に泣いている古墳
権力が書いた歴史に騙される
列強は皆侵略の歴史持ち
神の名で酷い歴史をくりかえす
雑兵の涙歴史に書かれぬ
血の歴史背負つて戦なお続き
木簡が古代のロマン花咲かす
太古にもロマンがあつた埴輪の目
蛙の子父の歴史を背負つたまま
その裏で美女が動かして歴史
女偏の歴史を変えてゆく女
少しづつ女が強くなる歴史
脈脈と歴史をつなぐ出土品
畿内説の卑弥呼唄んでいる河内
治と乱の歴史見据えてきた仁王
正倉院御物に華やかなる歴史
ほころびが歴史のところどころから
歴史上の人物になる悪い人
歴史上一番好きな孫悟空
戦勝国にも八月十五日

義
正坊
三男
満州
かすみ
月子
セツ子
朋月
あやめ
由一
尚士
玄也
武庫坊
洞庵
靖巳
度
恵子
希久子
賢子
達子
洋
萬的
楓楽
登
岳人
充子
千代
五月

一行で片付けられている一揆
戎橋の歴史をグリコ見て育ち
原爆ドーム日本にだけある哀史
目には目をそんな歴史はもう御免
盛衰の舞台支えてきたは民
歴史ある道はだんだん細くなり
見にいこか浪速の歴史博物館

保州
一風
かりん
保州
真理子
志田
千代

天

軸

本社句会皆出席者(順不同)
本年一月から11月までの皆出席者の氏名を
左記に掲載します。もし誤りがありましたら
事務所へお知らせください。

安達はじめ 浅野房子 阿萬萬 穴吹尚士
石森利昭 稲葉冬葉 石原靖巳 居合真理子
海老池洋 江口度 太田扶美代 川久保睦子
榎本舞夢 大谷篤子 大内朝子 鴨谷瑞美子
川原章久 河内天笑 河内月子 岸野あやめ
鍛原千里 吉川寿美 黒川紫香 高田美代子
楠昭子 坂上高栄 出口セツ子 飛永ふりこ
寺中正坊 田辺鹿太 寺川弘一 西口いわゑ
寺井東雲 長浜澄子 中澤伽羅 西田柳安子
西出楓楽 西内朋月 藤井正雄 春城武庫坊
福田満州 坊農柳弘 町田達子 平松かすみ
松尾和香 森本弘風 吉村一風 宮本三喜夫
安永春 吉岡修 山本希久子 (51名)

名世物語

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

ローズ川柳会 (先月分) 山崎 君子報

酉空佇てば誰もが皆詩人
 空いっばい夢をひろげる園児の絵
 星のない夜空に描く人の顔
 披露宴として続々請求書
 グリコのおまけ集めてそして小さい恋
 これほどの孝行はなしはれ舞台
 砂浜の子亀は波に乗って行く
 シャワー全開眠れぬわけを問うている
 目線まで雲一つ無き祝賀の日
 よろしくねそれがきつかけ手をつなぐ
 秋の味覚がベルトの穴を惑わせる
 曼珠沙華咲いた母さんそして秋
 渡らねば生きてゆけない橋がある

岸和田川柳会
 長谷川呂万報

ここ我慢素直に兜脱いでおく
 好きなのに素直にいえず終電車
 茶髪の子案外素直に席譲り
 褒めていた素直さがいま頼りない

鹿太郎 一 侑
 穰 一 甚

言うだけは言つて素直にあやまろう
 君が代を素直に聞けぬわだかまり
 素直にはなれたが僕が消えている
 締切りが迫り気になる棒グラフ
 嫁ぐ日が迫ると父はただ無口
 半世紀またもや迫る血の臭い
 だんじりが身近に迫るやり直し
 お断りしたら言葉が荒くなり
 ひやかして雑言かえる旅の店
 雑言をゴクリ丸飲み肥満妻
 雑言に雑言返し秋の風
 耳悲し罵詈雑言の喧嘩聞く
 人間の驕りにらんだ株の高
 正論を黒い打算が遠ざける
 打算的な男とわかる言葉尻
 族議員選んだ裏にある打算
 病癒え打算忘れて星を見る
 被災地へ打算などないボランティア

高槻川柳サークル卯の花 川島麗云児報

半分ずつ右と左の耳で聞く
 喜寿近し人生半ばだ生き抜こう
 そつと置く女の肩にある温み
 妻のへそくりそつと拝借するピンチ
 そつとしておいて私はデリケート
 古傷を他人がそつとしてくれぬ
 そつとしておいてあげよう泣いてはる
 隠すため小さな嘘をまたひとつ
 試食して舌で覚える隠し味

富志子
 文時
 ダン吉
 盛之
 仁緑
 蛙城
 狸村
 洋
 昭二
 笑司
 苑子
 呂万
 東雲
 基
 俣子
 東吉
 路子
 さよ子
 比ろ志
 義一
 満寿蔵
 石舟
 澄子
 靖巳
 あやめ
 スミ子
 吉之助

隠す金無いので筆筒空いている
 棺桶の中でこぼれた隠しごと
 隠しごと女の胸の小抽出し
 万札の皺に隠れる浮世絵図
 弱点をすっぱり隠す夏帽子
 案内に書いてた赤いポストだな
 秋のポストに華やいでいる絵の手紙
 人の恋ばかりで燃えてくるポスト
 望郷の香りを詰めてポスト立ち
 競い合い座つたポスト軋み出す
 ほのぼのと芽生えた愛をいとおしむ
 母が居るだけではのほするわが家
 新妻が母の背流すしまい風呂
 石焼き芋中味も顔もほつこりと
 ほのぼのとした人柄で芽が出ない
 絵に描いた餅に政治はしてならぬ
 喜怒哀楽噛み締め渡る老いの川
 あだ花でよし美しく咲けるなら
 夫婦での写真めつきり減りました
 教えて下さい馬耳東風の生き方を
 審判の旗に表と裏がある

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

越えてきた修羅はほとんど忘れてる
 花の名はほとんど知らず花が好き
 ほとんどが同じ方向むく怖さ
 老犬も一緒に生きる青デント
 いい事があしたありそう生きている
 同じなら楽しと生きていく

治三郎
 重人
 活恵
 秀夫
 鹿太
 紫香
 節子
 晴美
 稲子
 庸佑
 泰雄
 柳宏子
 五月
 孝一
 武士
 武史
 波留吉
 芳子
 求芽
 磯
 しげお
 アキ
 あずき
 欣史子
 会美
 慶子
 能子

ほとんどが栄養になる秋の空
病院食ほとんど食べて回復期

東大阪市川柳同好会 森下

優しさに甘えふわふわ夢心地

ふわふわと過ごしてならぬ原爆忌

綿の美が割れて立秋だと気づく

愛ひとつ下さいふわふわの愛を

理不尽に消えたいのちよ八月忌

ど心底で友の情けを避けている

感動の情けが手話の子に弾む

うやむやに生きて命の不燃焼

置きぐすり人情話手土産に

新しいいのちを抱いた里帰り

ふる里が近いぞ切符喋り出す

仲良しの切符はいらぬ縄電車

蝶々に切符を渡す無人駅

火祭りの余韻で宿の火が消える

まだ少し余白を残す火の女

長電話台所の火が怒り出す

火傷せぬ程度に燃えて日々生きる

火の橋を渡る女の背が丸い

尼崎いくしま川柳会 春城

宅配だ松茸はなししめじ栗

松茸が届き一族そろい鍋

ストアより松茸の香を持ち帰る

松茸は年に一度の誕生日

鉛筆の先とがらせて午後のお茶

シマ子
弘直

愛論報

美弥子

信治

ばつは

柳弘

三重子

度

元紀

弥生

シマ子

朝子

太郎

賢子

一志

湖風

あや子

柳宏子

章久

愛論

年代報

弘治

十四郎

正子

幸子

寛之

午後三時金魚も昼寝動かない
睡魔来る午後の疲れはゆり椅子に

働いた喜びが履く午後の靴

向日葵の笑顔いくつもさえる午後

アメリカの一声日本の示す旗

議定書の承認迫る虫の声

音の無い声におびえるテロ恐怖

騙されてばかりどつこい生きている

さみじゆしや影だこちらへ来ませんか

まんじゆしやあの世この世の通せんぼ

自転車置き場の虫も残葉す

落暉の声一緒に聴こうよ茜雲

やがて入る墓地の雑草抜いておく

好き暮せば古い絆を断ち易し

風となれわがてのひらの荒れたれば

ポケットにふと潜りこむ秋の耳

きんもくせい背中めがけて降りかかる

意地とかいうかたちに割り箸は裂けた

激しさが薄れる潮が引くように

殺風景な部屋で女を脱いでいる

野の仏やんわり風が抱いている

不器用なあなたに残して死ねません

名月や月はなくともだんご食べ

割り勘の小銭さくさく掌にこぼれ

奥深い京の座敷でふたりきり

三幸川柳教室

三宅

保州報

土鈴振ると踊り連想する埴輪

一人立ちした子へ母の鈴止まず

糸子
里江

満寿蔵

千恵

東園

純

武庫坊

吉太郎

久子

恵子

昭三

比三

光穂

年代

義芳

孝一

芳子

静

美子

メ女

みち子

節子

和子

紫香

マリ子

碧

拍手喝采しあわせですと鈴が割れ
終章の鈴は和音で響き合う

風鈴の音色を削る都市砂漠

嫁という鎖に鈴がついている

徘徊のせつなく響く母の鈴

真つ先に妻の買物削除され

未完でも期待の星を買う試算

ミステイク墓地を買うのが早すぎた

ご覧あそばせメイド・インフランス

嬉しい日バラ一輪を買い添える

おおきにとすえ八つ橋買って京みやげ

いじめられこき使われて知恵が出る

なるほどの知恵が落ちてたコラム欄

影武者が知恵者すぎて疎ましい

札束によるめく知恵を責められず

満洲子
町子

利治

公子

純子

起世子

豊太郎

和代

和代

当代

千秀

正圃

栄之進

みね

章子

佳句地十選 (11月号から)

宮尾

みのり

冷静な意見の言える他人ごと

立場上転んだ傷は伏せておく

花道がなくとも並木道がある

中心をずれているから生き易し

プロの技こは力を抜くところ

限界を知った日迷いふつ切れる

喝采を浴びて未来が狂い出す

親の血を引いているのをつい忘れ

医者だけはしっかり行つて病んでいる

ときどきは大きな欠伸しておこう

遊子

茂登子

芳江

潤子

孝子

庸佑

希久子

不朽

諷云見

いわゑ

みね

章子

みね

章子

みね

章子

みね

章子

みね

章子

みね

章子

みね

章子

みね

章子

みね

章子

知恵の輪を幾つ外してゆく未来
原点にもどれば知恵の輪が解ける
人間の知恵が壊してきた自然
ライバルの牛歩やつばり気にかかる
ゆつくりと歩けば転ばないものを
切り札を抱いて歩いた倦怠期
退いた一歩で命拾ひする

先ず一歩踏み出してみる丸木橋
何もない笑顔ひとつを持ち歩く
道しるべ抱いて自立の日へ歩く
牛歩だがやっと止めた回り椅子
真っ直ぐに歩くと強い風当たり
歩く夢捨てずに励む車椅子

大原川柳社

矢内寿恵子報

台風一過明暗分ける稲の出来
蟻の宿避けて耕すねぎ畑
夢ひとつ残らぬ影を追うたとて
彼岸花めぐる季節の音を聞く
ひと言を抑えた自分褒めてやる
希い空しく実らぬままに喜寿の坂
勝てばビール負けてもビール野球好き
人生の山坡越えた丸い背な
神様より先に新米食べている
盆踊り曾孫につられ輪にはまり
涼風が秋を運んで天高し
猪と老父が稲田で知恵比べ
一日中笑い同居の灯をとくす
風鈴の音も淋しく秋の風

桂香 三千子 秀男 健三郎 保州 登美代 美子 正一 昭枝 さち子 鉄治 嘉平 かず子

古里で憩う老後へ湯がたぎる
食欲の秋です雀賑やかに
熟年も過ぎて余生の歩のゆるみ
いい出会いさがして街を蛇行する
栗が落ちて熊にはやれぬ意地比べ
恋が実って今日大安の荷目録
生き通し無償の愛をてのひらに

西宮北口川柳会

亀岡

残してはゆけぬ夫の冬帽子
老残は帽子で歳を隠してる
中之島日曜画家のベレー帽
角帽の君なつかしい写真集
愛用の帽子寂しげ亡父の部屋
オカリナの澄んだ音色に癒される
水澄んで道頓堀に鮎もどる
鎮魂への方向角を鳩がとぶ
遭難の磁石が北を指したまま
モンローの写真が貼ってある鬼門
どの方向が極楽ですか閻魔さん
こつちゃでちやうちやうとと爺と婆
地獄までつられて走るかも知れぬ
笛の音につられて峠越えたまま
成り行きにつられ風船手を離す
連れ立って泣き泣き去んだ口喧嘩
お隣につられてうちももう一人
何となくつられて買って大当り
焼鳥の屋台につられちよつと一杯
話し上手の彼につられて五十年

ひでの 絹子 あすなろ 妻子 はじ芽 寿恵子 哲子報 松煙 たず子 周信 メ女 庸佑 鹿太 奮水 富喜子 石舟 正坊 いわゑ いたる みつ子 哲子 能子 哲男 孝一 てる トミエ 光久

手鏡に笑顔映せばまだ若い
お遍路で心のくもり取りはらう
秋さくら天下国家が騒がない
独り身に爪噛む癖が治らない
わたしより老母カルチャーに無い詰め
病院をサロン代りに老婦達
五十年夫婦喧嘩も板に付き
無駄骨と知りつつ落葉掃いている
名月をこころ澄むまで見る独り
そろそろと第九レッスンする季節

竹原川柳会

時広

大好きな人よ遠くへ行かないで
僕の拳の中にいるのは父だろう
鉄拳の味がしみじみわかる歳
リストラへ旗も拳もないままに
野球拳あと一枚する勝負
少年の拳にナイフみせられぬ
コスモスの海へひらいてきた拳
父さんの拳骨消えて国が病む
ボクシング習えば喧嘩しなくなる
父親の鉄拳越えて息子は無礼
拳骨よりよく効く薬今は無い
拳骨を知らぬ子供は幸せか
仁王像拳かざして世を見据え
振り上げたにぎり拳をボケツツに
ちゅうちよなく拳が開く白桃よ
わたくしの拳の中のかぐや姫
年金の形にはまった趣味をもつ

無緑 五月 澄子 江美 曙蝶 美代子 春蘭 房子 義子 敬子 笹舟 一恵 栄子 厚宏 正美 汎生 節力 民恵 房子 不朽 孝枝

一路報

善人という肩書を持つ男

外務省員がすこし晴れてきた

石鎚山あつと言うまに霧晴れる

口で霧吹き障子を張った亡母思ふ

ふるさと行きの港を霧が邪魔をする

折らねば霧の島から逃れない

霧晴れて赤いコートがよく似合う

いつしんに霧をつかんで二蔵

霧の向こうに見つけた神と仏の灯

達磨さん拳が欲しい日もあろう

川柳ささやま

遠山

可住報

比呂子

年子

夏喜

貞子

静風

千代美

笑子

菁居

一路

相談に来て送られる千鳥足

黒豆へ足並み揃う村づくり

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

包丁が待ちこがれてる秋の味

不景気も祭り太鼓で活気つく

握り飯とつても旨い紅葉狩

翔び立つ日夢見て爪を研いでいる

妥協案紫煙の中で揺れている

旅の荷を解いて明日へ向きをかえ

徘徊じゃおまへんと花褒めてゆき

父親が流す涙の高島田

一呼吸遅れて此処は吹きだまり

変身は嫌でも生きる身の運命

発車ベルホームでハンカチ振っている

取れ秋だ娘にも送ろうコシヒカリ

よく匂うお隣り今夜サンマだな

サンマ焼きや風がツゲ口して回る

田園に黄金の風吹いてくる

人生を変える予感の風が吹く

子等集い風樹の嘆き夜も更け

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

隣には空気のような人がいる

遠くから聞いた隣の祝いごと

換気扇隣は今夜すき焼きだ

熱れすぎた隣の柿に気もめる

立話できる隣がある安堵

過疎の村みんな隣のおつき合い

芳郎

可住

吟笑

文仙

輝夫

賢

ひかり

八重子

坊太郎

いさむ

かおり

勝

あきら

治延

放任

よしみ

正雪

くに子

貞月

お隣の塀が気になる風通し

偉方の隣の席が空いている

お隣へ留守を頼んで旅に出る

隣家とは戸惑いもなく暮したい

欲すて優しい風が隣から

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

損得にうるさい割りに儲けてず

ブライドも意地もなかった加藤劇

天平の切れた顔らし阿修羅天

切れた者同士気が合う立飲み屋

ブライドの沁みた名刺を捨てかねる

裏方が好きで損など苦にしない

株で損競馬で損と嬉しそう

就職難ブライド胸にしまい込む

青テントで暮しながらの哲学書

ブライドを捨ていきいきと二度の職

ブライドも一週間の世界一

気位の高い分だけ縁遠く

雑魚なりにブライドもつて生きます

損しても夢があるからジャンボ籤

戦には負けだが国の誇り維持

人知れず情けが実り立直る

リタイア宅急便の声途切れ

クラス会捨てたブライド顔を出す

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太郎

蟋蟀の妬心ふつつ窓灯り

短文で余白をもった葉書の美

智恵子

康女

久子

正光

雄々

直次

祥風

馬洗

正安

よろろ

保子

敵子

雪子

緑骨

柳童

実勝

千里志

ヤギエ

黒兎

長一

信男

庄三

昭三

松茸を買う人それを見てる人

満月のあかりをかりて仕舞風呂

満月にいい汗をかくウォーキング

親心いくつになつても子は子供

満月に死んだ女房が来て座り

持病持つ夫に時々胸さわぎ

満月の夜は奇跡を待っている

ブラックコーヒー取ってません旨いんです

娘のおはこフルーツサラダの豪華版

満月に向かつて吠える茄子の馬

柿リングどんと飾つて秋祭

満月を合わせ鏡で母に見せ

いい人のままで終った太い眉

満月が古城のえにし偲ばせる

フルーツも旬の香を盛るフルコース

満月の下を消防車が走る

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

さり気なく我が外堀を埋める妻

四苦八苦生老病死愛別離苦

紙芝居声音に惹かれ歩いた日

浮雲に口に出せない想い乗せ

送り火の無事を知らせてチチロ鳴く

骨肉の神の恨みの止まぬテロ

口動くあいだ泣かずに抱かれてる

ゆつくりとベルトを外す滑走路

税金に奉仕しているホテル族

父と娘の涙が違うウエディング

鹿太

秋子

カズ子

信子

耕治

亀与子

尚利

孝一

イサミ

義芳

弘治

正治

満寿蔵

澄子

十四郎

柳宏子

紫香

川柳塔なら

坊農

柳弘報

鉄瓶の白湯が旨いと箱火鉢

燈花会はまぼろし綴る波枕

福伏せ白湯の吟味をかみしめる

娑婆の音独房の耳恋しがり

色白の美人にもどる白湯を注ぐ

一年坊主せつせと書いた綴り方

貧弱な耳で悪女になれもせず

聞く耳を持たぬ二人は炎えている

赤裸々に家庭を載く綴り方

耳よりの話どこかに穴がある

終章に綴る妻へのありがたう

母が近く葉と白湯を置いたまま

白湯のんで反省して二日酔い

ゆつくりと笑みがこぼれる遠い耳

茶断ちした亡母の心を偲ぶ白湯

茶断ちするほどの祈願は何だろ

たたんででも貧しい耳が立つてくる

思い出を綴りたくなる赤トンボ

米減らぬ暮らしへ少年がキレる

色も香も抜いてあなたの白湯になる

心象綴る即興詩人のペン走る

窓際の椅子で噂を聞き飽きる

盛り飯のお代わりをする太い指

傷心を綴って黒い血を止める

重い程カルテの綴り医者広げ

お米ひと粒祖母と探した遠い日々

白湯からは朝に暮らしの詩がある
DNA綴ると神につき当たる
聞く耳が二つあるから迷いだす

川柳会梨花

石上

甘い汁吸った背広が乾かない

少年の指さす星はよく光る

土壇場で母はお経を上げて居る

考える人のポーズで充電す

ラムネ瓶の中で少女のままポーズ

寝てからのポーズ責任問いません

躍動のポーズ五体は空を切る

一番楽なポーズをきめて雲に乗る

朝顔は幼い日のまま咲きつづけ

朝顔の蕾に明日の色が見え

減っていく朝顔の花数えない

朝顔を一輪活けて全部斬る

あなたこそ金蔓でさと言われたい

酒のみの親爺の蔓に染まぬよう

妻の蔓伸びて根元にぶら下がる

藤の蔓無手勝流の草書体

手蔓などいらぬ無学で生きた父

芋蔓のようにゆめかん職探し

金蔓と知らずに切つて捨てました

住む人へ忠実に這う壁の蔦

蔓バラの棘はブライドかも知れぬ

適齢期何処で調べたメール来る

パソコンに馴れて最近文字書けず

ケラケラと文かく私自閉症

悦子報

忠良

螢

典子

蛙

美ツ千

睦子

蟹郎

克枝

真砂

よしえ

芳光

石花菜

修

重忠

東雲

和枝

さみ子

ただし

幸子

求芽

節子

高栄

宏

和歌子

悦子 一夫
美惠子

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

たけし 庸佑 専平 フジみ 敏聡 昭平 久仁子 六志 一知 ダン吉 敦子 扶美代 模沓 耕策 絢子 柳宏子 満寿蔵 忠宏 昇 章司 泰子

洞 庵 一 壺 吐 来 さ と み 重 人 り つ え

京都塔の会

都倉 求芽報

求友高英典福幸 滿百庸芳紫克美正年武達春て
芽熙榮旺子子代 子合子佑子香治穗坊代子蘭る

啓宏萬博た弘英益
女子一のた之的

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

多静春操昭和信洋寛は
多哥由子恵子恵甫子々子じめ

川柳塔まつえ吟社

恒松 叮紅報

桂 茂 紫 柳 静
子 美 晃 し 歩 枝

寿美子 女

ただし
重人

紫香

周信

諷云兒

靖
巳

しげお

求芽

正坊

帆雀報

美智子

菜美

青 菜
美 美

三美

生 静
二 生

遊子

揆

美佐枝

一
眸

美智子

和代

喬水

螢

小鹿

帆船

ふみ子

説子

世二

養育費産んで貰える三人目
輝ける未来を築く子供産む
ミサイルを産む軍縮の価値を問
少子国子を産みなさい国のため
虐待にあの産声は忘れたの
ストレスを産む集团のと真ん中
命産む女やっぱりカンバイだ

城北川柳会

川久保睦子報

法事終え嫁の助けへ感謝する
星の数大阪の空増えて来た
渋滞なく帰れる仏古都の家
老いたれば今を生きるに精いっぱい
そんなことなんで聞くのよインタビュ
休日の一日何も予約なし
親友と台風見舞に花が咲く
吊橋で渋滞をするハイキング
カラオケの番だすそかにドレミファソ
振り分けの荷物まだまだ降ろせない
プラス指向ときめたらとても気が楽だ
ろうそくの涙あだした野無縁仏
向日葵の疲れを見たり朝ばらけ
父の荷を少し背負わす十八歳
その人が座ればみんな寄ってくる
ビール飲む大阪を見下ろして
行く夏にゆかたの袴をふと合わせ
関係がまだ断ち切れぬ蟬しぐれ
どたん場になれば女は強くなり
雨傘が行く先々でこぼす愚痴

幸子 あらた 小生 重忠 つや子 公弘 八千代
照子 東雲 トヨ子 登美子 とし子 昭子
はじめ 修 達子 綏子 柳弘 典子 春蘭 八重 しげお 志華子 求芽

一期一会また逢えるかも逢えぬかも
ゆつたりと流れ雲のごと生きる
饒舌な風はあちこちぶつつかる
善人の針千本に栓しとこ
記帳せずそつと日陰で送る女
組板に残るくらの知恵のあと
子雀がステップふんでの水たまり
華やかにオープンしたけど閑古鳥
白い花溢れるほどの夢を持ち
米百俵とりだんだん消えて行く

南大阪川柳会

吉川

寿美報

八十八ヶ所主人と巡る夢遂げる
村人が花を絶やさぬ道祖神
觀光もかねて札所のバスツアー
朝に夕べに老母は感謝の手を合わす
西雲大和三山響く鐘
信仰の山へ邪心を捨てて行く
信仰ててもお経の文句言えた亡母
ボケての形で落ちる滝しづき
お地蔵さんに手をあわすだけそれでよい
ひとすじの信仰えひめ丸を待ち
円滑に話がはずむ糸電話
円滑な暮らし支えた母の汗
円滑にスロースローの観覧車
風向きを読んで円滑な浮き世
酒少し無口な舌がよく滑る
血糖値下がれば全て円滑に
評判より実物よかったうちの嫁

一枝 朝子 千里 睦子 順三 あやめ あい子 政子 ひさ乃 公一
幸子 志華子 萬的 千里 柳伸 庸佑 章久 重人 修 憲太郎 度 遠野 柳宏子 朝子 ひさ乃 宏 シマ子

川柳塔みちのく

小寺

花臺報

評判でもの買うくせが治らない
グラビアを抜けてモダンが歩き出す
古希の坂モダンに老いてゆく帽子
残したい大正ロマン中之島
彼岸花一本みればモダンなり
出来るなら脳も整形してほしい
整形で美人が一人増えまして
神の名を汚す無差別同時テロ
信じざる瞳に風いだ海を見る
スムーズにいかん一言居士が一人居る
円滑な本尊さんのたかいびき
スカarfがちよつとモダンに変化させ
はめられる嫁よりはめる義母がよい
自在鉤むかしはなしが来て座る
満願に明日を占う絵馬を吊る
母の肌どこにふれてもやわらかい
掛算の出来ぬ女が乗せられる
溜池の底で木の葉は無垢になる
ほんまも木葉いよいよ短大生
遺伝子を秤に掛けている老舗
古釘にちちの野良衣が掛けてある
言いまわし上手いあなたに角がない
手間掛けた花はやっぱり裏切らぬ
さよならを女やんわり炎を孕み
やんわりと嘘で溶かした蟻り
いちにちを吊るす衣紋のミステリー
勝負師はいつも掛け算ばかりする

のぼる 雅文 寿美 直子 叡子 柳弘 東雲 ダン吉 珠美 三男 久子 朝代 洞庵 蛙痴郎 謙一 妙光 北歩 隼人 順風 慕情 銀波 ふさゑ 花匠 愁女 ツネ 井蛙

ハンガーにぶらぶら揺れる僕の首
往復の軒聞こえてくる雉魚寝
切り株にロダンの顔で腰を掛け
ピノキオの軒で森が動き出し

倉吉川柳会

松本よしえ報

どうしたら妻に勝てるか研究中
厠にも火気厳禁とはって有る

どうしたらいいかおみくじ買ってみる
どうしたわけか横腹がちくちく痛み

日本はどうした顔が青白い
木守柿役目大事と熟れている

火のように咲いてどうした曼珠沙華
どうしたと言つて下さい好きな人

孫を抱き泣き抜かれた柿になる
あすちぎろ朝になったらつぶれ柿

燃えたぎる朝の下は静かなり
柿あげて松茸ひとつもらっちゃやう

元氣出せどうした今日は飲まんのか
どうしてか靴のくせまで左より

案の定火の気があつて噂立つ
渋柿で良かったカラスつつつかれず

そよりともしめぬ会社が倒産する
火気厳禁やばい人には近寄らぬ

遺産分けしないどうした訳だろう
静かだとか悪いと言われそう

明日に備えて静かに闘志ためている
静かなブーム防毒マスク売れている

火気厳禁とかいて花火師火を使う

花 峯

一 花

乃 花

五 楽庵

紀 美子

瑛 子

智 子

菩 句

次 男

喜 美子

照 彦

悠 子

和 子

和 歌子

一 夫

博 文

秋 草

ゆり子

日出生

克 枝

よしえ

重 忠

火消しつばねむれぬままにもう一度
戸締りも火の気も父が見て回る
寒風に出来映え誇る吊るし柿
電磁器に火気の始末は頼んでる

愛されて静かに眠りつづけている
月の夜どうした事か星が無い

スナックでくれるマツチは危険物

岩美川柳会

石谷美恵子報

針の穴の展望あの世素晴らしい
漁師繼ぐせて四人目男の子

母の呼ぶ声に機嫌が見えている
五十年オイよりほかは呼ばれない

この峠越せば我が家も見えてくる
これからをせめて花咲く日にしよう

合掌の中からのち展かれる
我が罪は谷に埋めたら山になる

ゼザンヌの絵がひろがってゆく峠
賽銭をはずみ神様呼び寄せる

展望はあるのか町村合併論
ご時世が嫁が息子と呼び捨てに

数珠繰つてせめて女の業捨てて
山や谷あつてこの世が面白い

辿り着いた峠の薔薇が散つていた
わたくしの展望はまだおんな偏

谷底の花には毒がないらしい
展望はどうあれ金は貯めておく

ターザンが居た溪谷も破壊済み
峠まで草履一足履き潰す

久 子

螢

十三男

賀 寿恵

康 子

和 枝

完 司

忠 良

蟹 郎

裕 子

喬 水

孝 男

一 京

螢

和 歌子

克 枝

静 生

和 枝

節 子

雅 女

圭 一郎

公 乃

貧しい膳へせめて女の知恵を盛る
谷底を這つて出世の道探す
谷底を抜け出す縄をなっている
早口で妻が呼んだら恐ろしい

転がり落ちた谷がわたしの始発駅
遅くなつて峠を後にする

変声期呼ばれて親がハツとする
小春日だせめて歩けよ病む妻よ

せめてもの救いに罪を被つとく
淋しさとせめて派手目に秋を着る

横浜あおば川柳会

清水

券売機切符買う手をこわばらせ
小奇麗に掃除されてる無人駅

土産物選ぶコースも旅に入れ
父親に似た男性を連れてくる

園長も乗客になる縄電車
學歷を越えて一芸名を残す

故郷に未練を置いて始発駅
無人駅山野草咲き人を待つ

食品の日付に眼鏡かけ直す
園長はいつ幼い眼語がこぼれ出る

買うつもりない松茸を目が選ぶ
父さんを敬うしつけさせた母

飲み屋出来 駅から家が遠くなる
吠えられて一日園長がよろけ

母の日はいつも派手目を選んでる
園長は若さ溢れる長寿園

医者選ぶ患者を医者は選べない

た ぬ

大 漁

芳 光

一 瑞

季 芳

睦 子

よしえ

重 忠

多 哥由

美 恵子

潮 華報

笑 子

裕 峰

か づ子

和 可

亜 希子

八 重子

嘉 信

雅 子

敏

た だお

十三子

二 郎

今日子

かず枝

達 也

徳 三

不況風つらい人選強いてくる
好きな物カタログからと引出物
偉そうに教育論を子にぶたれ
二駅を日課にしてる万歩計
親よりも團長に子はよくなつき
團長は泣き虫の児をまず覚え
選り抜いたはずの服だに似合わない
改札を喜怒哀楽の顔が抜け
逆境で男の値打表われる
駅までの会話親子の溝を埋め
團長はトキの卵へ寝もやらず

川柳塔おおとり

原 みを報

蟬のようにとても大往生できぬ
妥協の風をととても欲しがる秋桜
うさぎにはとても勝てないはずだった
雲海がととても眩しい君の頬
大卒の嫁にはとても歯がたたぬ
したたかさととてもコスモスには勝てぬ
不況とはとても思えぬごみの山
飲む打つ買うとても喜ぶとは思えない
一日でこんなに太る胡瓜茄子
小回りの利きそうにない太い腹
肥えた目でゆがんだ私を高く買う
天高し肥えて田圃は黄金色
隣にもその隣にも独り者
いつまでもボツンと空いた隣席
うるさいな隣の家で餅つきだ
二階の窓開け放たれて昼寝中

純子 サト子 絹子 句多留 三郎 政勝 為佐子 広和 あらた 潮華 満秋 雄々 由多香 雅道 彰雄 宏章 風花 黙光 舍人 幸次郎 義弘 清子 真一 庸二 千秋 大鯨

お隣へちよつと得意な旅みやげ
サンGLASSをかけて隣の庭を見る
新幹線隣の席が気にかかる
隣にはいつも笑顔の妻がいる
マンションの隣と言葉すれ違い
母病めば家中声が細くなる
声変わりだんだん親を避けてくる
優しいがしつかり叱る母の声
ザラザラの心を洗う澄んだ声
子を叱る声は隣へつづぬけだ
内緒ごと大きな声で念押され
FAXの文字に恋しい声を聞く
戦いはいや大きな声でさげびたい

サークル檸檬

小林

一夫報

おまけだと思えば軽く生きられる
そろばんを弾いて人にはじかれる
おまけの余生開き直ってゆくつもり
胃の痛み医者より妻が知る処方
遊びごろと一緒のペンよ益よ
テレビショッポおまけの方が賑やかに
金借れずおまけに文句聞かされる
薔薇と鬱書けて忘れた字が多い
この命おまけと思う風の音
ミュージアム私の午後が沈んでる
あのホクロきつと女神のおまけだろ
空澄んでコスモス気まま風気まま
似たような傷を持つから信じ合う
左手は右手のおまけではないぞ

紀子 邦昭 道子 仁子 小生 登美 せつ子 一弘 和子 富貴子 孝子 艶子 房子 いわゑ 澄子 遠野 哲夫 希久子 智恵子 保子 みつ子 正坊 義子 あずき 靖巳 楓楽

川柳ふうもん吟社

杉本

李男報

フリーター首も振らなきや尾も振らぬ
彼岸花きつしり無縁墓囲む
父が逝く宇宙は微動だにしない
多発テロ神も平気じやおられまい
彼岸花哀しいほどに赤く咲く
ほんとうのボスは傍聴席にいる
妻家出平気でおれるわけがない
建前と本音平気で使いわけ
職業欄フリーターの字小さく書く
フリーターの焦り唇乾き出す
追い風に乗って愚かな夢を見る
子犬までなきびすの顔見て吠える
フリーター気楽に見えて荷は重い
主人を残しとても平気なで逃げません
酒飲めばなきびすになる癖がある
なきびすと言うな涙腺弛いだけ
フリーターゲームのような人生さ
定職にしがみつくよりフリーター
ぎつしりの財布ネオンへ足を向け
ぎつしりと順番待ちの地獄ゆき
テロリスト今も平気であるんかい
夏の日に蟻はぎつしり餌集め
骨董にぎつしり亡母を詰めて抱く
便利な世フリーターでも生きられる
フリーター増えて社会に認知され
黒星も平気でいけよ明日がある
人生はフリーターあり官吏あり

洋々 美恵子 彰夫 鬼桜 圭二郎 忠良 蟹郎 節子 すなお 一瑤 一京 益子 徹子 雅女 茂登子 志げ緒 健修 喬水 金祥 はつ江 静生 宗明 美雪 春名 のり代

胸中は見せぬ平気な顔で会う
出雲へと神がぎっしり神無月
愚かさを悟れ平和の鳩泣かす

長柳会

加島

由一報

臆病で妻を騙したことがない
正直な鏡に歳を見抜かれる

彼の世まで愛を逃けると決めたはず
正政法表たぬなら裏がある

ガード下裏人生にのみ唄がある
消去法縁が残した今の妻

北風が決めた今夜は鍋料理
バースデー妻にダイヤと決めました

修身の時間に習った一直線
正直な人で話がはずまない

裏切りの言葉が揺れる夜の街
決め球を一つ持つてる父の笛

優等生僕の悲しい裏の顔
裏の裏読んで迷路へはまり込み

口裏を合わせ病を軽く告げ
正直が桐の筆筒で泣いている

正直な影が冷や飯食って居る
表よく裏にくわしい野良の猫

この道と決めて嵐の中に出る
決めたのは可愛いえくばあったから

正直に言つてと嘘を待つ女

いすも川柳会

佐藤

治代報

欲望をカードにのせて地獄行き

きみえ

裕子

一枚のカードも持たぬ自己破産
カード手に橋の怖さに気づかない

穀

切り札がないから汗を積んでいる
着飾つたよそ行きの顔見違える

孝男

ときめいて外出をする妻の靴
外出で八十路の坂はあせらない

靖子

外出の妻を見直す薄化粧
外出を嫌う夫と五十年

正一

外出の赤提灯に油断する
外出の背中をボンと叩かれる

輝治

ぶらり出た父はそのまま帰らない
わけのあるシミをこしこし洗つて

敬二

明日また貌を洗つて出直そう
幸せなリズムで鍋を洗つて

たけし

洗濯をされたベン先よく走る
慕洗う亡母の背中を流すよう

ひろし

俺よりも銀座からすがうまい飯
にぎり飯知恵をいっばい詰めておく

和子

白い飯私の胸でこけている
明るい方へ一膳の飯盛り付ける

三和子

鯛焼きの夢は何時かは帰る海
鯛が跳ね今日は大安菊日和

芳野

花嫁の微笑み鯛の目が潤む
ブライドの高さで鯛が跳ねている

富美子

喜寿祝う鯛が見事にはねている

直樹

正子

潤子

幸雄

一慧

草丘

川柳さんだ

桂子

定年の辞令もやはり一行で
連休で近場の山を知りつくす

忠義

子を案じ親を案じてゆく絆
四面楚歌せて子供と囲む鍋

ひろし

多穂子

まこと

房子

治代

秀子

義良

陽子

蘭水

多喜

昌枝

翠洋会

文子

穴吹

寿美

尚士報

玲子

尚士

茂美

千梢

久子

真理子

美江子

春

歌子

靖巳

多賀子

志華子

満江

昭

舞夢

哲男報

俊昭

サクラ

千代

婦美子

敦子

藤朗

正和

歳子

開子

久恵

章子

忠

房江

哲男

情熱がちと顔出す古日記

停年後ボランテアに紳士燃え

体育祭元氣な声を風運ぶ

ゲートイン馬も氣にしている時雨

なるようになるとすまして明日へ生き

仕事一途とて寡黙な父でした

紙コップで乾杯をしてとばされる

腰痛も忘れて会えば孫を抱く

昔から婿という字は女偏

打てば響く性格だから損もする

見る阿呆何時の間にやら仲間入り

人間の争い嘆く青い月

追伸に念押す母の苦勞性

單身赴任疲れて服のまま寝入る

この期でも性善説を信じたい

へそ出しのルーツ月光菩薩かも

普段で目立っていますハイポーズ

はまゆう川柳会

中後 清史報

アクセサリー老いの心も弾ませる
控え目なアクセサリーにある魅力
控え目に哀しみ見せる喪の真珠
服装にアクセサリーのない素朴
綺麗さに花添えているアクセサリー
来賓のアクセサリーは白リボン
地味ながらいつも変わらぬ友が居る
頂点で輝き見える地味な人
地味な母あつてわが家は保たれる
地味派手はかまわず母は子の古着

伽羅 照子 さだを 蛙 石舟 恭昌 絹子 澄子 東雲 富子 周信 正雄 蕉子 正坊 日の出 太一 生米子 佳子 登 平和 光 泰作 美佐子 惠美子 サト美

わが人生地味であつたが悔いはない
お膳立てそれから先はお二人で
それから相手次第と下駄掛け
それからとついでのように本音告げ
それからとの言葉は涙ぐむ
がん告知それから家族みな寡黙
言い勝つてそれから続く肩の凝り
つまりそれでそれから追わぬ甘い夢

むらくも川柳会

毛利

手の届く距離で切れたる蜘蛛の糸
蟬の声悔いを残さず夏は近く
しのび寄る秋の気配にうろたえる
かなぐきの葉書ゴキブリ読んでる
今日は足五体のどれかが文句言う
八十路少し気取って派手になり
さわやかな音楽生きる力わき
夏休み熱戦つづく甲子園
戦争へ吊り手も召され蚊帳眠る
秋彼岸近づく頃に紫苑咲く
秋の花たつぷり活けて客を待つ
暑かった夏も過ぎれば蟬しぐれ
梅干せる老母みけんのしわよせて
親友の初盆参りまた涙
若返る世代の中で老いの意味
主のない庭に朝顔二つ三つ
喜寿過ぎて学び足りない事ばかり
病気でもベッドの上の旅プラン
人生が変る老境の身を感じ

雄造 苗視 雅一 修也 公治 利はん 清史 幸報 秀夫 惠美子 八重子 信夫 ゆき子 仲子 まさ子 定子 節江 幸子 島子 ます美 美喜子 ふさこ 昭子 喜美 明朗

川柳塔打吹

米田

幸子報

好きな酒チヨッピリほしい入院中
田舎つべい笑う先祖も田舎者
地方税空出張で泣いている
県民の声が聞える地方欄
初めてのキスチヨッピリ辛かった
チヨッピリと母の手紙で癒される
チヨッピリと貯めたヘンクリはけて逃げ
隠居して地方の隅で風まかせ
合併の話にずらりお役人
新調を着こんで旅行田舎つべ
チヨッピリの塩でまとめたいちごジャム
淋しいが地方育ちも気楽なり
封鎖された心の扉ノックする
酒五合チヨッピリ酔った真似をする
終電車ずらり疲れた顔が有る
利き酒にずらりと並ぶ女たち
肩書きがずらり名刺の裏を埋め
拘置所にずらり揃った外務省
さい銭五円で長生きとはつくり
私も松くい虫に殺される
県人会地方訛りが豆鉄砲
裏山に封じこめたい過去の罪
東北地方の県庁所在地言えますか
支持率が高い地方へ交付金
チヨッピリの愛と腹いっぱいの飯を
足を組む女チヨッピリ熟してる
快老は地方の水と空気がから

久芽代 重忠 幸香 京子 清 扶美子 楨元 賀寿恵 照彦 善江 よしえ 和子 龍枝 かつみ 泰山 一夫 博文 完司 石花菜 和歌子 しろう 順子 和枝 芳光 雄々 玲泉

— 121 —

また来いよ両方の手を握られる
両方の意見が合つて飲むビール
左きき両方うまく使いわけ

挟まれてストレス捨てる場所探す
新太郎は茶髪新婦は金茶髪

夏も冬も嫌いわたしが枯れそうで
両方でくしゃみしている噂好き

両隣りの立派な家に挟まれる
小さな蟻も大きな象も住む地球

両方で庇い合ひして凡夫婦
はろはろの過去帳で知る我がルーツ

父の辞書はろはろだけど宝物
はろはろとかさぶた落ちる夏の疵

はろはろになつて地獄を見る麻葉
はろはろの敗戦ばねに奮起する

はろはろが語る我が家の舞台裏
ボロボロの軍手にあげる感謝状

はろはろの辞書が抱えている
はろはろの枕に羊飼つている

はろはろの私を試す向かい風
はろはろでもいて下さいお母さん

許したらもつとみじめになつてくる
はろはろの彼を下取りしませんか

とよなか川柳教室
安藤寿美子報

大阪に生れ育つて八十路生き
織田作の面影残る古い坂
道修町いとはんこいさんこはんちゃん
たこ焼屋 割カンもめる老婦人

正一 利武 春蘭 桂子 一箇 美代子 淳一 昭子 栄一 千里 みよ子 いさお 耕策 史郎 志洋 絹歌 アキ 和樹 瑠美子 鐘造 淑子 扶美代 六点

投句箱 出口にも欲し通り抜け
飛天よりコマに馴染んだ客の足
月一度はあちやんと行く一心寺
通天閣見ながらめしの文学碑
好きやねん本音ひとすじ生きてます
初デート ライトアップの大阪城
太閤はん不況に知恵を貸してはし
芝罘香のバッグ残して母は逝く
大阪で生まれ故郷ないみたい
神さんやろ お初天神よう行くな
空からの梅田ビル街 旅終る
千中と梅新結ぶ新御堂
海外も大阪弁で通ず旅
大阪にうまいものあり関東煮
戎橋で今もゴールインするグリコ
難波から歩いた話よく弾み
今の大阪なんぞ忘れてるんちゃうか
一心寺拜んで回る百貨店
栗おこし一つもろおたいなり祭
いてまてと勝利呼び込む大阪弁
オカンには一目置いて父静か

満州 藍 舞夢 伽羅 節子 しずえ 道子 千津子 千代 勇治 豊子 馬洗 清山 幸代 きらり 春 緑骨 蛙 都代子 知香子 トシ子 森子報

約交をしたのは中身知つてから
亡夫の忌が透けるマスカットのみのり
本心を明かさぬ男の影法師
ちぐはぐな会話が浮いためるいお茶
間に目を凝らすと森は起きている
体形も中身も似てたぞ息子
思い出をはらはら落とす赤まんま
悔いばかり引き出し一ぱい抱えてる
どれほどの空か帰らぬ竹トンボ
喝采の中身は全部君のもの
CTで輪切りにされてゆく中身
仲直り今なら出来る処方箋
何本も坂を集めて子に渡す
大輪の花火の如きボクの思慕
策略を図る蜘蛛の幾何模様
あの人をわたしもやがて無人駅
中身ない話が続く地平線
冷蔵庫満たしておこ秋だから
見晴らしの良い家だけど息が切れ
坂道を下る若さにまだ未練
竹トンボ夢を飛ばした少年期
糸吐いて紡ぎ続ける夢空間
横道の方の話がおもしろい
赦されずだたら坂がまだつづく

鐘造 アキ 誠 夕太郎 初太郎 冬虹 キミエ 年人 扶美代 淳一 巳代一 欣之 としを 亮幹 文子 花梢 登秋 満秋 かなこ 東雲 ひろこ 宏 森子

口下手な人の中身に惚れている
うわ澄みをとれば見えてきた本音
友情の中味はきつとクリスタル
中身濃い生き方だった母の櫛
理屈ではない花の色虫の声
夕焼けの空間にある今日の幸

富柳会 池

一夫 紅紫朗 和子 けい子 一慧 和代

川柳クラブわたの花 吉村 一風報
好きやねん言うて見たいがおじけつく
Eメール仏の世界何時やろ
イチローにセバの人氣を奪われる

奈良良 友甫 正純

橘高薫風川柳句集

A5判・クロス装製本354頁

定価八〇〇〇円

お申し込みは本社事務所へ

影見えぬ蚊が刺してから落付けず
先祖から棚田守っている文化
やさしい母の言葉にやつと口開く
メル友の虫酸の走る顔にあう
人間の欲無くなれば南無阿弥陀
虫食いの野菜喜ぶようになり
ほろ酔いのほほにやさしく秋の風
携帯を持てば高まる好奇心
生きざまを刻み込んでる輝く目
奪うなんてとんでもない借りただけ
持とうかなテロに備えて携帯を
人間も犬も同じく年を取り
Eメール口下手恋の花咲かす
人生の谷間できたいいい噂
新年はむこさん迎え最高年
一合の酒に発破をかけられる
いい年でチャネル妻と奪い合い
同じ土なのにくろくで天地の差
表情に策描いてあるお人よし
紫陽花の策をろうせぬ七変化
凄く夢ひとり占める夜が好き
長生きはより沢山の命食べ

一 道
ますみ
トシエ
まさこ
いつみ
春江
知佐子
美代子
民子
明
八寿子
道子
宏司
ミツ子
道子
君江
宏
春子
一風
幸枝
隆盛
晴美

秋風や人恋しいと盗み酒
磨いても光らぬままに年老いぬ

俊子
恭一

ローズ川柳会

山崎

君子報

御無沙汰をしました村の御地蔵さん
無沙汰わびあなたの許へ今はまだ
今日を生きたのし思い出つくりつつ
薬包紙手持ち無沙汰の鶴を折る
ねじ巻の柱時計に有るロマン
捨てなくちゃ捨てねばならぬと言う呪文
丹波から山の幸がと便り来る
何ゆえか横一線をくずせない
満月が地球の沙汰をはき清め
神無月過去巻戻す絹の雨
脳に巻くネジが欲しいと思う日々
人がいいので愛されている左巻き
盛り場はご無沙汰秋の山歩く
巻き紙に何かが足りぬ活字なり
かならずしも敵は鉢巻しては来ぬ
ひさびさに友からとどく花だより
あれこれと言いわけ多し無沙汰の子

哲子
トミエ
貴代子
まさお
澄子
いわゑ
年代
武庫坊
君子
義子
笑子
雅子

川柳オホーツク三五〇号記念
第五回全国誌上川柳大会

題と選者(各題二句共選)

「切る」吉岡龍城 佐藤良子 斎藤大雄 松岡方子
「雑詠」大野風柳 村井兄也子 進藤一車 福井千鶴

締切 12月31日 投句料千円

発表 川柳オホーツク14年3月号(13名に賞呈)
投句先 〒090-0033 北見市番場町4-10

電話 〇一五七二四一 二四四四

主催 北見川柳社

柳界展望

られた。本社関係者の秀句は次のとおり。

んだ月 米澤 俣子
さわやかになろうなろうと
葉を落とす 藤田 泰子
趣味あつてほんとよかつた靴磨く 大内 朝子

《鹿野町長賞》
ひとりぼっちになつてしまつたけど走る 小島 蘭幸

大空を味方に男立ちあがる 大内 朝子

手拍子で迎えてあげるめでたい日 松原 寿子
甘く見た父権の拳効いてくる 清水 潮華

★第51回富田市民文化祭
川柳大会は、10月20日富田林中央公民館で開かれた。当日の本社関係者の秀句は次のとおり。

《鳥取県柳作家協会会長賞》
人の心を読んで無口になつていく 富山ルイ子
《川柳塔鹿野みか月会会長賞》
うれしい時の顔が一番むずかしい 原 みさを

★第34回吹田市市民川柳大会は10月28日、吹田市文化会館メイシアターにて156名の参加により開催、本社同人の秀句は次のとおり。

★しまね文芸フェスタ2001川柳大会は9月9日、安来市立中央公民館で開催。本社関係の秀句は次のとおり。

テロリストの肩にも止まる赤トンボ 高瀬 霜石
いつだって笑顔で越えてきたピンチ 河内 月子
大人にはなれず白線跳び越える 高瀬 霜石

★プレ夢フェスタとつとり
川柳部門大会・第25回鳥取県川柳大会は、10月21日鹿野みか月大会共催は、10月21日鹿野町立鹿野小学校体育館で開催された。当日参加者350名で、事前投句は一般281名、ジュニア475名。当日の本社関係の受賞者は次のとおり。

《文化委員会会長賞》
ところを聞く時ボンと音がする 鍛原 千里
真つ直ぐに進むひたいの傷だらけ 大内 朝子
《市長賞》

★第9回相生市もみじまつり川柳大会は、10月28日161名の参加を得て相生市総合福祉会館で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

夜光虫人に生れたかったのか 松本 文子
私に翼が欲しいワイン飲む 園山多賀子

★日本ビジネス川柳倶楽部記念川柳大会で、次の句が一位になり、10月14日表彰された。

言葉だけ躍る行草地に着かず 菊地 政勝

★東大阪市文化祭第29回市民川柳大会は、10月21日東大阪市立社会教育センターで開催された。参加者は75名で、当日の本社関係受賞者は次のとおり。

★第22回桜井市民川柳大会は、10月28日まほろばセンターで開催され、当日の本社

人間と暮らし畜生らしくなり 板垣 草丘
ボチの眼の高さでボチと笑い合う 八木 千代

★第51回岸和田市民川柳大会は、90名の参加により10月20日、春木市民センターで開かれた。当日の本社関係者の秀句は次のとおり。

俗世のこたつき見てる澄

予定より少し頑張る万歩計 福原 悦子

★第28回堺まつり協賛秋の誌上川柳大会は、193名の投句を得て9月30日に締切

《鳥取県知事賞》
夕焼けは其の日その日の神の彩 澤田 千春

《市長賞》

★第22回桜井市民川柳大会は、10月28日まほろばセンターで開催され、当日の本社

大空を味方に男立ちあがる 大内 朝子

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	14日(金)午後1時から 打つ・火事・におう	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 会 梨 花	15日(土)午後1時から 師・宿り木・義士・くくる 雑詠	鳥取労働者総合福祉センター(鳥取駅南) 1F会議室 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	15日(土)午後1時半から 鋭い・世話・掃除・達者	市立福祉総合センター 2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
城 北 川 柳 会	12月に限り休みます	〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 ねやがわ	16日(日)正午から 弱音・明るい・ユニーク 自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	16日(日)午後1時半から 関心・気前・暮れる・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 節目・ふっくら・未来 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(水)午後6時から 割勘・苺・ギャグ・刺激	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)正午から あかん・凝る・パート これから・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
東大阪市 川 柳 同 好 会	22日(土)午後6時から 送る・思う・お金・ドラマ	東大阪市立社会教育センター 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	23日(日)午後1時から 理屈・さらさら・例外 「ルール」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 塔 みぞくち	23日(月)午後7時半から 初雪・今年の出来事・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
京 都 塔 の 会	24日(月)午後1時から 札・無〇〇(2字熟語) 一切(さい)	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前10時から トップ・図る・ぎっしり・陶酔	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

12 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
富 柳 会	1 日(土)午後 1 時から 夕陽・それぞれ・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 市 川 柳 会	1 日(土)午後 1 時から ありがとう・危ない・突っ張る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 みちのく	1 日(土)午後 4 時から 鼻水・暗い・媚びる	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 唐津支部	2 日(日)午後 1 時半から どうせ・二・梅	唐津市 栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	6 日(木)午後 1 時から 目先・手・舞う	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町桶狭西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	7 日(金)午後 1 時から 舵・希望・雑詠 (A・B)	サンシビック尼崎 3F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 打 吹	8 日(土)午後 1 時から セット・友・評判	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	8 日(土)午後 1 時半から 逆風・体温計・騒音	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
川 柳 ふうもん 吟 社	9 日(日)午前 9 時から 没 句 供 養 川 柳 大 会	全労災ビル (11月号P.52参照) 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川 柳 塔 わかやま	9 日(日)午後 1 時から 面接・揉む・野望・師弟	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	9 日(日)午後 6 時から 次・ジंकス・ゆるやか・終る	山本コミュニティセンター内3F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	10日(月)午後 1 時から 業・明日・ひらめき・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	11日(火)午後 1 時から 酒・平凡・きびしい	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール蜷池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	11日(火)午後 1 時半から 歳末・隙間・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太

編集後記

☆10月号から予告しているように、12月から2月まで

本社句会の開催時間が変

る。各々の都合で昼のよい

人、夜のよい人と、功罪相

半ばするであろうが、くれ

ぐれも間違いないように、

午後1時をお願いします。

☆あつと言う間に21世紀最

初の年は終わろうとしてい

る。私ことで申し訳ないが、

今年は散々な年だった。他

にも色々あったが、ご丁寧

に二度も骨折したのがその

大きな理由である。もうす

っかり治つたが、つくづく

持つて生れた慌て者の性格

と、トシを恨めしく思った。

☆三月の右足甲骨折は、家

の階段の途中で、慌てて持

つていた本を見て踏み外し

たことによる。九月は、戸

外で低く張ってあったロー

プを、跨いだつもりが足が引つ掛り、転倒し左膝骨折。これまで「あいたた!」で済んでいたのが、トシのせいで大事になった次第。

☆以前も書いたように、ウオーキングも真面目にして

いるのに、今からこの有様

では、骨折→寝た切り→痴

呆のコースを辿るのでは、

と心細くなってきた。

☆そんなことで、以前どこ

かで書き写した「痴呆を防

ぐ八カ条」を見直した。①

高血圧を予防する ②低塩

分、低脂肪のバランスよい

食事 ③節酒・禁煙 ④適

度な全身運動 ⑤転倒しな

いように注意する(屋内の

方が多い) ⑥考えをまと

めて表現する ⑦幅広い興

味と好奇心を持つ ⑧つね

に明るい気分を持つ 以上

の他、私には⑨条として

「慌てない」の追加は不可

欠だらう。

(ふ)

ひとこと

おお神よ

同人に加えて頂いて半年目の平成十二年二月の本社句会に初出席。

双方に神が後押しして戦火

の句を当時の薫風主幹に月間賞に

選んで頂き、大変驚きまた感激し

ました。あれから一年半、同時多

発テロがあり、報復攻撃があり今

世界は騒然としています。太平洋

戦争では神国日本は聖戦を行い、

アメリカは神の加護で勝利しまし

た。大昔から戦いに神が無関係だ

ったことはありません。

元は一つだったユダヤ教、キリ

スト教、イスラム教の聖地争奪戦

に万一日本が巻き込まれたら、日

本の神様はどうなさるのか。神が

人を戦わせるのか?人が神の名で

戦うのか?いずれにしろ後押しし

だけは止めて下さいと祈るのみ。

神様のお陰で平和来るらしい

(北野 哲男)

○編集の手順も校正のイロ

ハも分からぬままに、一年

が過ぎた。編集部のお荷物

にならぬよう、心掛けて来

た積もりだが、お気付きの

点はご教示頂きたい。

○先頃、「川柳都大路」が

解散した。事情はどうあれ

23年間279号の実績が川柳界

に残したものを思い、同人

の方々の中心を思うと、切

ないものがある。

○奥山晴生主幹と初めてお

会いしたのは、一昔前のき

やらばく忘年句会だった。

当時私は一月は『新京都』

の新年句会を事始めに、全

国各地の川柳大会に参加。

12月のきやらばく忘年句会

がその年の川柳の締め括り

だった。

○句会、大会もさることな

がら、私は各地の川柳人と

の出会い交流が楽しかつ

た。大会で抜けた、没にな

ったと一喜一憂すること

も、川柳の醍醐味かもしれ

ない。

○しかし折角の各柳社を超

えて立派な指導者、先輩方

とご一緒させて頂く機会を

大切にしたい。そうして出

会った寺尾俊平先生、北川

純一朗先生、林 荒介さん

は鬼籍に入ってしまった。

○俳句の世界では結社を超

えての大会句会を考えられ

ないと聞く。川柳人の絆を

温めつつ、来る年も川柳塔

の和を大切にしたい。

(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（2月号）

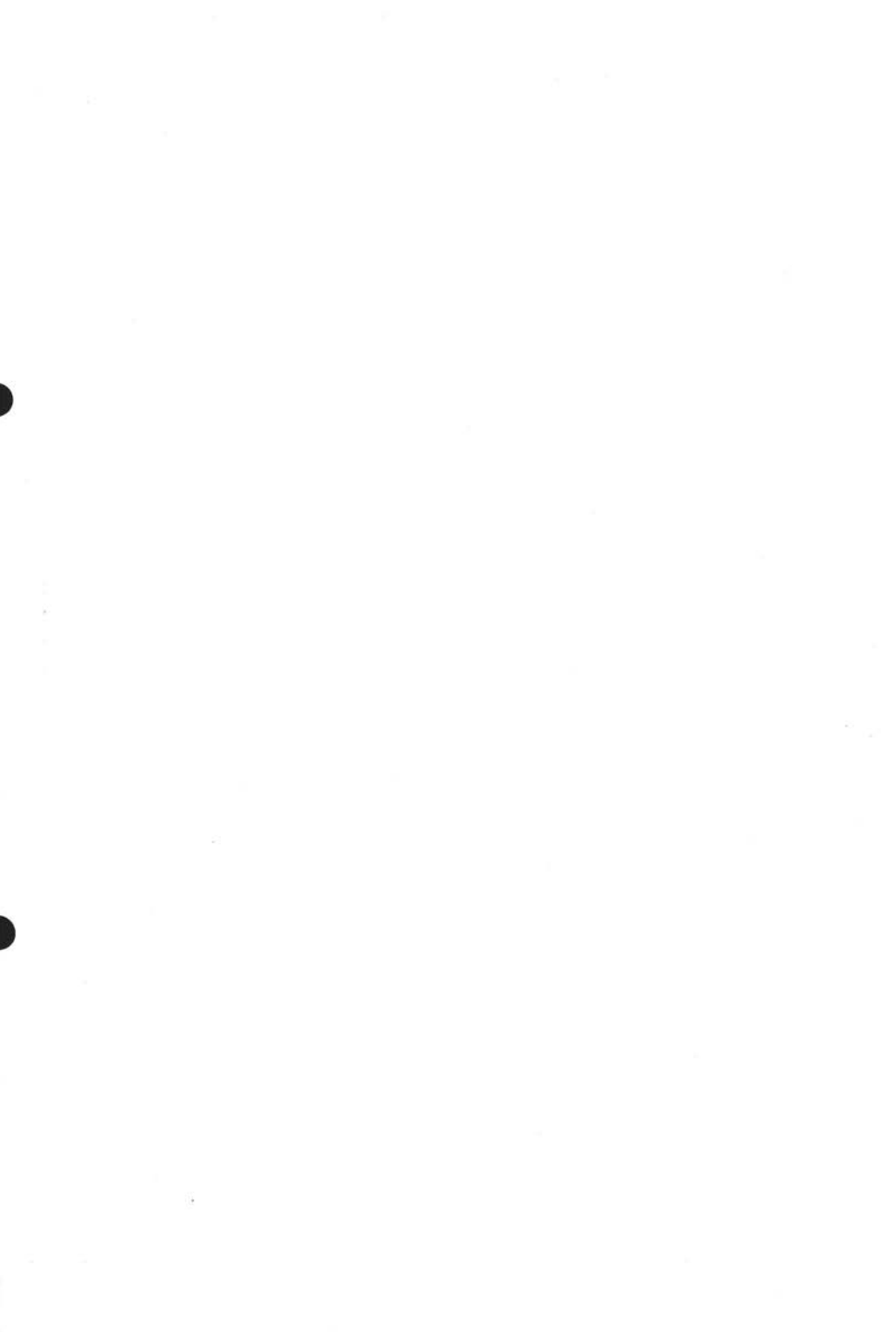
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

2月号発売 (12月15日締切)

川柳塔 (8句) 河内天笑 選
水煙抄 (8句) 板尾岳人 選
愛染帖 (3句) 波多野五楽庵 選
茴香の花 (3句) 宮西弥生 選
「どうせ」 川内叭笑 選
「二」 中原みさ子 選
「梅」 福原悦子 選
初歩教室 「ふらふら」 (3句) 吐田公一 担当

3月号 課題吟 「だ け」「乱 す」「くつした」
初歩教室 「サービス」

本社12月句会

とき 12月7日(金) 午後1時・2時半締切
ところ アウィーナ大坂 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「スポッポ」 江口度 選
「時」 藤井正雄 選
「越す」 宮崎シマ子 選
「化粧」 宮西弥生 選
「惜しむ」 河内天笑 選
席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

1月本社句会 15日(火) 午後1時から

兼題 「スタート」「運」「やがて」「許す」「期待」

夜市川柳募集

第7回「飲む」 両川洋々 選
ハガキに3句 12月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

お知らせ

いつもご愛読ありがとうございます。本社では『川柳塔』誌代を平成元年六月以来十二年半にわたって据え置いて参りましたが、その後の頁数増加に伴う諸経費高騰のため、平成十四年(二〇〇二年)一月号から定価を改定させていただきます。

新定価 八百円(送料別)
半年分 五百円(送料共)
一年分 九千八百円(送料共)
なお、同人費についても、同月から改定をいたしますので、ご了承をお願いいたします。

川柳塔社

定価 六百円(送料84円)

半年分 四千円(送料共)
一年分 七千九百円(同)

二〇〇一年(平成十三年)十二月一日発行

編集兼 河内権治

発行人 美研アト

印刷所 大坂市阿倍野区三好町二一〇一六

〒545-0005 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六六一六九一四番

振替〇〇九八〇一五・三三三六八番

第8回 全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。日川協年次大会・国民文化祭芸芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こぞつてご参加ください。

課題と選者（各題2句・連記）

- | | | | |
|-------|-------|-------|----|
| 「テロ」 | 柏原幻四郎 | 佐藤 一夫 | 共選 |
| 「トッブ」 | 吉田 秀哉 | 遠藤 繁 | 共選 |
| 「情報」 | 小林由多香 | 猿田 寒坊 | 共選 |
| 「丸い」 | 井原みつ子 | 佐藤 岳俊 | 共選 |
| 「許す」 | 橋本 天吞 | 鈴木 国松 | 共選 |

第二次選者

仲川たけし 吉岡 龍城 今川 乱魚 磯野いさむ
齋藤 大雄 大木 俊秀 早川 双鳥

参加賞

2000円（投句料・『平成柳多留』第8集代）
平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・
（社）日本青少年育成協会会長賞・（社）全日本川柳
協会会長賞・全日本川柳誌上大会賞・秀作賞

締切

平成14年1月20日（日）

発表・表彰 参加方法

平成14年6月・第26回全日本川柳沖縄大会
所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費
と共に左記へ（用紙は請求くだされば送ります）。

〒530-0041

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話

(06)

6352-2210

FAX

(06) 6352-2433

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178